

---

# 未来探偵クスメギ

よねたに

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来探偵クスメギ

### 【Nコード】

N3621Y

### 【作者名】

よねたに

### 【あらすじ】

未来を見ることが出来る大学生・久寿米木。

行く先々で面倒事や事件に遭遇するが、持ち前のチートな能力で事が起こる前に全てを解決？

そんな久寿米木の日常と非日常の物語。  
コメディファンタジー

## 第1話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

- 1、1秒で10分間先までの未来を見ることが出来る。
- 2、未来を見ると情報量の多さから脳に負荷がかかり、激しい頭痛と倦怠感に見舞われる。
- 3、そのため最長で30秒≡5時間先の未来までしか見ることが出来ない。それ以上になると、気絶してしまう。
- 4、この能力は途中で眼を閉じてしまうと、連続性を失う。

\*\*\*\*\*

皆さんは、友達、親、誰でもいい。

「未来を見ることが出来る」と、言われたら信じる事が出来るだろうか。

まあ、普通は出来ないだろう。

大抵の人は「頭がおかしい」とか、そういう風に思う。

ただ、僕はあえて言う。

未来を見ることが出来る――と。

そう、僕にはそんな能力がある。

正確に言えば、右眼に――。

僕の右眼で空間を見ると、1秒の間で10分先の未来までを見ることが出来る。

ただ、この能力を使うということは例えるなら、10分間の映像を1秒ずつの映像に分割して600の画面に映し出し、それを1秒間で全て見て理解するということだ。

恐ろしい情報量である。

そのため頭が割れそうな頭痛に襲われるので、滅多なことでは使

わないし使いたいとも思わない。

そんな理由から、最高でも30秒〓5時間先の未来までしか見ることが出来ない。

これ以上続けると頭が痛くて気絶してしまう。

そして普段は、眼を開いているだけでも発動してしまう能力だから、真っ黒なコンタクトレンズをはめて右の視界を奪って生活している。

そんな、微妙に便利そうで不便な能力を持った僕の話――。

\*\*\*\*\*

7月10日

「あー終わった」

僕こと久寿米木春希は今、暇を持て余している。

今は大学の講義が終わった直後。

今日はもうやることが何もない。

人間、ちょっと忙しいくらいがちょうどいいのかもしれない。

「とりあえず、部室行くか」

僕は部室へ向かうことにした。

一応サークル入ってるし。

部室は大学内の通称「C棟」と呼ばれる所にある。

C棟は6階建ての建物で、他にもサークルやら部活やらの部室があって多くの学生で大抵にぎわっている。

僕はこの大学のいいところは、キャンパスがコンパクトなので、

移動には大して時間がかからないことだと思っている。

そんな大学なので数分で目的地である部室のある5階、部室前に到着した。

僕は見慣れた部室の扉の横にかかっているサークル名の書かれたプレートを一瞥した。

趣味研究会——と、達筆な字で書かれている。

趣味研究会とは、その名の通り趣味を研究するサークルだ。

部員の持っている趣味をみんなで共有して、自分の趣味を増やし、なお且つ自分の経験値を増やそうではないかというのが目的である。

僕はその部室の扉を開けた。

中は割と広い作りになっていて、広さは15畳程ある。

部屋の中央には長い机とパイプ椅子があり、他に部屋には、テレビ、パソコン、ソファア、本棚などの家具家電が配置されていた。

「暦、早いね。いつもは僕より後から来るのに」

と、僕が中にいる人物に向けて言った。

中には部員である月村暦が無表情で椅子に座っていた。

暦とは小学校の同級生で、この大学に入った今年、再会した。

「あら、来ていたら何かまずいのかしら」

結構変わった所で、まるで小説の中の会話文みたいな喋り方をする。

僕はもう慣れた。

容姿的にも、まあこういう喋り方が似合わなくもない感じで、知的クールと言う言葉がとても似合う。

ただ、たまに痴的クールにもなるけど。

「いやいや、別に。ただ、珍しいなと思ってさ」

暦はいつもは僕の後から来る。

性格的にもちよつとイタズラ心みたいなものがある暦が先に来ていたら、何かあると勘ぐってしまってもしょうがないだろう。

「ふーん」

そういつて、暦は先に来て付けていたテレビを見始めた。いや、再び見始めた、か。

あ、つと。

ちなみにこのサークル、部員は5人。

5人以上いないとサークルの設立申請が出来ないから。

まあ、僕達以外の3人のうち、2人は完全な名ばかり部員で、もう1人はたまに来る幽霊部員みたいな感じ。

僕はいつもの定位置に座った。

暦の目の前に座ったが、僕は見向きもされない。

どれだけ僕に興味がないんだよ。

どうやら今日もあの幽霊部員は来そうにない。

しかたがない。

テレビでも見るか。

今やっている番組は昼の情報番組のようだ。

ミシマ（以下ミ）『えーでは次のコーナー行きましょう。次のコーナーはこちら！最近の犯罪事情！』

僕が見始めたテレビ番組では、司会者のミシマと言う人が張り切って喋っていた。

ミ『この時期、誰もいない別荘地や閑静な住宅街では、空き巣被害が多発しているそうです。と、言う訳で今日のテーマは空き巣です。』

そして、今日は特別に空き巣犯罪に詳しい方を呼んでいます。どうぞ！』

カメラが切り替わって別の人を映し出した。  
どうやら今日のゲストのようだ。

オオクラ（以下オ）『空き巣は強盗や殺人などと比べれば軽い犯罪に見えますが、立派な犯罪行為です。しかも、人がいない間を狙って物を盗むなんて卑劣です。同じ人間としてとても恥ずかしく思います』

ミ『と、言う訳で呼びしました。元空き巣常習犯のオオクラさんです』

オ『よろしく願います』

ミ『よろしく願います。最初のセリフ、ご自身の過去を全否定ですね』

オ『ええ、まあ（照）』

ミ『照れる所じゃありませんよ』

オ『では、さっそくですが、空き巣の手口について司会のミシマさんに説明してもらいましょう』

ミ『出来ればオオクラさんに説明していただけるとありがたいですね』

オ『あ、そうですね。では、どんな家が空き巣に入り易いか、私が

現地に飛んでVTRを作ってきましたのでご覧ください』

ミ『飛んではいませんよね』

オ『えー私は今、軽井沢の別荘地に來ています。では、歩きながら入り易い家を探していきましょう』

暫く、町を歩くシーンが続く。

オ『私の経験上ですね、煙突のある家が入り易いですね』

ミ『サンタですか』

画面の右上のワイプでは、ミシマさんが突っ込みを入れていた。

オ『あとは子供のいる家ですかね。冬に赤い服着て「メリークリスマス。ふおっふおっふおー」とか言えば入れてくれますし』

ミ『だからサンタですか』

『絶対に入りたくない家とがありますか（↑カメラマン）』

オ『そうですね……。全面ガラス張りのシースルーハウスとか』

ミ『どこにあるんですかね、そんな家。プライバシーも何もあったもんじゃありませんね』

オ『あとは、刑務所ですかね（笑）もう二度と住みたくない集合住宅ですね』



ミ『・・・』

オ『そろそろTVの前のみなさんが説明に飽きてこられた頃だと思いますので、ちょっと実際に空き巣に入ってみよう!』

ミ『急に教育番組みたいにフランクにならないでください。あと、入っちゃだめです』

..。ばりん。かちゃかちゃ。たったたたた……。すたこらすたこら…

数分後――

オ『と、言う訳で、あのような家は簡単に空き巣に入れちゃいます』

ミ『入っちゃいましたねー。と言うか手際が半端じゃないくらい良かったんですけれど、まさか現役ではないですよね』

うーうーうーうー(↑パトカーのサイレン)

ミ『なんか警察来ましたね。ひょっとしてオオクラさん捕まっちゃったんですか?』

『空き巣の現行犯で逮捕します(↑女性警察官)』

ミ『あー連れてかれちゃってますね』

女性警察官によって手錠を掛けられたオオクラはパトカーに乗せられた。

十数分後――

ミ『え、オオクラさん釈放されたんですか？』

オオクラがパトカーから降りて来た。

そしてパトカーは走り去って行った。

『どうやって釈放されたんですか（↑カメラマン）』

オ『あの女性警察官の心の中には誰もいなかったので、ハートを盗んじやいました』

VTRが終わった。

ミ『最後、それほど上手い事言えてませんでしたね。ではここからは、元空き巣常習犯のオオクラさんに質問していきましょう』

オ『どうぞ。なんでも聞いて下さい』

ミ『空き巣はどれくらいやられていたんですか？』

オ『そんなに長いあいだではないですよ。高校の時に始めて、高校生で4年間、大学生で7年間……なので11年間ですね』

ミ『いろいろと長いですね、空き巣だけじゃなく。ちなみにどれくらいの数のお宅に空き巣に入られたんですか？』

オ『そうですね・・・まあ1日4時間の週3回だったので、だいたい1300件くらいですかね』

ミ『そんなバイト感覚でやらないでください。というか1300ですか。合計すると幾らくらい盗んだんですか？』

オ『一軒当たり30万って言う所ですね』

ミ『じゃあ、単純計算で3億9千万ですね……て、3億9千万!？そのお金どうしたんですか!？』

オ『貯金しました』

ミ『真面目な小学生ですか』

そんな訳の分からない番組を見ながら心の中で突っ込みをしていると、

「ねえ」

と、暦が話しかけて来た。

何かを企んでいるらしい。

表情で解る。

声質で解る。

めっちゃこわい。

経験上、暦の「ねえ」に関わって来て良い事なんて一つも無かった。一体今回は何をさせられるんだ……。

とりあえず僕は答える。

「な、なにか」

ちよつとどもつてしまった。

「私ね、旅行が趣味なのよ」

聞いたことないぞそんなこと。

「初耳だね」

「そうね。言っていないもの」

「あ、喉乾いたな。お茶でも飲もう（棒読み）」

とにかくなんか面倒な事になりそうだ。

この場から離れよう。

作戦名「ちよつと飲み物を買いに外出てくる」！

「旅行へ行きましょう」

無駄な抵抗だったか。

曆は僕の「ちよつと飲み物を買いに外出てくる」作戦を無視した。  
仕方ないので話に乗っかる。

「……マジで？」

「ええ、マジよ」

うわー！そう来たか！

さっきのテレビで軽井沢とか言っていたからか！？

それで旅行行きたくなったってか？

ホントやだわー！

「……どこ行くの？」

「京都よ」

は？

そんな定番中の定番、京都？  
んなあほな。

暦なら「オーロラを見にグリーンランドへ」とか言いそうなのに！

「……良いんじゃないかな？ 京都」

「じゃあ、私は帰るわ」

「え、なんで？」

「家で予定を立てるから。あ、あとあなたは新幹線のチケットをよろしく」

「予定立ってないのに！？」

「行く日は決めてあるわ。8月4日よ。だからその日の午前中のチケットを2枚取っておいて頂戴」

「8月4日って夏休み初日じゃん……っていうかチケット2枚で良いの？ 一応部員5人いるんだけど」

「いいわ。5人と言っても2人は名ばかりで1人は私、嫌いだから」

あーそういえば、あいつとは仲悪かったな……。

「いいのかよ、後でいろいろ言われるんじゃないの？」

「そういう所が嫌いなのよね」

「じゃあ、呼べば？いろいろ言われなくて済むし」

「嫌よ。嫌いだから」

「もういいよ」

「あらそう」

と、言う訳でこの日はお開きとなった。

\*\*\*\*\*

なんだかんだあって8月4日。  
旅行当日。

東京駅のホームにて。

（新幹線内の清掃で待ってる）

「そういえば久寿米木くん、ここまで来て言うのもアレだけど、忘れ物はないかしら」

「本当にここまで来てって内容だな。ないよ、っていうか暦は僕の親か！忘れ物の事わざわざ心配しなくていいよ！」

「あら、ごめんなさい。気を悪くしたのなら謝るわ。ごめんなさい。」

もうしないわ。本当に申し訳ないと思っているから殴らないで」

「いや、そこまで卑屈に謝らなくても……。いいよ、気にしてないから」

「あらそう。じゃあ行きましょう、クズ。新幹線のドアが開いたわ」

「おいこらさらっと流すな。今、僕のことクズって言った？」

「うるさいわね。口を糸で縫いつけるわよ」

「だからって本当に針と糸を出すな！何で持ってる！」

「黙る気がない様ね」

「……」

「いい子ね」

こうして僕達は新幹線へと乗り込み京都へと向かった。

新幹線の中には、そこそこの人が乗り合わせていた。

まあ、夏休みだからこれくらいは普通か。

僕達の席は車両の真ん中あたりの右列で、曆は窓側、僕は通路側、曆の左側に座った。

この辺でもよく力関係が如実に出るな……。

同じ年齢なのに……。

「そういえば久寿米木くん。未来が見えるのだったわよね。それで普段はコンタクトレンズをしているのだったかしら」

席に着くなり、そんなことを言ってきた。

え、何で知ってるの？

誰にも言っていないはずだけど……。

いや、まて。

そういえば昔――。

「何を驚いているのかしら、久寿米木くん。いえ、今まで何となく恥ずかしくて言えなかったけれど昔みたいに春希くんと呼んだ方がいいかしら」

うわ！

なんか恥ずかしいな。

「いや、名字で呼んでくれていいよ。そんなことより、なんで眼の事を――」

「久寿米木くんが教えてくれたのよ。確か――そうね、小学2年生の頃だったかしら。私の嫌いなあの人――雨倉さんと一緒に」

「あ……あ――そういえば」

『間もなく発車致します――』

そして僕は新幹線の発車と共に、昔のことを思い出していた。

## 回想

僕がこの未来を見る能力に目覚めたのは、小学1年生のときだっ



た。

場所は確か家の自室だった。

はつきり言って最初は驚いた。

目の前の光景がありえない速さで進んでいくのだから。

そして僕はもの凄い頭痛に襲われて気絶した。

次に気がついたとき僕はまた、ありえない速さで進んでいく世界の中だった。

それもそうだ。

右眼を開けてしまっているのだから。

僕の右眼は開いていると無条件で発動してしまうものだから当然。

それに僕は気がついて慌てて右眼を閉じた。

なんとか頭痛が収まったが、一体僕の体に何が起こったのか全く理解できなかった。

でも気が付いた。

数分した後、さっき見たことが現実起こったからだ。

その時見たのが、棚から本が一冊落ちる映像で、それが数分後に起こった。

これはもしかして、と思った。

僕は未来が見えるのではないかと。

はつきりいって、嬉しかった。

人には出来ない事が僕には出来る。

ヒーローにでもなった気分だった。

正体を隠してこの力を使い、人を助けて、それがニュースになって――。

そんなことが頭を駆け巡った。

正体を隠す。

ヒーローだったら当たり前。

でも、やっぱり誰かに言いたい。

この能力のことを誰かに言いたい。

だから僕は親に言った。

「僕、未来が見えるんだ」って。

そして褒めて欲しかった。

褒めて欲しかったのだと今となっては思う。

「すごいね」と言って欲しかったのだと思う。

最初は親も信じなかった。

だから僕は信じられないくらいの頭痛に耐えて未来を見て証明した。  
未来が見えるってことを。

褒めて欲しくて。

でも、それは間違いだった。

人は、自分と異なる人——普通の人と異なる人に対してどこまでも  
冷たく、非情になれる。

それが例え、親と子供だったとしても。

親は僕を冷ややかな目で見た。

子供を見る——今までの眼とは違った。

今でもあの眼を覚えている。

とても嫌な、あの眼を。

僕は親に捨てられた。

それからというものの、親戚の家を転々とした。

そして、僕は出会った。

月村暦と雨倉しずかに——。

当時の僕は人に迷惑をかけないよう生きていた。

二度と捨てられないように、と。

そういう思いがあったから。

だから、捨てられて以来、誰にも自分の眼のことを言わなかった。

そして、なるべく社交的に振舞っていた。

人といるとき、自分もみんなと同じ普通の人なんだと感じられたか  
ら——。

二度と親に見られたような眼で見られなくなかった。

そんな時、特に仲が良かったのが暦としずかだった。

家も近所だったということもあって、よく遊んだ。

それが小学2年生のときだった。

それでも僕は誰かに自分の眼のことを話したいという衝動に駆られた。

誰かに話して僕のことを分かって欲しかった。

そして、話してしまった。

暦としずかに――眼のことを。

幾ら小学生と言ってもそんな突拍子もないことを簡単に信じたりはしなかった。

だから、僕は使った。

右眼を。

親に話した時のように。

すると暦としずかは――笑ってくれた。

「すごいね」と言ってくれた。

キラキラとした眼を僕に向けてくれた。

僕は始めて理解者を得た。

こうして僕達3人は友達であり、秘密を共有する仲間となった。

そして今年、再会した。

### 回想終了

「うん、思い出した。そういえば話した」

今となっては、右眼のことを話すと、その話が漏れてどこかの研究機関に拉致されるんじゃないかとか、いろいろ思う所があり話さなくなったが、当時とはとにかく理解者が――自分の苦しみを分かってくれる人が欲しくて話してしまった。

「一応言っておくけれど、私は誰にもあなたのことを話していない

から安心して頂戴。雨倉さんの方は知らないけれど」

いろいろと意図をくんでくれたらしい。

「ああ、ありがとう。それにしてもよく覚えていたね」

「普通は忘れられるものじゃないわよ」

まあ、そりゃそうか。

僕みたいなのがそこら辺をうろろうろついている訳ないか。

「で、その話がどうしたの」

そうだ。

なんで急にその話をしたのかが問題だよ。  
今話さなくても、ねえ。

「だから、そのせいで、右眼にコンタクトを入れて視えないようにしているのよね」

「ああ、そうじゃないと生活できないから」

僕の右眼は開いていると、自分の意志とか一切関係なく未来を見  
てしまう。

そしてそのたびに頭痛が襲う。  
そんな生活してられない。

「私が右に居ると顔をみて話せないでしょうから席を変えましょう  
という話をしたかったのよ」

「なるほど。暦ってそんな気配りが出来たのか」

「殺すわよ」

打てば響くタイミングで言われたのでめちゃくちゃ怖い。

「ごめんなさい。……でも、いいよ。気持ちだけ受け取っておくよ。もう慣れたから」

「わかったわ。久寿米木くんがそれでいいというなら私もこれ以上言わないわ」

この後、僕達は寝てしまい気が付くといつの間にか京都だった。

**第1話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ**

どーも、よねたにです。

初投稿です。

つたない文章で、すみません。

評価とかいただければ、参考にさせていただきます。

## 第2話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

「いやー京都ついたねー」

「ええ、新幹線は早いわね。昔、夜行バスで来たことがあるのだけれど、8時間かかったわ。それを思うと恐ろしく速いわね、新幹線は」

現在の時刻は昼過ぎ。

いつの間にか寝てしまって、結構慌ただしく新幹線を降りて――で、今だ。

「そういえばさ」

「なにかしら」

今まで気になって何回か聞いたけど、ずっとはぐらかされちゃってたけど、さすがに現地に到着したし、聞いてもいいよね。

「どこに泊まるの？日帰りじゃないって聞いているけど」

「ああ、今までねちねちと聞いてきたその質問ね」

嫌な言い方をするじゃあないか。

もう慣れたけどさ。

……慣れたってなんだよ！

あー！自分に自分で突っ込むとか末期症状だよ、もう。

「どこか旅館なりホテルなり予約したの？」

「してないわよ、そんなもの」

「予約したの？」の「予約し」あたりでかぶせて来た。  
最後まで喋らせてよ……。

「は？」

意味が分からない。

……ああ、友達がこっちにいてその家に厄介になるとか？  
高校の時の友達がこっちの大学に来ていて、一人暮らししています  
みたいな。

「友達の家とかに泊まるってこと？」

「友達？ 誰よそれ」

「えー」

「えー」だよ。

それ「えー」だよ。

じゃあ、どうするんよ本当に！

「現地調達よ。これが旅の醍醐味ね」

何を考えているんだよ！

夏休みだよ！？

人いっぱいいるんだよ！？

もし宿が取れなかったらどうするんだよ！



「……じゃあとりあえず、泊まるところ、探そう」

「そうね」

この後、本来なら京都タワーや東寺の五重塔やらを見て回るはずだったが、とんだコーディネーターのせいで当然のごとく潰れた。

そして、時刻は18..00。

「ええ、1部屋なら今すぐに準備が出来ますがいかがなさいますか？」

駅からかなり離れた薄暗い路地に面したしなびた旅館に行き着いた。

駅周辺のホテルは夏休みということもありどこも一杯だった。

今はその旅館の受付にいる。

「どうするよ」

とりあえず隣にいる暦に聞く。

基本的に決定権は暦にある。

……なんでだろうか。

「まあ、仕方ないわね。では、お願いします」

と言う訳で、今夜の宿決定。

旅館の名前「旅館 はなこ」。

なんか……こう……こわいなあ……。

トイレが行けなくなるような怖さがある。

この旅館の雰囲気的にも。

「ごめんなさいね」

と、唐突に暦が言った。

え、なにこれ。

暦が突然謝るなんて……。

まさか、呪い？

即効性のある呪いか！？

「せめて一言言っておくべきだったかしらね。驚かせてしまってごめんなさい」

ああ、そういうことか。

旅館の現地調達についての謝罪か。

心臓に悪いな、この旅館は。

全くもう、はなこさんめ！

「ああ、いいよ別に。ちゃんと宿が取れたことだし、気にしてないから」

少し嘘。

ちょっと気にしている。

まあ、言わないけどさ。

「あ、そう」

そんなことを話していると、後ろから声をかけられた。  
バツと振り向く僕。

目の前には誰もいない。

そんな、早速出たのか！？

「お部屋の準備が整いました。どうぞ、こちらへ……」

下を見る。

小さな老婆が立っていた。

あつぶないなー。

叫びそうになっちゃったよ。

僕達は老婆の後に付いて行き、少し歩いて部屋へ到着した。

廊下のところどころにある日本人形がとても気になるのは僕だけでしょうか。

「こちらがお部屋になります。どうぞ、ごゆるりとおくつろぎください」

そう言つて老婆は足音を立てずに去って行った。

「部屋は——まあまあね」

部屋は2部屋になっていて襖で仕切ることが出来るようになっていた。

広さはそれぞれ6畳と8畳程の和室。

6畳の部屋は出入り口と接していて、旅館っぽい机が1つと壁に掛け軸。

8畳の部屋は奥にあり、小さな冷蔵庫と金庫とブラウン管の年季の入ったテレビが置いてある。

ちなみに部屋は1階である。

「まあ、2人で使う分には問題なさそうだね」

そう言つて部屋を見渡しながらさりげなく掛け軸に手を伸ばした。そして、ぺらっとめくる。

「……」

戻した。

「ね、ねえ」

自分でも声が震えるのが解る。  
そんな声で暦を呼ぶ。

「なにかしら」

奥の8畳の部屋にいた暦が来る。

「ちょーっとさ、掛け軸の裏見てみて」

「なん——」

「いいから」

有無を言わず僕は言った。

僕は見てしまった。

もうやだ、帰りたい！

「全く我儘ね」

そんなことを言いながら、暦は掛け軸をめくる。  
そして戻した。  
表情を変えずに。

「……まあ、ありがちね」

「ありがちね、じゃなくてさー！」

なんでこの人はこんなに冷静でいられるの!?

僕がおかしいの？

だって――

「お札がびっしり何枚も貼ってあるなんておかしいでしょーが！」

そう、お札が何枚も貼られていた。

「だから、ありがちねって言ったでしょ」

あくまでも冷静に言う暦。

取り乱している僕がバカみたいじゃないか！

「だって悪霊退散とか書いてあるし！あんなの現実にあるなんて信じられない！」

「うるさいわね。舌を千切るわよ」

なんでよ！

これは正当な理由があって騒いでいるんだよ！

暦の心臓にはどれだけ毛が生えているんだよ！

「一回外に出て落ち付いてきなさい。さっき聞いたのだけれど、この部屋の外は庭になっていて、自由に使っているそうよ」

「……わかったよ」

そうだ、確かに騒ぎすぎたかもしれない。  
ちよつと頭を冷やそう。

そうだよ、霊なんているはずがない。  
いるはずがないんだよ。

そう言つて、僕は窓から庭に出る。

庭にはサンダルが置いてあつたのでそれを履いて軽くうろろする。

「ふう」

確かに落ち着いていた。

夏の夜風が気持ちいい。

庭には松の木やら小さな池やらがあつて小さいながらも日本庭園のようになつていて風情がある。

それにあの古びた井戸なんかも……。

井戸？

日本庭園に井戸？古びた？

僕の頭の中でその井戸と部屋にあつたブラウン管テレビが一瞬繋がる。

まっさかー……。。

……。

だだだだだだだだだ——がらっ！

僕は走つて部屋に戻つた。

「ね、ねえ……はあ……はあ……」

「あら、どうしたのかしら。「はあ、はあ」言つていて気持ち悪いから、用があるのなら早く言つて頂戴」

暦は掛け軸のお札をはがしていた。  
それはもう丁寧に。

一枚一枚。

「なんで剥がしてるんさ！」

僕は慌てて部屋の中へ上がる。

「だって、久寿米木くんがお札が気になるって言っていたから、剥がしているのよ。気遣いと優しさよ」

「そんな気遣いと優しさなら要らないよ！だめでしょ剥がしちゃ！」

暦の気遣いと優しさが怖い。

もっとまともな気遣いと優しさが僕は欲しい。

「そんなことよりどうしたの、久寿米木くん」

「そんなことっ——もういいよ。そう、井戸！井戸があったんだよ！」

「だから？」

お札を剥がす手を止めずに聞いてくる暦。  
その手、止めようよ……。

「もういいや。……はなこにさだこ……もうやだこの宿」

なんか韻を踏んでるチックになったか。

ともあれ今夜は眠れそうにない。

「ふう、やっと剥がし終わったわ」

お札をすべてはがし終わった暦は満足感溢れる表情だった。  
と、そのとき

コンコン

ビクウ！

なんだ……ノックの音か。  
焦ったー！

「はい」

暦が出る。

どうやら仲居さんのようだ。

悪霊の類じゃないようなので僕も入口へ。

うん、仲居さんだ。

それも結構美人さんだ。

仲居さんと言ったら大人っぽいみたいなイメージがあったが、この人はかわいらしい感じだ。

まだ、なんとなく幼さが残っている。

若いのかな。

あ、こっちみた。

にこっ

笑ったー！

仲居さんが僕に笑いかけてくれた！



僕はネームプレートを見る。

「中井」

仲居の中井さんか。

天職だな。

「お食事のご用意が来ました」

どうやら食事らしい。

「わかりました。運んでください」

暦がそういうと、中井さんは食事を運び始めた。

中井さんが僕の横を通るたびに甘いフローラル系の良い匂いがする。  
幸せだ……。

そして数分後。

「ではごゆっくり」

「ありがとうございます」

僕が言うと、

にこっ

また笑ったー！

めっさタイプだ！

この旅館来てよかったー！

と、暦がもう席について、なんかこっちを睨んでいる。  
ああ、早く席に付けということか。

テーブルの上にはそれなりの料理が並んでいた。

「私、あの中井さん嫌いね」

「え、どうしてさ。優しい感じのよさげな人だったじゃないか」

「旅館で香水はタブーでしょ」

「いいんじゃない？ かわいいからさ」

「……」

「なにかな」

「いいえ別に。じゃあ、いただきますしうか」

「そうだね」

料理はもちろん和食だった。

刺身やら活造りやら揚げ物やらとかなり豪勢だった。

こんな辺鄙な旅館でも出て来た料理に罪はない。

僕達はいただいた。

めっさおいしかった。

「もうこんな時間なのね」

食事をし終え、時間を確認した暦が言った。

ついでに僕も時間を確認する。  
9時になっていた。

「まあ、しょうがないんじゃないかな。いろいろあったし」

宿探し、とは言わずにぼかす僕。

こういうのが気遣いと優しさなんだよ。

貼ってあるお札剥がしちゃうとかじゃなくて。

「そうね。では、私はこれから露天風呂へ行こうと思うのだけれど」

そんなものがこのしなびた宿にはあるのか。  
初耳だ。

「へーそんなものがあるんだ」

「ええ、これもさっき聞いたのだけれどね。久寿米木くんはどうするのかしら」

「うーん。じゃあ、僕も行こうかな。折角露天風呂があるらしいしね」

「そう。じゃあ行きましようか」

と言う訳で、食後の風呂へ。

僕達は脱衣所の前まで一緒に行きそこで別れた。

脱衣所を見る限り誰もいないようだ。

そしてぱっぱと服を脱ぎ、今日一日の疲れを癒すために浴場へと向かう。

「へーこれはなかなか」

扉を開けると、なかなか立派な露天風呂だった。看板見たいのが立っていて、そこにはこの温泉が源泉かけ流しであることが書かれていた。

僕は身体をシャワーで流して湯船へ向かう。

「ふう」

ちゅぷんという音と共に湯船へつかる。

空を見上げると雲ひとつない。

そして、夏にも関わらず星がきれいに見えた。

なんかこう……いいね。

「たまにはいいね、こういうのも」

「そうね。なかなか風流ね」

僕のつぶやきに返事があった。

あれ、誰もいないはずなのに。

それから女の人の声みたいだったぞ？

さらにその声はどこかで聞いたような声だったぞ？

おかしいな、幻聴か？

「幻聴ではないわよ」

露天風呂の入口に背を向けていた僕は、恐る恐る振り返る。そこには見知った顔があった。というか、曆だった。

「心を読むなよ。っていうか何でここに？ここは男湯だぞ？」

そういいながら僕は腰にタオルを巻く。  
本来湯船の中でのタオル着用は厳禁だが。

「脱衣所が分かれているだけで露天風呂は混浴よ」

なんてこった！

そんなトリックが隠されていたのか！

「いくら夏でも裸で外に居ると少し寒いんだけど」

「え？」

「入ってもいいかしら」

「あ、ああどうぞ」

「では失礼」

そういつて暦は湯船へ入って来た。  
って！

僕のバカ！

今更ながら気付いたが暦は女じゃないか！  
なに一緒に入っちゃってるんだ！

改めて意識してしまった僕はまともに暦を見れなくなってしまった。

「あら、どうかしたのかしら久寿米木くん」

「いや、なんにもないよ！」

声が裏返った。

ちらりと暦を見る。

太ってもいないし痩せ過ぎでも無い健康的な身体。

細くてしなやかな手足。

背中まである髪を括ってあらわになっているうなじ。

そして、タオル越しにでもわかる胸。

「どこを見ているのかしら」

暦が突然話しかけて来た。

「どこも見えてないよ！」

慌てて視線を反らす。

そしてまた声が裏返った。

もう心臓がヤバイことになっている。

もう上がろう。

全然くつろげなかったけど。

「あーそろそろ上がろうかな」

「まだ入ったばかりじゃないの。5分も経っていないわよ」

ばれていた。

「……」

「……」

「そういえば、ここの宿、他のお客さんとかいないの？」

間が持たず聞いてみた。

「聞いていなかったの、久寿米木くん。受付で1部屋しか取れないと言っていたじゃない。他のお客さんもいるに決まっているでしょう」

「あ、そっか。じゃあ、どれくらいいるのかな」

こんな怪しげな宿に来る人の気がしれない。

……人のことを言える立場じゃないけどさ。

「この旅館には客室は5つしかないそうよ。だから私達以外には最低でも4人、多くても16人っていうところかしらね」

「なるほどね」

「あとは従業員ね。確か今日いるのはあの女将さんと中井さんが2人、それから料理長が1人と料理人2人と言っていたかしら」

このとき僕は、暦のいた「中井さんが2人」を「仲居さんが2人」と勘違いしていた。

まあ普通しちゃうよね。

そして、このことが後々面倒な事になる。

「なんでこの旅館に精通しているのか聞きたいところだけど、女将さんって？そんな人いたっけ」

そんな美人な人いたっけか。

「何を言っているのかしら。部屋まで案内してくれたじゃない」

あーあのよぼよぼの恐ろしげな老婆のことか！

女将さんって言うから美人さんを想像したじゃないか。

女将は美人と相場が決まっているのに。

と、ここで

「久寿米木くん、私も聞いていいかしら」

暦は前置きをしながら聞いて来た。

一体何を聞くつもりなのやら。

「なにかな」

「私は、小学生の間と、ここ数カ月の間しかあなたのことを知らないのだけれど、その間、私の知る限りあなたの持っている能力を使っている所を見たことがないのよ。私に――私達に証明したとき以外ね。その能力を使えば、競馬や宝くじやロトなんかで幾らでも稼ぐことが出来るのではないかしら。どうやら私の見た所普通の金銭感覚のようだし。どうしてかしら」

「ああ、そんなことか。ちよつと身構えちゃったよ」

なるほど。

確かに暦の言うとおりだ。

未来が解るのなら競馬で万馬券を当てることや、ロトで当選番号を知ることだって出来ない訳はない。

カジノに行けばばる儲け出来る。



「暦だったらどうする?」

「え?」

逆に聞いてみた。

「暦が僕的能力を持っていたとしたらどうする?」

「そうね。客観的にみたら使いそうだと思って聞いてみたものだけ  
れど……」

暦が暫くの間沈黙して考える。  
そして30秒程して口を開いた。

「いざ自分となると……わからないわね」

「どうしてさ。お金欲しくないの?」

「お金は欲しいわ。欲しいに決まっているじゃない」

がつつき過ぎだよ。

「だろうね」

でも、僕も同意見だ。

お金があることに越したことはない。

ただ、僕は未来を見てまで欲しいとは思わない。  
なぜなら――

「でも……よく考えてみると、つまらないわね」

お！

「と、言うと」

僕は暦に続きを促す。

「だって、働いてもいないのに一生楽に暮らせるって、やることがないじゃない。何をしたらいいのよ。一生遊んで暮せてこと？ 冗談じゃない。私はそんな生活すぐに飽きるわ」

「なるほどね。僕もそう思うよ」

そう、先が解ることは——解ってしまうことはつまらないのだ。自分の思い通りになりすぎる。

やはり、ある程度のスリルは人生の中に必要不可欠だ。僕はそう思っている。

「まあ、それ以前に——」

簡単な事だ。

「頭痛は嫌だろ」

「納得の理由ね」

こうして僕達はまた少し知りあうことが出来た。そして夜は更けて行った。

\*\*\*\*

場所が変わって部屋へ。

「明日のことなのだけれど」

唐突に暦が話しかけて来た。

僕は寝るために右眼のコンタクトを外そうとしていた。

「ん？」

「今日行けなかった京都タワーと五重塔、明日行ってみないかしら。もちろん明日回る分は明日行くから、少し慌ただしくなると思うのだけれど」

あーなるほど。

確かに今日の分を明日に回すとなると、計画的にちよつとキツキツと言う感じではあるが――。

「いいんじゃないかな。折角京都まで来たことだし。ところで明日は何処へ行く予定なのか聞いてもいい？」

「明日は二条城と金閣寺と龍安寺に行こうと思っているわ」

「これはまた有名どころだね」

「だめかしら」

「いいんじゃない？」

マイナーな所ばかり行かれてもつまらないだろうしね。そう思いながら僕は右眼のコンタクトを外す。

コンタクトを外すときは楽だ。

外した瞬間に眼を閉じればいいだけだから。

問題はコンタクトを入れる時だ。

どうしても裸眼の状態で眼を開けなければならない。

この時が1日の中で最もつらい。

僕は右眼を閉じながらコンタクトをケースにしまう。

「へえ、いつもそんな風にやっているのね」

暦が僕のことを興味深く観察していた。

「まあね」

そして、仕上げに眼帯を右眼に付ける。

「なるほどね。そうすれば意識して右眼を閉じる必要もないものね」

感心された。

「未来を見れる能力者さんの眼帯だからもっと物々しい物を想像したのだけれど・・・案外普通ね」

「悪かったね、普通で」

僕が付いている眼帯は市販されている白いガーゼのヤツだ。こう、革張りで黒くて——海賊がしているようなものではない。

僕はふと時間を確認する。

現在時刻23・00。

「まだ寝るには少し早いか。……ちよつと飲み物買って来る。暦は何か飲む?」

一応確認。

「じゃあ、お茶を貰おうかしら」

「了解」

そういつて僕が外に出ようと扉を開けると、

「あ……」

「え?」

目の前には仲居の中井さんがいた。

「え……あ……、失礼しました!」

そう言つて中井さんは立ち去つて行つた。

「……あれ? 匂いが……変わった? 風呂でも入ったのかな」

食事を運んで来た時の中井さんの匂いはフローラル系の甘い香りだったが、今の中井さんの匂いは柑橘系のさっぱりした匂いだった。

「にしてもかわいいわー」

最近、普段ずっとクールで毒々しい暦といるからか、かわいい人を見るとどうしても目が行ってしまう。

「どうかしたのかしら」

後ろから暦に声をかけられる。

まあ、入口に突っ立っていればそりゃあね。

「いや、なんでもないよ。じゃあ、お茶だったよね？買って来るから」

そう言って僕は部屋を出た。

\*\*\*\*\*

ぺふぺふぺふ（↑スリッパの音）。

旅館内を数分歩くと自動販売機が見つかった。

「あったあった。確か暦がお茶で……僕はどうしようかな……高尾山の天然水でいいか」

購入。

「……戻るか」

そう言って、戻ろうとすると前から人がやって来た。

「あ……」

「あ……」

中井さんだ。  
しかも……2人？

「え……え？」

どうなってんのこれ。  
ちよっと訳が解らない。

「どうかなさいましたか？」

中井さんが声をかけて来た。

「玲ちゃん、多分……」

「え？……ああ！すみません、私達姉妹なんです」

「へ？」

\*\*\*\*\*

「と、言う訳で私は中井玲といいます。一応姉です」

「私は中井理佳です。玲の妹です」

「あー姉妹だったんですか」

場所は1階の受付前。

僕は混乱した頭を整理した。

？この旅館の仲居さんは姉妹でした。

？名前を玲さん（姉）と理佳さん（妹）といいます。

？玲さんは25歳で普段はとある研究所で働いていて、夏休みということで帰省して実家であるこの旅館の手伝いをしている。

？理佳さんは20歳の大学2年生で、こちらも普段は東京の大学に通っているが帰省して実家のこの旅館を手伝っている。

？顔は姉妹にも拘らず瓜二つで僕には見分けがつかない。ただ、匂いが違って、姉の玲さんは柑橘系の匂い。妹の理佳さんはフローラル系の匂い。

？どちらもかわいい。

なるほどね。

来るときドアの前であったのは玲さんの方か。  
で、食事を持ってきてくれたのが理佳さんか。

「それにしても、よく似てますね」

本当によく似ていて、全く見分けがつかない。

僕の言葉に理佳さんが答える。

「よく言われます。ただ性格はかなり違うんですよ？」

「そうなんですか？」

「ええ。私なんか割とドジとかやっちゃうんですけど、玲ちゃんはそのうちの全くなくていつも完璧なんです」



そういつて理佳さんは玲さんを羨ましそうに見る。

「そんなことないわよ。私は理佳ちゃんの落ち着いた性格とかすごく羨ましいわ。私は落ち着きがなくて、だめよ」

今度は玲さんが理佳さんを羨ましそうに見る。

「えーそう？ 私からしたら玲ちゃんのアクティブなことかすごく羨ましいわ。玲ちゃん運動とか物凄く得意で。私はそういうの全く。確か玲ちゃん空手とか柔道とかかなり凄かったよね。大会で優勝とかしてたしね」

「勉強は理佳の方が出来たじゃない」

「でも玲ちゃん今では研究所勤務でしょ？」

なんか褒め合いになって来た。

そろそろ止めよう。

「お二人とも仲が良いんですね」

「そうですか？ 普通ですよ。ね、玲ちゃん」

「そうよ、どこの姉妹、兄弟でもこんな感じですよ」

そう2人は言った。

一人っ子の僕には、2人の関係がとても眩しく見えた。

\*\*\*\*\*

「ただいま」

部屋に戻って来た。

「お帰りなさい。随分と遅かったわね」

あーなんか機嫌が悪そうだなー。

「ま、まあね。はいお茶」

そういつて僕はお茶を曆に手渡す。

現在の時刻11時30分。

自動販売機に飲み物を買いに出かけるだけで30分の時間を労してしまった。

「ありがとう」

僕が手渡したお茶を開け、早速飲みはじめた曆。

「さて」

飲んだお茶をテーブルに置いて、改まった声で言った。

「ちょっと正座して頂戴」

「なん——」

「口答えは反抗とみなします」

「……わかりました」

しぶしぶ正座する僕。

座布団くらいは欲しかった。

畳に直正座は長くは持ちそうにない。

「なんでこんなにも時間がかかったのかしら。たかが旅館内の自動販売機に飲み物を買うに行くだけというものでしょう。久寿米木くん、あなたお遣いにも行った事がないのかしら。よければ私が直々に「初めてののおつかい」という全国区の番組にハガキで応募してあげてもいいのよ？それともなにかしら。大学生にもなってお金の使い方が解らなかったのかしら。それなら私が謝るわ。ごめんなさい。あなたのクズで無能な脳みそを理解しきれていなかったのだから。さあ、どっちだったのかしら？お遣いが初めてだったのかそれともお金の使い方が解らなかったのか。早く答えて頂戴。私は短気なのよ。というか私は久寿米木くんにお茶を頼んで30分も待たされているのだから、あなたを殺したくてもううずうずしているところなのだけだね」

……こっわー！

なに、殺したくてうずうずしているって！

本気か？

これはひょっとして右眼を使って僕の未来を見るべきなのだろうか。それくらいいの命の危機なのだろうか！

こうして、僕は命に危機を感じながら、京都旅行1日目を終えた。ちなみにこのあと、寝たのは深夜3時を過ぎた頃だった。

あと、足が痺れてのたうちまわった。

## 第2話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

第2話です。

次の話で事件らしい事件が起こる予定です。

まだまだ粗い文章で読みにくいとは思いますが、  
読んでもらえるとうれしいです。

### 第3話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

8月5日。

京都旅行2日目。

朝。

「あー寝不足じゃーいぼけーい」

あー頭が回らない寝足りない瞼が重い！

今何時だよ……7時か。

これは起きにやまずいな。

確か朝食が7時からこの部屋に運ばれてきて、で――

「久寿米木くん、今起きたのかしら。随分とお寝坊さんね」

そういつて暦は僕の頭の上で腕を組みながらくつくつと笑っていた。

忌々しいな、このつ。

「あと3分待って。朝食はちょっと待ってもらってさ」

あまりにも眠いので暦に反抗してみる。

「あーなるほど。わかったわ、久寿米木くん。私、その辺も理解しているつもりだから」

「……なんのこと？」

布団の中から暦に聞く。

あー布団最高。

「3分もあれば朝勃ちも治まるわよねってことよ」

！！

「うーん眠気が吹っ飛んだね、今の発言でさー！」

眠気すっきり気分最悪。

「あらそう。お役に立てて良かったわ。あ、別に今の「立てて」の部分に変な意味はないから安心して」

「僕はそんな所まで意識していなかったよ……」

暦の下発言のお陰で目が覚めた僕は、とりあえず布団を片付ける。そしてふと疑問を持った。

「そういえば暦さ」

「なにかしら」

受付に電話して食事を持って来てもらおうよう頼み終わった暦が振り向く。

「一体何泊するのかな」

今までこの質問をしてこなかった僕も相当抜けてると思うが。

「2泊3日よ」

普通だ……。

僕は顔を洗いに洗面所へ行く。

きゅっきゅっ。じゃー。さぼっ。ばしゃばしゃ。すばすば。すばすば。きゅっきゅっ。ごしごし。

と、

コンコン

どうやら食事が来たようだ。  
対応早っ！

扉を開けて暦が応対する。

「食事をお持ちしました」

ちらっと入口を確認する。

中井さんだ！

どっちかはわからないけど。

「わかりました。では、中へ運んでください」

「かしこまりました」

僕の横を中井さん（どっちかはわからない）が通る。  
この匂いは……。

「理佳さん、おはようございます」

「おはようございます、久寿米木さん」

にこっ

かわええなあ！

理佳さんが作業をしながら聞いてくる。

「それにしても、よく分かりましたね。両親もたまに間違えるというのに」

「分かりますよ。人を――しかもこんなにもかわいらしい人を間違えて呼んでしまうのは失礼ですからね」

本当は匂いでだけど。

「あ、ありがとうございます……」

照れてる理佳さんかわいーなー、もう！

「あ、そういえば……」

と、理佳さん。

「どうかしましたか？」

「いえ、その……」

僕と話をしながらも手を休めることなく働く。

ちゃんとした人だなー。

僕と同じ大学生なのに。



「失礼を承知でお聞きしますが、昨日お会いした時も眼帯を付けていらっしやいましたよね？ですから、その――」

ああ、なるほど。

昨日も眼帯を付けていて今日も眼帯を付けている。

と言うことは、目の病気か何かなのかと言うことが聞きたいということか。

まあ、眼帯付けて旅行している人なんてそうそういないよね。

「いえいえ、別に病気とかじゃないので大丈夫ですよ。ただのアイマスクの代わりみたいなものですので」

そういうと、理佳さんは安心したように、

「あ、そうなんですか？よかったー！昨日玲ちゃー姉が久寿米木さんの眼帯を妙に気にしていたので私も気になってしまっ……」

玲さんが僕の事を気にしていた？

良い事を聞いた。

朝から良い気分だ！

「まあ、そうですね。旅行する人で眼帯を付けている人なんてそういませんよね」

そんなこんなで食事が運び終わり……。

「では、失礼します」

理佳さんは行ってしまった。

「久寿米木くん」

おっと、すっかり存在感を失っていたがもう1人いたんだよね、この部屋。

振り返ると奴がいた。

目の前に。

「さーて食事も来たし、食べよ——」

「久寿米木くん」

「……はい」

昨日もこんな展開あったような気がするのは気のせいではない気がしないでもない。

「随分とこの旅館の仲居さんと仲が良くなったのね。全然気が付かなかったわ」

「……立ち話もなんですからとりあえず座りませんか？」

「そうね。私もじつくりと聞きたいものね」

ぬかった！

墓穴を掘ったか！

というわけで、とりあえず席に着く。

構図は僕の正面に暦がいる。

「……」

「……」

あー沈黙と視線が痛い。

よっぽど自分の存在がないものとして扱われたのが腹立たしいようだ。

「さて、仕切り直しましょうか久寿米木くん。随分とこの旅館の仲居さんと仲が良くなったのね。知らなかったわ」

「いや、そんなことは別にないと思うけれどね。昨日の夜、僕が飲み物を買に行った時に少し話をしたただだよ」

「その話のお陰で私に飲み物を献上するまで時間がかかったのかしら」

「まあ、そうだね」

献上て。

「なるほどね。昨日――今日の説教は私がずっと喋りっぱなしだったからそのあたりの理由を聞きそびれてしまったわね」

「……」

「少し話が逸れたわね。それで、久寿米木くん。どんなお話をしたのかしら」

「いや、特には。普段何しているのかとかどんな性格なのかとか。それくらいだよ」

「それだけ？」

「まあ……だいたいは」

「そう。……じゃあいいわ」

「え、いいの？」

「ええ。これからは私の事も頭の片隅程度には置いておいてもらえ  
るとうれしいわね」

「……まあ、じゃあ一応はじめとして謝っておくよ。存在をないも  
のとして扱ってしまい申し訳ありませんでした」

「すこしカチンとくる言い方だけれどまあいいわ。ご飯が冷めてし  
まうわ。頂きましょう」

「そうだね」

そして食事はつつがなく終了。

食べ終わった食器類を廊下に出して、外出の準備を始める。

暦の立てた計画だと、30分ほどしたらもう外にでなければなら  
ないらしい。

と、その前に。

いつまでも眼帯をしている訳にはいかない。

コンタクトを付けなければ。

僕はテーブルの上にコンタクトのケースを出して、眼帯を外す。

「ふう」

1日の中で最も嫌な時間がやってくる。

コンタクトを付ける際、必ずどうしても裸眼の状態で眼を開けなければならぬ。

僕の右眼の未来を見る能力は、自分の意志ではどうにもならず、右眼を開けると無条件で発動してしまう。

そして、未来を見るという情報量の多さから脳に負担がかかり激しい頭痛に襲われる。

ふと、周りが静かになったと思い視線を上げる。

外出の準備をしていたはずの暦がテーブルの向かいに座ってお茶を飲みながらこっちを見ていた。

どうやら準備は済んだらしい。  
当然か。

いつから起きていたかは分からないけれど、僕より早く起きて、着がえとか大体終わっていたしね。

「どうぞ、続けて」

両手の平を上に向けてどうぞのポーズをする暦。

なんかやり難いな……。

まあ、仕方がない。

僕は右眼を開ける。

「っつ——!!」

その瞬間、これからこの部屋で起こる未来の映像が脳へ流れ込む。  
そして激しい頭痛が襲う。

それに耐えながら、コンタクトレンズを入れる。  
眼を開いてから入れるまで、その間約5秒。  
と、

!!

「どうかしたのかしら、久寿米木くん」

僕はある未来を見た。

それは――

「……つつー痛いねー……やっぱり。毎日の事で5秒程度なら気絶しない程度には慣れなけれどね」

10秒を超えるとその頭痛がひどくなって、さらには倦怠感も出てくるけれど、5秒とか数秒なら激しい頭痛だけで済む。

「そんなことより、なにか見えたのかしら、久寿米木くん」

そんなことって……。

酷いな。

もう少し心配してくれてもいいのに……。

まあ、いいや。

今はそれよりも――

「40分後に、タイガーマスクがこの部屋にやってくる」

「は？」

暦も驚くんだ……。

僕はその事実に驚いた。

「ちょっと言い方が悪かったかもしれないね。正確にはタイガーマスクのマスクをかぶった奴がこの部屋に侵入して、いろいろと漁る

んだよ」

僕は出来るだけ正確にこれから40分後に起こる出来事を伝えた。

「タイガーマスクって、作品中の孤児院「ちびっこハウス」の主人公伊達直人が動物園の虎の檻の前でケンカをしたのをきっかけに、悪役レスラー養成機関である「虎の穴」にスカウトされ、その養成機関「虎の穴」での殺人トレーニングをこなす日々の中で、伊達直人は「自分と似た生い立ちを持つ孤児達に、同じような苦しみを味わわせたくない」という想いを次第に抱くようになり、虎の穴を卒業後、「タイガーマスク」としてプロレスデビューをして、収入の一部を孤児院へ寄付するようになり、最初の内は「虎の穴」へフアイトマネーを支払った、自分の手取りの範囲内での援助を考えていたが、自分の出身施設である孤児院「ちびっこハウス」の金銭的現状を知り、虎の穴へ支払っていたフアイトマネーの半額分まで寄付せざるを得なくなり、そのことに腹を立てた「虎の穴」が育て上げたにも拘らずフアイトマネーを支払わないタイガーを裏切り者とみなし、タイガーを倒すための刺客を次々と送り、伊達直人はタイガーマスクとして、孤児院の為に戦うという漫画作品の主人公で、現実世界では、アニメ作品「タイガーマスク2世」のタイアップとして誕生したプロレスラーの、あのタイガーマスクの事であっているのかしら？」

「僕は、「どうしてタイガーマスクについてそんなに知っているのかしら？」と聞きたい気分だけれど、まあ、そのタイガーマスクであっていると思うよ」

長っ！

本当になんでタイガーマスクについてそんなに詳しいんだよ。

「知りたい？仕方がないわね。教えてあげる。私には実は兄がいてね。その兄が漫画やアニメに詳しいのよ。あまりおおっぴらには言いたくないのだけれど」

あーなるなる。

とうか兄妹いたんだね。

初めて知ったよ。

小学校時代も知らなかった。

地獄絵図的な旅行になるかと思っていたけれど、意外と良い旅行になるかもしれない。  
なんとなく、そう思う。

「それにしても」

暦が言う。

「どういことなのかしらね。私達の部屋にタイガーマスク（仮）がコソ泥の真似ごとをしに来るなんて」

確かにそうだ。

暦はともかく、僕は礼儀正しく毎日を生活していて誰かに恨みを買われる覚えもない。

そもそも、京都に今まで来たことだってない。

暦はあるらしいけれど。

「暦、何かした？誰かに恨みを買うようなこと」

僕にはそれしか考えられないね。

「まさか。私を誰だと思っているのよ」



月村暦だよ。

口が無駄に頭がよくて物知りで、その知識で人をねじ伏せることに長けた口の悪い奴だよ。

でも、「私を誰だと思っているのよ」と言われれば、まあそうだよな。

口が悪くて悪態をつくのは親しい人にだけだよな。

この旅館でも女将さんのあの老婆にも敬語を使っていたし。

そう考えると、見知らぬ人から恨みを買うようなことはないか。

じゃあ一体――。

「久寿米木くん」

「なにかな」

「ひょっとしてという、可能性の問題なのだけれど――」

前置きをして暦は言う。

「久寿米木くんの能力がらみ、と言うことは考えられないのかしら」

「……」

なるほど。

考えられない事でもないか。

確かに、僕的能力はどんなことにでも利用しようと思えば利用できる。

それが例え、人助けだろうと金儲けだろうと犯罪だろうと。

「つまり暦は、どこかの誰かが僕の能力の事を知り、利用しようと

考えている、と?」

「簡単に言うそうね」

「うーん……」

僕的能力が覚醒してから今までこういった事はなかった。

だから今回、これから起きる事がどういう意図を持ったものなのか判断できないな。

ただの旅行者を狙ったコソ泥なのか。

それとも、暦の言う通り僕的能力を狙っているのか。

あるいは、それ以外の目的があるのか。

「久寿米木くん。本来ならば私達はこれから起きる事を知らないのだけれど、あなたの能力で知ってしまったわけね。と、ここで2つの選択肢が出来るわ。?このまま外出して観光、そして帰って来てから警察に通報して普通の被害者として被害届を出す。?出かけたと見せかけて、タイガーマスク(仮)を待ち伏せし、私達で犯人の目的を暴くなり捕まえるなりする。さて、どうしたらいいのかしらね」

警察に任せるとすると、もしタイガーマスク(仮)が暦の読み通り僕を狙ってきたとすると色々と厄介だ。

しかし、普通のコソ泥という可能性も捨てきれない。

どうする――。

「とりあえず……念には念をと言う事で、ね。それでどうかな?」

「分かったわ」

そういう訳で、僕はタイガーマスク（仮）を待ち伏せることにした。

\*\*\*\*\*

話し合いから35分後。

僕は1回旅館をでて観光に出かけた風に装って、非常口を使って部屋に戻り、奥の8畳間の押し入れの中に2人で隠れている。そして、襖に小さな穴を開けて、そこから部屋の様子を見ていた。

「そろそろね」

「ん……」

ザリッ

と、ドアに鍵が差しこまれる音がした。

「来たわね。信じていなかった訳ではないのだけれど、久寿米木くん、本当に未来が見られるのね」

「めちゃくちゃ頭が痛くなるけどね」

こんなときでも暦は余裕があるな。  
呆れつつ僕は感心した。

ガチャ

とうとう、中に入って来たようだ。

この旅館では、外出している間に部屋の整理をしてくれたり、ということはない。

そして、厩も隣にいる。

不法侵入者であることに間違いはない。

「久寿米木くん。随分おもしろい状況になっているわね」

「否定はしないよ」

タイガーマスク（仮）が部屋の中に入って来た。

想像していたよりも恐怖心はない。

なぜなら――

「和室にタイガーマスクのマスクを被った人がいるというのは滑稽ね」

と、言うことだ。

違和感ありまくりだ。

ちなみに、タイガーマスク（仮）とか言っているが、服装は普通の男物の服で、ジーンズに長袖Tシャツだ。

そんなことを小声で話していると、タイガーマスク（仮）に動きがあった。

……（仮）面倒臭いね。

「久寿米木くんの荷物を漁っているわね。……いえ、漁っているのではない様ね。なにか……付けているわね」

タイガーマスク（仮）が手に持っているのは何だろうか……。よくわからないけど、とにかく手に収まるサイズのものだ。

それを僕のバックに取り付けている。

「そろそろ行きましようか。私が注意を逸らしておくからその間にあなたが入口の方へ行って鍵をかけてきて。もし逃げられることになっても多少の時間稼ぎにはなるはずよ」

「わかったよ。気を付けてね、相手が何者か分からないから」

「それはお互いさまよ。あなたも気を付けて。相手はなんと言っても……タイガーマスクなのだから」

そういつて暦は笑った。

こういう、かわいい笑い方も出来るのか。

また一つ、暦を知った僕だった。

「では、1、2、3で私が襖を開けるから、久寿米木くんは一気に行って。すぐ後に私も出て、なんとかするから」

「策はあるの？」

「ええ、もちろん。じゃあ、いくわよ。……1……2……3！」

ガラッという音と共に僕は一気に駆け出す。

タイガーマスク（仮）は一瞬でこちらに視線を向けて来る。

しかし突然の事に反応は出来ていない。

そのすきに、僕はタイガーマスク（仮）の横を通り出入口へ。数秒で辿りつき、すぐに鍵をかけた。

暦は？

僕はすぐに振り向いて状況を確認する。

暦は――。

「エルボーバット！（↑暦）」

肘を曲げて、前へ高速で付きだす。

タイガーマスク（仮）は一瞬でギリギリ躲せる位置まで後ろへ下がって躲す。

そして、今度はタイガーマスクが――

「ローリングソバット！（↑タイガーマスク）」

横回転しながらジャンプし、高く上がった右足の裏で、顔を蹴りつけようとする。

暦はそれを上体を逸らすことで避ける。

「なっ――どうなってるの、これ……」

暦はタイガーマスク（仮）と闘っていた。

ここは後楽園ホールか！

### 第3話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

どーも、よねたにです。

第3話です。

結構無茶な展開かな？と自分でも思いますが、読んでくれたら幸いです。

次回の話は少し先になります、と先に言っておきます。

それでも1週間のうちに書けたらなとは思っていますが。

では、また。

#### 第4話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

場所は旅館の部屋。

時刻は朝9…30。

そして、この部屋にいる人物。

僕（久寿米木春希）、暦（月村暦）、タイガーマスク（仮）。  
状況。

暦VSタイガーマスク（仮）

僕、静観。

ちなみにタイガーマスク（仮）は普通の男物の服を着ている。

ジーンパンに長袖のTシャツだ。

……どんな状況だよ。

っていうか！

「なに、暦。その戦闘能力。どこで手に入れたのさ」

今はにらみ合っているだけだが、いつまた戦闘になるか分からないので、巻き込まれないように離れた出入り口付近から聞く。

「何年か前にかじっただけよ。気にすることないわ」

「かじったレベルじゃないよ、明らかに」

本物の格闘家の戦闘だった。

奥義とか継承して、師匠を乗り越えたりしてきたんじゃないか？

暦の戦闘能力について話していると、

「なるほど。まんまと罠にはまった訳か。未来を見る能力でも使ったのか？ 久寿米木」



ボイスチェンジャーによって変えられた声で、タイガーマスクが言った。

「ええ。まあ、未来を見たのは偶然だったのだけれどね」

「なるほど。やはり事実だったか。情報としてかしらなかったが……本当だったか」

「情報？それは何処からの情報なのかしら。あなた自身？それとも他にも仲間がいるのかしら」

「言う訳ないだろうが、と言っておいた方が敵らしくていいかな？」

「敵らしいかどうかはともかくとしても……それはそうね。愚問だったわ」

あれ、なんか僕の話なのに僕、蚊帳の外じゃないか？だからと言って話しに割って入る気にもならないけれど。別にビビってるという訳じゃないんだよ？だって、この2人めっちゃ強いんだもの。と、ここに来てすこし空気が変わる。

「さて、本来ならば、このまま帰るつもりだったのだが……。とんだ邪魔が入った。しかもかなり出来る奴だ」

「タイガーマスク（仮）に褒めてもらえるなんて、光栄だわ」

偽物だけどね。

「どうやら口も立つらしい。……仕方がない。本気を出させてもらおう」

あれで本気じゃなかったのか!?

このあと2回変身を残しているとか言わないよね?

「あら、じゃあ私も少し本気を出そうかしら——っ!」

暦は不意に目にもとまらぬ速さでタイガーマスク（仮）の顔面に蹴りを入れる。

「っ!」

不意の事に反応が遅れたタイガーマスクではあったがkarouじて直撃は避ける。  
が……。

「こんなことが現実……?」

と、僕が言ってしまうような事が起きた。

なんと蹴りを入れた際の風圧でマスクが破れたのだ。

バトル漫画かよ……。

しかしこれでタイガーマスク（仮）の正体が分かる訳だ。

一体誰なんだ?

「まさかここまでやるなんて……驚きだわ」

ボイスチェンジャーが壊れたのか、顔を隠すために下を向いているタイガーマスク（仮）から地の声が聞こえる。

口調も変わっていた。

そしてその声が――。

「あら、あなた女性だったの。気付かなかったわ。では、服の下には詰め物でもしているのね。よくそれで動けたものね」

至って冷静な暦。

対照的に僕は、

「え、女？ウソでしょ！？」

取り乱していた。

しかし、徐々に冷静になっていくにつれて少し違和感を覚えた。

「ん？」

「どうしたの、久寿米木くん」

「いや、さっきの声、どこかで聞いたような……」

「あら、知り合い？」

「いや、分からないけど……」

でも、最近どこかでこの声を聞いた気がする。

本当に最近なんだよ。

どこだったかなー。

「思い出せないの？昨日話したばかりなのにね、久寿米木さん」

「え？……昨日？……あ、え、まさか！」

僕にヒントを出したタイガーマスク（仮）がマスクを外して、ゆっくりと顔を上げる。  
その顔は――

「中井さん！」

中井さんだった。

まだ、どっちはわからないけれど。

「あら、仲居の中井さんだったの。全く気が付かなかったわ。何回か会っていたのにね」

暦がそういうと、仲居さんは一瞬訳がわからなさそうな顔をするが、すぐに理解したらしく表情を戻す。

「ああ、そういうことね。あなたとははじめましてよ、月村暦さん。私は中村玲。中村理佳の姉よ」

なるほど。

玲さんだったのか。

確か昨日空手や柔道をやっていたとか言っていたし。道理で強いわけだよ。

僕はちらっと暦を見る。

多分理解できてないんだろうな。

「久寿米木くん、このよく分からない状況を説明してくれないかしら」

案の定理解できていなかった。

暦は仲居さんが2人いるってことしか知らないようだし、仕方がないか。

僕は、暦にこの旅館の2人の仲居さんは顔がよく似た姉妹で、姉がこの玲さん、妹が食事を運んでくれた理佳さんであることを説明した。

「この旅館はそんなややこしいことになっていたのね。気が付かなかったわ」

暦はすぐに状況を理解したようだ。

そして、臨戦態勢のまま僕のいる出入り口の方へ来る。

くるなよ。

あぶないじゃないか。

言わないけど。

「では玲さん。ここは刑事ドラマのようにいろいろと語ってくれないかしら。ほら、動機とかここまでの経緯とか、ね」

状況を全て理解した暦は大分余裕が出て来たようで、玲さんを軽く挑発するように言った。

それに対して玲さんは、追いつめられたこの状況でも余裕を見せていた。

「いいわね。じゃあ、教えてあげる」

そう言って笑う玲さん。

その笑みは昨日、理佳さんと仲よさそうに話していた時の笑みとは程遠いものだった。

そして玲さんは語り出した。

刑事ドラマの犯人のように……。

「私が久寿米木さんの能力について知ったのは、私が普段勤めていた研究所でね。そこで、誰が、と言うことまでは特定できていなかったけど、そういう能力を持った人が日本にいる、って言うのを耳にしたのが最初ね。それが先月の話。もちろんそんな話、私は信じていなかったけれど。でも昨日の夜、私がこの部屋の前を通った時、あなた達の話声が聞こえてきてね。そこで聞いてしまったのよ。あなたに未来を見る能力があるって話を。私は研究所での話を思い出したわ。それでひょっとしたら、本当なのかもしれないって思ったわ。これが、あなた——久寿米木さんの能力を知っていた理由ね。次は動機ね。どうしてこんなことをしたのか。その理由。実は私——いえ、私達姉妹は、孤児院の出身なのよね。今まで育ててもらった両親は里親ってわけ。だからと言って、嫌いじゃないわよ。むしろ感謝しているし、大好きよ。で、その出身の孤児院が最近の不景気で経営出来なくなってきたのよ。私は、お世話になった孤児院がなくなるというのは耐えられなかった。それに、孤児院の子供達の事もあったしね。だから、少しでもと、研究所で働いて得たお金の一部を寄付していたの。でも、最近はそれでも足りなくなってきたしまったの。そんなときにあなたの能力を知った。あなたの能力があれば、お金を幾らでも手に入れることが出来る。そして、未来を見る能力を持った人が、今すぐ近くにいます。こんなチャンスはこれから二度とないかもしれない。だから私は、あなたの荷物に発信器と盗聴器を付けて家を探そうと、こういうことをしたの。ちなみに、家を知った後は無理やりにでも入って、あなたに能力を使ってもらうつもりだったんだけどね。嫌だと言ったら刃物でもちらつかせてね」

タイガーマスクのマスクを被っていたのには、そんな理由があったのか。  
っていうか、タイガーマスクそのままみたいな理由だ。

なるほどね。

孤児院とその子供達を救うため、か。

悪いことに利用するとかではない分、まだ良かったかな。

でも、この能力は使うことが出来ない。

僕の為、と言うのもあるけれど、この能力にはまだ誰にも言っていない代償があるから――。

「これで全てよ。だから久寿米木さん、私と孤児院とそこにいる子供たちの為に、その能力を使ってくれないかしら。ただ、お金を手に入れさえすればいいから、ね？」

動機やらなにやらを目一杯喋りつくした玲さんは、僕にプレッシャーを与えながらお願いしてきた。

できれば、代償について言及せずに、引き下がってもらいたいのだけれど……。

なかなか引き下がりそうにないな。

代償――。

僕に頭痛や倦怠感が出るだけでなく、能力を使うと、僕の寿命を縮めること。

そして――。

人の為にこの能力を使うと、僕の寿命だけでなく、未来を見ることによって利益を得る人感じる人の寿命も同時に縮めてしまうこと。能力によって周りに及ぶ変化の規模が大きければ大きい程、縮める寿命も大きくなる。

今回の場合だと、僕と玲さん、そして孤児院の子供達の寿命を縮めてしまう。

恐らく、数年から十数年――。

僕は出来れば、命を盾にしたくはない。

さて、このことに触れずに引き下がってもらえるだろうか。

「久寿米木くん、どうするの？あなたの能力なのだから、あなたが判断して。私はそれに付いて行くわ」

……とりあえず、僕の意志を伝えるか。

「玲さん、僕は……使いたくはない」

「どうして？何か理由があるの？」

鋭い！

理由があるけど、まだ言いたくありません！  
んーどう切り返すか……。

「本来ならば、こんな能力この世にないはずだろ？だから――」

「でも、あるじゃない。せっかくあるんだから有効的に使ったらどう？」

正論だ。

ある物を使う。

当たり前的事だ。

と、ここで暦が助けに入る。

「まず、私は久寿米木くんの味方よ。久寿米木くんが使いたいというならばそれに賛成するし、使いたくないというのならばそれに私は賛成するわ。それで、中井玲さん。あなたは知らないだろうけれど、この能力を使うと、久寿米木くんにも負担があるの。久寿米木くんがとても苦しいことになるの。それでも、久寿米木くんに能力を使えと言うのかしら」



「でも死ぬわけではないんでしょう？ だったら使って欲しいわね。こっちは子供達の生活が掛っているのよ！」

それでも引かないか。

仕方がない。

正直に話すか。

「玲さん。僕が能力を使うと情報量の多さから脳に負担が掛って、激しい頭痛になるのは、暦の言うとおりです。でも、実はそれだけじゃないんです——未来を見る代償は。まず、僕の——寿命が縮まります」

「久寿米木くん、私はそれ、初耳なのだけれど」

「まあ、誰にも言ってなかったからね。そして、それだけではないんです。特定条件——人の為、という条件が付加されると、未来を見ることで利益を得る人感じる人にも、僕と同じ代償があります。つまり、今回の場合で考えると、僕と玲さんと子供達の寿命が縮まります」

「な——」

さすがの玲さんも困惑していた。

そして暦は玲さんと同じく困惑しながらも、怒っているような、悲しいような、どちらともとれない表情をしていた。

「では、久寿米木くん。あなたがコンタクトレンズをするときも、寿命を縮めていたのかしら。それも毎日」

「一応そういうことになるけど、秒数としては数秒だから寿命で言

うと数分単位だから大したことはないよ。感覚で解るんだ。命が減っていく感覚があるからね。でも、連続して何十秒とかあるいは、未来を見てから都合よく環境を大きく変化させたりすると、数年から十数年、寿命が縮む。今回はこれにあたるね。」

「それでも、死ぬわけじゃないのよね？死にはしないのよね？」

最悪の事態になるのかどうか。

玲さんは聞いて来た。

「恐らくは、としか言えません。正確にどれくらいの寿命が減るというのは分からないので」

「死ぬ危険がないのなら、能力を使って」

「使えません。言いましたよね？あなたの命も、子供達の命も減ってしまふんですよ？」

「そんなこと分かっているわよ！どうして！？どうして使わないの！？その能力を使ってくれば多くの子供たちが助かるのよ！？」

「それでも、です」

「たった数年……多くてもたったの十数年なんですよ！？今すぐは死なないんですよ！？だったら使ってよ！その能力で子供達を助け——っ！」

パン！

暦が、玲の言葉を遮るように頬を打つ。

「やかましいわね。それはあなたが決めて良いことではないはずよ、中井玲さん。あなたに子供達の人生を勝手に弄る権利はないわ」

「で、でも！」

「黙りなさい。たった数年？ たったの十数年？ ふざけているのかしら。私はまだ10代だからわからないけれど、人生後半の十数年はとても大事なはずよ。会社員なら、会社を退職して——働き終えて、これからの人生、自由に生活していこうという時期よね。もし結婚していれば、夫婦水入らずで自由に楽しく生活していこうという時期よね。十数年あれば、やりたいことをいくつも出来るわよ。そんな大切な時期の十数年を「たった」なんていう権利があなたにあるのかしら。甚だ疑問ね」

「でもお金は——」

「そうね、お金は必要かもしれないけれど、子供達の命を使つてまで得るお金は必要なのではないかしら」

「……」

暦は僕の言いたい事を全て言ってくれた。

僕が能力を使うか使わないかの話なのに、暦が話の中心になっている……いつのまにか。

なんとなく、一抹の寂しさがあるな……。

僕が目当てで玲さんはこんなことをしたのに……。

「子供である今の時期は、人生の中でも大切よ。でも、貧しくてもみんなで——いえ、家族と一緒に楽しく生活できれば、それはそれ

で良いのではないかしら。それとも、あなたの守ろうとしている子供達は裕福でお金が有った環境でないと楽しく生きていけない様な、イヤで軟な子供なのかしら」

暦のこの言葉が、事件になりそこなった事件の幕を閉じたといっても過言ではないだろう。

\*\*\*\*

その後、僕達は予定通りに京都を観光した。

玲さんについては妹の理佳さんには言わないでおいた。

玲さんも前と変わらずに接して、平和にこの京都旅行を終えることが出来た。

そして、今。

僕は帰りの新幹線の中にいる。

暦が気を使ってくれたのかどうかは分からないが、暦は僕の左隣に座っている。

普段いろいろ言っているけど、こういう所はかわいらしいよね。それにしても、と思う。

はたして、僕的能力を使わないという選択は正解だったのだろうか。玲さんも言っていたけれど、死ぬわけではないし、何十年も生きることが出来る。

ただ少し、短命になるということだけだ。

それで、今の居場所で楽しく暮らすことが出来る。

孤児院という場所柄、楽しさは重要なポイントだろう。

今後、こういった能力を使うべきか使わざるべきか迷うときがあるかもしれない。

僕は間違った道を進まずに済むだろうか。

ただ、それでも僕は命が大事だと思う。

それがたった数年であろうと。

「暦はどう思う？ どちらが正解なのかな。その人が思う大切なものと命って」

僕は隣で眠そうにあくびをしていた暦に聞いた。

「そんなもの、私に聞かれても困るわね。でも、そうね。その人の大切なものと命を天秤にかけたとき、どちらに傾くかなって、その人次第よね。でも、久寿米木くんはそれでも命の方が大切だと思うでしょう。私もそう思うわ。だって——大切なものが大切な訳ではないのよ。大切なものを大切に思う気持ち、心が大切なのだと私は思うから」

「うーん・・・分かるような分からないような……」

「そうね、少し抽象的だったかしらね。要するに「命」あつてのの「心」、「心」があつての「大切なもの」。心がないと、大切なものを大切に思えないでしょう？」

「大切なもの＜心＜命ってこと？」

「身も蓋もない言い方をするとそういうことね。だから、久寿米木くんが命の方が大事だと思うなら、それに反抗する人がいたら説得すればいいのよ。能力を使うのは久寿米木くんなのだから」

そういつて、暦は目を閉じた。

本格的に寝に入ったようだ。

そうだなー。

まあ、そういう状況になってみないと分からないしね。

よし、考えるのはよそう。  
もう疲れた！

そして、僕も寝た。

こうして、暦との京都旅行は幕を閉じた。

#### 第4話 探偵は旅行先で事件に遭遇してしまうものと言っても過言ではないのだ

どーも、よねたにです。

ごたごたした状況で書いていたので、内容がぐだぐだしているかもしれません。

とりあえず、これで京都旅行編は終了です。

次回からはまた別の話になります。

では、また。

第5話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 5)

夏休みもまだ前半の今日は8月12日。  
時間は11…30。

タイガーマスクと遭遇したりした怒涛の京都旅行から数日がたった。  
僕はなにもすることがないので、とりあえず大学の部室に来ていた。

この部室はかなり快適だ。

広さは15畳程あり、エアコン完備でテレビ、パソコン、ソファ、  
冷蔵庫などくつろぐには申し分のない空間だ。

そんな部室には僕以外にももう1人いる。

月村暦——ではない。

今、暦は沖繩にいる。

なんでも、昔に沖繩に移住した親戚の人が亡くなったそうで、そ  
の葬式に出なければならぬそうだと。

しかも、親戚と言っても近い親戚ではなく、今まで会った事もない  
ような遠い親戚だそうだと。

母方のおばちゃんが親しかったらしいが、そのおばちゃんが病  
気で入院してしまっていて、代わりに暦の母親が行くことになった  
が、どうせなら家族で行こうということになったらしい。

沖繩へ行く直前まで部室に顔を出していた暦は、

「なんで夏休みという最も暑い時期に沖繩に行かなければならぬ  
のかしら。一体前世が何をしたというのかしらね」

と、自分の普段の行いを棚に上げて、前世のせいになっていた。

そして明日東京に戻ってくる。

と言う訳で暦ではない。

では一体誰かと言うと——雨倉しずかだ。

だれやねん。



では説明。

雨倉しずかは僕達——僕と暦の小学校時代の友達で、暦と同じくこの大学で再会した。

実は回想などでも名前がちよくちよく出ていたりする。

最近まで忘れていたけど、しずかも暦と同じで僕の未来を見る能力について知っている。

そして、このサークル、趣味研究会の幽霊部員。

幽霊部員なのになんでいるんだろう、と思うがそれにはちゃんと理由がある。

それは——

「それにしてもさ、暦のいない部室は快適ねー！」

と、言う理由だ。

暦はしずかを嫌悪していて、しずかも暦を生理的に受け付けていない。

僕は2人に対して普通だけれど。

そういう間柄だ。

「暦がいないから来たの？」

僕が聞く。

ちなみに今の構図は部室中央にどんと置かれているテーブルに向かい合って座っている。

僕はいつもの指定席。

しずかはいつも暦が座っている席。

「まあね。一緒に居ると多分武力闘争とかになるかもだから」

そういえば、しずかはガスガン収集とサバイバルゲームが趣味だ

ったな・・・。

しかもガスガン改造してるし。

いつだったか自慢げに、

「このガスガン、弾の速さが秒速100mなんだよ!? すごくない!?」

ってうっとうしかったのを覚えている。

あ、別に僕は嫌っている訳ではないんだよ?

そんなしずかと、京都旅行の際、恐ろしい近接戦闘力を見せた暦が闘う?

部室が崩壊するよ……。

壁に弾痕が残ったり、備品が破壊されたり……。

僕が脳内戦闘シミュレーションをしていると、

「あー退屈。部室に来れば何かあると思ったんだけどな……。……ねえ、テレビ付けて良い?」

と、しずかが言った。

確かに暇だ。

やることが無さ過ぎる。

「いーよ」

「んじゃ……」

テレビの電源が付く。

すると、暦がよく見ている昼の情報番組が流れていた。時間を見る。

12:00。

丁度始まったらしい。

ミシマ（以下ミ）『みなさんこんにちは。司会のミシマです。そして――』

オオクラ（以下オ）『どうも、今日からコメンテーターをやらせていただきます、オオクラです』

ミ『という2人でお送りいたします。さて、早速なんですが』

オ『どうしましたか、ミシマさん』

ミ『実はですね、家が燃えちゃったんですよ』

オ『誰の家ですか？』

ミ『私の家に決まっているじゃないですか。なんでテレビの全国放送一発目の話で他人の家の火事について話すんですか。意味分からないですよ』

オ『あはははは！それもそうですね！』

ミ『火事にあったという不幸な話をしようとしているので高笑いしないでくださいね。いらっときますよー』

オ『あ、すみません。ちょっと昔、火遊びを嗜んでいたもので。フラッシュバックが』

ミ『オオクラさんのやっていた火遊びの内容についてはあとで話しましょう。念のため、警察にも連絡を。で、話を続けてもいいですか？』

オ『どうぞ』

ミ『ありがとうございます。それで私の家が火事になってしまったんですよ』

オ『全焼ですか？』

ミ『いえ、私が普段使っている部屋の書斎だけです。マンション住まいなので、大変でしたよ』

オ『原因は？』

ミ『タバコですね』

オ『あーもう王道、英語で言うときングストリートですね』

ミ『英語になってませんよ。直訳しすぎです。流れるにはこうですね。その日、家に帰って真っ先に書斎に行ってタバコを吸っていたんですよ。それで、しばらくして時計を見たらもう23・00だったんですね。で、その時間から見たいテレビ番組があったので、テレビのあるリビングに、タバコを灰皿に入れて向かったんですよ。それでテレビを見始めて、そうですね……だいたい15分くらいたったときでしょうか。いきなり「ツパーン!!」って音が聞こえたんですよ』

オ『……スパンキングですか？ミシマさんの部屋が火事になっているとき、隣の部屋では夫婦が夜の営みを……』

ミ『スプレー缶です。スプレー缶が熱で破裂したんです。火事の話をしているんですから流れで察してください。あとお昼の番組なの

で自重してください』

オ『あ、すみません。昔、夜遊びを嗜んでいたもので。フラッシュバックが』

ミ『どんな夜遊びかは聞きませんよ。話、続けます。それで音が聞こえて私は「銃声？」って思ったんですよ。でも、そんな音が聞こえるはずがないし……。そう思っていると、こんどはビニールやプラスチックが燃えたときの匂いが鼻をついたんですよ。それがかなり強烈なおいでして。さすがに自分の家の異変に気がつきまして。書斎に行って、ドアを開けたら目の前には火柱が立っていたんですよ』

オ『ここは焼却処理場か!』

ミ『そんな風に突っ込む余裕なんてありませんでしたよ。もし、その現状でそんな風に突っ込める人がいたら、どれだけ心臓に毛が生えた人なんでしょうね』

オ『ミシマさん、突っ込まなかったんですか?』

ミ『私の本業は司会なので。こんな風に毎回突っ込んでいる訳ではないんですよ、オオクラさん?』

オ『それで?どうなったんですか?』

ミ『……。それで、ドアを閉めて消防に連絡したんですよ。「火事なので急いで来て下さい!」って。そしてら5分もしないうちに消防車が到着したんですよ。「え、こんなに早いのか!」って思っちゃうくらい早かったですね』

オ『じゃあ、これからはタクシー呼ばずに消防を呼ぼうと?』

ミ『そんな迷惑な国民になるつもりはありませんよ。それで、消防の方が、ホース持って私の部屋に入って、バーっとなっという間に鎮火したんですよ。本当に速かったですね』

オ『そうですね、日本の消防などの救急対策は世界に誇れるものがありますからね。世界トップクラスと言ってもいいでしょう。この辺りはかなり整備されていますからね』

ミ『急にコメンテーターらしくなりましたね。いいんですけど。いいんですけど、なんか違う!』

オ『ミシマさん、もうオープニングだけで15分使っていますよ。真面目に司会進行していただかないと』

ミ『こい……っつ!……あ、失礼。では次のコーナー——』

\*\*\*\*\*

オオクラさん、コメンテーターに昇格したんだ。

っていうかこの番組、前見たときより酷いな。

でも暦はこの番組割と見てるよなー。

「ねえねえ春希、この番組、割と面白いね」

忘れられているかもしれないけれど、春希と言うのは久寿米木春希こと僕の名前だ。

みんな久寿米木という名字で呼ぶからね。

名前で呼ぶのはしずかくらいしかない。

それから、なんだって？

この番組が面白い？

おかしいだけじゃないのか？

「この番組は暦も好きっぽいんだよね。なんだかんだ言って2人ってどこか似ている――」

あ、しまった。

地雷踏んだかもしれない。

ズダン

僕の後ろの壁に突然溝が出来た。

「なにか言った？」

しずかはガスガンをガンベルトから抜き、僕に向かって発砲した。今日しずかに会うまで、間が3ヶ月以上開いていたから忘れていたけど、しずかは暦と同じにされると、物凄く怒るんだった。

まあこれは暦においても同じだけれど。

暦としずかは2人一緒に扱われたりすると、容赦なく怒る――常人レベルではない怒り方で。

しずかに至っては発砲する。

忘れないようにしなければ。

命が危険だ。

っていうか、なんだよこのサークルの特殊な人率！

武闘系のサークルに変えたって通用する人材だよ！

近接戦闘のプロに射撃戦闘のプロ、それで未来が見える僕が監督か？

とりあえず今は――

「う、ごめん」

謝った。

「いいよ」

許された。

しずかの性格はかなりさっぱりしている。

感情の起伏が激しいが、すぐに元に戻る。

熱しやすく冷めやすい。

これほどこの言葉が当てはまる奴はそうそういないだろう。

暦は真逆と言っても過言ではないかもしれない。

感情の起伏に乏しく、一度感情に変化があるとなかなか戻らない。

熱しにくい冷めにくい。

趣味は似ているんだけどね・・・。

「そういえばさ、京都に旅行行ったんでしょ？ 暦と2人で」

しずかが先日旅行について聞いて来た。

「うん、行ったね。小学校の時ではしれなかった暦のこととか知れて良い旅行だったよ。まあ、いろいろあったけど」

「いろいろ……！？ 暦のこと……知る……！？ ねえ！ 何で誘ってくれなかったの？ サークルの活動でしょ？」

声大きい。



そんなに声をはらなくても聞こえてるよ。  
というか――

「え、暦もいるのに旅行行く気だったの？」

「いや、行かないけどさ」

なんでやねん！

めんどくさっ！

なら、言わなくていいんじゃないの！？  
打てば響くタイミングで返してきた。

少し面倒臭い性格も、暦と似ているかもしれない。  
ひょっとして2人は同族嫌悪か何かなのかもしれないな。

「私としてはね、一回聞いてからにして欲しかったってことよ。暦  
が行くなら行かないけれど、確認もなしに行ってしまうのはどうな  
のよって言うこと！」

「あーはいはい。分かりました。以後気をつけますよ」

「で？」

今度は急に小声になって聞いて来た。  
何のことだ？

「で、とは？」

「だから……その……ん……アレよ」

しずかは何か言いにくそうにしている。

「アレって？」

「あーもう、分かれ！」

急に声が大きくなる。

「なにがさ」

「だから、暦と2人だったんでしょ？ なにか、こう——過ち的な？ やってないでしょうね？」

しずかがかなり食い気味で聞いて来た。

テーブルを挟んで向かい側に居るにもかかわらず顔がかなり近くにある。

そんなに身を乗り出さないでも……。

っていうか過ちって……。

そんなに信用ないですか？

「ないよ」

「本当に？」

「ある訳ないでしょうが」

「……ならいいけどさ」

ようやくしずかは静かになった。

……別に洒落じゃないけどさ。

そういえば、こんな話を聞いたことがある。

人の名前は本人の性格と反対を表すらしい。

なぜなら、親が自分の性格を嫌っていた場合、子供にはそうなる欲しくなくて、自分の性格とは逆の名前を付けるから。

例えば、親が落ち着きがなくて、声が大きい人だった場合、「しずか」という名前を子供に付ける。

でも、遺伝によってある程度子供の性格は親に似てしまう。

だから「しずか」という名前の人に、静かな人はいないのかもしれない。

僕はそんなことを思った。

と、ここで、

「あ、ちょっとお花を摘みに……」

年寄り臭い言い回しをしてしずかはトイレへ。

「おっさんか」

「せめてオバサンって言って!？」

そして、数分で返って来た。

「あ、飲み物買ってきたけど飲む? お茶だけど」

「飲む。コップに入れてくれると嬉しい」

「分かった。……はい」

「ん、ありがと」

コップを受け取った僕は、受け取ったコップをテーブルに置き、

暦に、

「ところでさ」

と、暦相手では出来ない、ささやかな仕返しを試みる。

「過ちって具体的にどんなことをするの？」

僕は知っている。

しずかはその手の話題を最も苦手としていることを！

暦は大好きだけど。

旅行中も何回か言っていたし。

「え……？」

頭から湯気が出るんじゃないかと言う古典的表現を使うしかない  
くらい顔が真っ赤になって来た。

「ちょ、いきなり何言うのよ！」

スダン。バキン。ジリリリリリリ……。

何が起こったかと言うと、しずかが照れにより、上へ向けてガス  
ガンを発砲。

どうやら、発砲するのは怒ったときだけではないようだ。

危険度が増した。

そして弾は秒速100mで飛び出し、天井に向けて発砲したため消  
防法により設置していた火災警報装置に命中。

そして、火災警報装置が壊れて鳴っている、という状況だ。

「なにをやっているんだよ！」

「だって、しょうがないじゃない！反射的に撃っちゃうんだから！」

「原生動物じゃないんだから、頭で考えてから行動して！」

さりげなく罵倒する。

最近、曆に罵倒され続けていた反動だ。  
と、

ッパーン！

「「え？」」

ドアの向こうの廊下から破裂音が聞こえて来た。

最近、聞いたことのあるような音だ。

僕とすずかは言い争いをやめて黙って顔を見合わせる。

そして、アイコンタクト？をとり、その結果、僕は様子を見に廊下へ出ることに。

恐る恐るドアを開けるためにドアノブを握ると――

「あっち！なにこれ熱いよ！」

触って居られない程、ドアノブの金属部分は熱くなっていた。

僕は近くにあったタオルをドアノブに巻いてドアを開ける。

すると、目の前には――

「「……」」

火柱が轟々と上っていた。

僕と奥にいたしずかはそれを確認すると無言になった。  
そして、先に僕は言う。

「火災警報、特に問題にはなりそうにないね……。よかったよかった……」

しずかは、

「本当によかったよね！むしろ良い事をしたぐらいだよ！あっははは……」

「「……」」

「「火事だー！！！！」」

大変な事になった……。

**第5話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)**

どーも、よねたにです。

第5話、C棟火災編の part 1です。

未だにつたない文章ですが読んでいただければ幸いです。

では、また。

## 第6話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい（part

現在の状況を説明します。

今、僕としずかがいるのは部室が集まる6階建て「C棟」の5階の趣味研究会の部室内です。

ドアを開けると火柱があります。

部室の火災警報機が鳴っています。

1階から4階までと6階のようすは火柱がドアの前にあるので確認できません。

夏休み中なので、大学内にもこの「C棟」にもほとんど人はいません。

「どうしたらいいんだ!」

「消防に連絡したら?」

「それだ!」

僕の絶体絶命の叫びに、女神——には見えないな、しずかが答えた。

どうしてこんな簡単な事に気が付かなかったのだろうか。

さっきの情報番組でも言っていたじゃないか!

日本の消防は優秀だと!

僕はポケットから今流行のスマートフォンを取り出す。  
が——

「あっちょっ——」

ガシャン



落とした。

落としてしまった。

しかも、画面の方から落ちた。

僕は慌てて拾う。

「……」

画面には蜘蛛の巣が張っていた。

もう操作できない。

が、まだ希望はある。

その希望へ僕は目を向ける。

「しずか、携帯貸して！早く！」

「あー私の家近いの」

「だから？」

「持って来てない？」

「じゃあ携帯化して」

「自分で何言っているか分かってる？」

僕は、一体、どうしたら、いいんだ！

いや、慌ててはいけない。

冷静な判断が出来なくなる。

落ち付け落ち付け……。

……よし。

落ち着いた。

「そういえば、しずかは随分落ち着いているけれど、何か策でもあるの？」

落ち着いたら気付いた。

しずかはいつもどおりだった。

ただ、火事場では異様に見える。

余程の策があるのだろう。

僕は期待して答えを待つ。

「いや、何も出来ないから落ち着いているだけー」

ただの諦めた人だった。

「そうですか……。ん？ スプリンクラーとかって作動していないのかな」

消防法とかで付けないといけないんじゃないか？  
だったらあるはずだけれど。

「さっきドア開けたとき、出てなかったね」

そう、ドアを開けたら火柱があった。

とうか火柱しか見えなかった。

ここは神社か！

「でも付いているはず」

僕は言う。

付いていないと困るから！

「壊れたのかもね」

もしそうなら最悪の事態だ。

「壊れるものなのかどうか」

いざって時の為のものなのに、いざって時壊れていたら本末転倒だろう。

「じゃあ、どうしてなのかしらね」

僕は考える。

例えば、また僕的能力がらみで——とか？

謎の組織が僕を追って来て、スプリンクラーを壊して火事にして殺そうとしているとか？

……ないか！

ないないないない！

「わからない」

と、言っておこう。

その時、僕は閃いた。

こういう閃きは脳に良いらしい。

「スプリンクラーが付いているなら衝撃とか与えれば作動するんじゃないかな。例えばしずかのガスガンとか」

とりあえず、提案してみる。

「あ、それはいけるかもしれない！テレビとかでも、スプリンクラーに物ぶつけて水浸し、とか見たことあるから」

「まずはドアの前の火柱を消そう。僕がドアを開けるから、しずかはスプリンクラーを見つけて撃っちゃって」

「OK」

「じゃあ、行くよ……3……2……1……」

そしてドアを開ける。

物凄い熱が感じられる。

長い間開けていられない。

と、

ズダン……ピシャー……

火柱がみるみる消えて行く。

しずかを見る。

手にはガスガンが握られている。

どうやら作戦成功のようだ。

「とりあえず延命できそうね」

しずかがガスガンをガンベルトにしまいながら言う。

その姿が随分と様になっていた。

「そうだね。それにしてもよくあの火柱の中スプリンクラー見つけられたね」

「まあね。伊達にサバイバルゲームやってないから」

それがまさかこんなところで役に立つとはサバゲー仲間も思いもしないだろう。

そもそも、いくら趣味がサバゲーだからと言ってガンベルトしてガスガン持ち歩いている人なんているのだろうか？  
今更おかしい事に気が付く僕も僕だけけど。

「それに――」

と、しずかが溜めを作る。

「リアルなサバゲーで今の状況楽しいしね？」

バトルジャンキーか！

\*\*\*\*\*

僕達は行く先々の火柱や火の海をスプリンクラーをガスガンで撃って消火していく。

そして、とりあえず階段までたどり着くことが出来た。

「ここからが問題か」

そう、ここから下も火の海だった場合、しずかのガスガンだけでは乗り切れないかもしれないのだ。  
なぜなら――

「うん。あと撃って数発ってところだね」

しずかのガスガンはハンドガンのタイプで、改造してあり射出速度は秒速100mにもなる。

となると、1発に使用するガスの量も半端な量ではない。

小さいハンドガンのタイプでは入れられるガスの量も少なく、多くの弾数は撃てないのだ。

「今日はガスとか持って来てないんだよねー。弾は普通のBB弾と鉄製のBB弾持って来てるんだけどね」

「鉄製のBB弾ってどういうこと？」

「普通のBB弾はプラスチック製で質量が軽いから空気抵抗とかあって遠くまでは飛ばないんだよね。そこで、鉄製の質量のあるBB弾を使えば、速さそのまま遠くまで飛ばし威力も倍以上になるって訳！」

「危なっ！」

「いやいや、使っていないから安心していいよー」

「できないよ……」

「って、こんな話をしている場合じゃないでしょ？」

「誰のせいだ、誰の。……そういえば、わざわざ建物内の階段を使わないでも、外に階段なかった？非常用の」

僕は思い出した。

外付けで階段があったことを。

「あー……あったね、そんなものも」

しずかも今まで気が付かなかったらしい。

「そっち使わない？」

「そうだね。そっち使おう」

その後、僕達は非常階段を見つけ、無事に外まで脱出することが出来た。

そして、中の階段を使わなかったことを本当に良かったと実感した。

「うわー……」

これは僕の声。

「これは夕方のニュースレベルだね」

これはしずかの声。

僕達が外へ出ると、C棟は火に包まれていた。

C棟周辺には夏休みにも関わらず、大学に来ていたらしい学生がちらほら見られる。

そして、C棟内にいたと思われる、ところどころすすけた学生も数名いた。

周りには火事特有の異臭がたちこめ、ハンカチなどで鼻を覆っていないと臭くてその場にいられない状況だった。

「ん？」

僕はその異臭の中に知っている臭いを感じた。

「この臭いは……灯油か……ガソリンか？」

ガソリンスタンドなどで嗅いだ事のある臭いだ。  
かすかだが臭いがする。

しずかの方を見る。

「え？」

しずかが泣いている……？

そういうキャラではないと思っていたけど……。

まあ、一応女の子だし、そういうこともあるのか？

それにしても——と思う。

「まさか……」

放火か？

もしもこの火事に灯油かガソリンが使われていたとしたら、十中八九放火だろう。

すると、この火事は僕的能力がらみか？

京都では僕的能力を利用しようとする人がいたが、今回は僕を殺そうと……？

僕は、燃え続けるC棟の前に、そんなことを思っていた。

\*\*\*\*\*



数時間後。

誰かが呼んだ消防により、なんとか消火された。

風の噂によると、放火の線が濃厚らしい。

消防の人が言っていたならほぼ間違いないだろう。

そして、恐らく犯人は僕を狙った。

なぜなら、出火場所が5階の趣味研究会の前だったから。

「ふーむ……」

僕は今、消防の目を盗んでその5階の趣味研究会部室内に1人  
いる。

ちなみにしずかは帰った。

そしてあのときは動転していて気が付かなかったが、今となって  
みれば灯油のような臭いがするのが解る。

やはり――

「僕が目当てか……」

そう考えるのが妥当だろう。

となると、僕がまだ生きているとなれば、また狙って来るか……。

僕は窓へ向かう。

ドロドロに溶けていて外が見えない。

その窓をなんとかこじ開ける。

新鮮な空気が部室内――いや、元部室内に入る。

「全く、面倒な事になった……」

そんな誰かに聞かれたら恥ずかしいような独り言をつぶやく。  
と――

「どんな面倒な事になったのかしら、久寿米木くん」

後ろから聞き慣れたクールボイスが。

僕は慌てて振り向く。

そこには、暦の姿があった。

「え、こ、暦！？なんでいるの？帰ってくるの明日じゃなかった？」

「いえ、沖縄行ったはいいのだけれど、お葬式終わった後だったのよ。両親が日にち間違えてしまったみたいでね。なので、1日観光してから帰って来たわ」

なんて失礼な事を……。

暦の親らしいと言えばらしいけれどさ。

「あーでもそういうのってあるよね。僕の友達もさ、彼女と喧嘩して、彼女が実家のある大阪に帰っちゃって。で、その友達慌てて大阪まで行ったんだけど、彼女の家が何処にあるか分からなくて、観光して帰って来たんだよ。それって、こういうことだよね？」

「全く違うわよ」

一蹴された。

「え？あ、そう」

「そんなことより、久寿米木くん。この状況どういうことかしら。説明してくれるとありがたいのだけれど」

「あ、そうだよ。実は――」

僕は火事について粗方を説明した。  
今日の昼過ぎに火事が発生したこと。  
僕としずかがこの部室にいたこと。  
ガスガンでスプリンクラーを作動させながら脱出したこと。  
そして――

「火元がこの部室の前だったんだよ」

僕がもつとも気になっている点を言う。

「それはおかしいわね」

暦も僕と同意見らしい。

「普通なら1階とか外の壁とかが火元よね」

「そうだね」

「ということは――外部犯ではなく内部犯ということなのかしら」

やはりそういうことなのか？

「……考えたくはないけど」

しかし、出火当時このC棟にはほとんど人はいなかったはずだ。  
僕はこっそり監視カメラの映像を拝借し、C棟内には僕としずかと  
数人の学生、それから掃除のおばさんだけで不審人物はいなかった  
ことを確認した。

「私、思うのだけれど」

そう前置きをして暦は言う。

「犯人は雨倉さんなのではないかしら」

「まさか」

そんなはずはない……と思いたい。

「では、出火推定時刻の前に雨倉さんは部屋を出たりしていないのかしら」

僕は思い出す。

そういえば――

「……いや、一回お花を摘みに」

「は？」

「いや、トイレに行った。で、そのついでだって言ってお茶を買ってきてくれた」

「アリバイはないわね」

アリバイはない。

けれど――

「でも、動機がない」

「私達だって、いつも一緒にいる訳ではないのだから、彼女について知らない部分だってあるでしょう」

「まあ、そうだけど……」

「とりあえず、雨倉さん呼びましょう。話はそれからだわ。彼女は今どこにいるのかしら」

暦が僕に確認する。

「家に帰っているはずだけど？」

「え、さっき大学内で見かけたのだけれど？」

「そんなはずは——」

しずかは消火活動中に帰ると言って家へ帰ったはずだ。  
僕はとりあえず、開いている窓から外を見る。  
すると、

「え……」

しずかがいた。

大学の外へ向かって歩いている。  
これから帰るようだ。

そして、ここからでは表情はみえないが、どこことなく暗い。  
いつものしずかではないように見える。  
とりあえず——

「しずかと話してみるか」

僕達はC棟を出て、しずかの元へ足を急がせた。

\*\*\*\*\*

「しずか！」

僕達は校門を出ようとしていたしずかを呼びとめると、

「――！！」

こよみは驚いたように身体を震わせ、急に駆け出す。

「え、なんで逃げるの！？」

「あら、やっぱり犯人だったのかしらね」

「本当にしずかが――」

とにかく今はそんなことを考えている場合ではない。しずかを追わないと。

僕達はしずかの後を追う。

「ちょっと、しずかストップ！止まって！」

僕は一生懸命走る。  
後ろから、

「久寿米木くんはいつも一生懸命ね」

暦がやるきなさそうについて来る。

格闘技が半端なく強いだけあって、男の僕にも難なく走って付いてくる。

「いいから来ないで！」

前ではしずかがそう叫びながら逃げる。  
そして――

ズダン。カキン。

「これ以上追って来るなら撃つよ！」

「撃ってから言うな！」

しずかは走りながら発砲してきた。

コンクリが少し削れていた。

今のは普通のBB弾じゃなくて金属製の方じゃなかった？

危なっ！

と、しずかが発砲するために後ろを見ながら全力疾走していたため、前にあった電柱に気が付かず正面からぶつかった。

「ぐふっ」

ボタン。

しずかが崩れた。

崩れたことでようやくしずかが止まった。

僕達はようやくしずかに追いつく。

「ちょ、しずか大丈夫？」

近づきながら僕は聞く。

暦はなんか笑っている。

小声で「無様だわ」とか言ってる。

しかも笑顔で。

「……ううう……もう、嫌だ！助けて、春希！」

しずかは泣きながらそう言った。

そして、

「傑作ね」

暦は笑いながらそう言った。

周りの目が、とても痛い。

そう、ここはいつのまにか駅だった。

\*\*\*\*\*

「しずか、落ち着いた？」

「うん……」

駅での周りの目が痛かったため、僕達は急いでその場を退散し、



駅から少し離れた住宅街の中にある喫茶店に場所を移した。

ちなみに喫茶店の名前は「喫茶ブラジル」。

薄暗い照明の店内に、南国風の観葉植物が印象的だ。

僕達はコーヒーを3つ頼んで、僕と暦が隣で、向かい側にしずかを座らせた。

「それで」

と、暦が聞く。

「雨倉さん、あなたがやったのかしら。あの火事は」

ズバリと言った。

もう少し遠回りに聞いたらどうなの？

気を使ってさ。

「……ごめんなさい」

しずかは認めた。

自らがあの火事を引き起こしたことを。

「よくも私の城を燃やしてくれたわね。死刑に値す――」

「ちょーっと暦、黙っててくれると嬉しいな――？」

言葉攻めで自殺に追い込む勢いの暦を黙らせて、僕が聞く。

「えっと、僕達が呼びとめたのに逃げたのは、それが原因？」

「……うん」

「どうして？ どうして、あんなことを？」

僕は動機を聞いた、

どうしても動機だけが解らなかった。

おそらく火を付けたのは、お花を摘みに——もといトイレへ立った時だろう。

それくらいの時間はあった。

「……」

「……言えない」

そうしずかはつぶやいた。

言えない？

どういうことだろう。

僕は考える。

そういえば、電柱にぶつかった直後言っていたな。  
聞き流しちゃったけどさ。

確か——「助けて」だっけ。

「助けて」？

……まさか。

いやいやいやいや。

……いや、でも。

一応聞いてみるか。

「ひょっとしてなんだけどさ」

と、前置きをしてそっと尋ねる。

「誰かに脅されたりした？」

そう聞くと

「! !」

しずかの身体が震える。

「正解か」

「……うん」

しずかは誰かに脅されてこの火事を引き起こしたことを認めた。  
と、

「久寿米木くん、そろそろ喋ってもいいかしら。別に自殺に追い込  
んだりしないから」

「分かった。言葉攻めはしないでくれるとありがたい」

「分かったわ。気を付けることを考えておきましょう」

もうちよっとしっかり考えてくれるとうれしいな！。

まあ、言わないけどさ。

「雨倉さんは、つまり、誰かに頼まれて放火したのよね。火を付け  
たのはトイレに立った時かしら。では、その誰かとはいつ会って脅  
されたのかしら」

暦がまともな事を聞く。

いつもがこれならいいんだけど。

「脅されたのはトイレに行って、帰ってくるとき。春希を殺せって2人組の大きい男の人に言われたわ。一応、私も持っていたガスガンで攻撃しようとしたけど、近接戦だったから難しくて……」

「なぜ、放火だったのかしら。その2人組の大男が久寿米木くんを帰り道なりで殺せば簡単だったのではないかしら」

殺せばって。

暦は僕に死んでほしいのか？  
そんなことないと思いたい。

「私も言ったわ。殺したいのならあなた達が殺せばいいって。私は殺したくないって。そしたら、大男の内の1人が電話をして……。その電話を私に渡してきたの。そうしたら、電話から……。誰か分からないけど、「助けて、殺さないで」って声が聞こえて来たの。それで大男の1人が、「お前が久寿米木を殺せばこいつを助けてやる」って言って……」

人質か。

まあ、今考えると、大男達の仲間の演技か何かだろうが。

「だから、逆らえなくて……。でも、直接は殺せないって言ったら、じゃあ火をつけて殺せって言われて」

「それで、放火をしたのね」

「うん。それと、春希にお茶を渡したじゃない？」

僕に話が振られる。

「あーうん。貰った貰った」

「実はアレには睡眠薬が入っていたの。春希が苦しまずに且つ確実に殺せるようになって」

「――！」

うわー！

危なかったー！

飲まなくてよかったー！

「私も、春希が飲んだら飲もうと思っていたんだけど……私のせいで春希が死ぬのは嫌だったから。でも春希は飲まなくて。で、あとは――」

なるほど。

そんな裏話があったのか。

全くもって気が付かなかった。

それにしても、大男2人組か……。

監視カメラに映っていなかったけれど、一体どこから入ったのか……。

いや、監視カメラと言っても1台だけで甘いセキュリティだったから死角を突けば入れるか。

「でも、なかなか侮れないかもしれないわね、その大男達」

暦が言う。

「だって、自らの手を汚そうとしないあたり、その辺の殺人犯なんかよりよっぽど頭が良いわよね。ひょっとしたら組織的な犯罪なのかもしれないわね」

確かにそうだ。

普通ならその大男達で片づければいい。

でも、そうしなかった。

出来るだけ自分の手を汚さないで計画を遂行する――。

厄介だな。

そんなことを考えていると、しずかが言った。

「そういえば、話し声からなんだけど、上司みたいな人がいるってことを聞いたわ」

組織的犯罪か。

「それから――」

しずかは僕の目を見て言った。  
なにになになになに!?

「明日の22時、春希の家を襲うって言っていたわ」

うわー……。。

やだー……。。

……。本当に。

**第6話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)**

どーも、よねたにです。

連絡事項です。

掲載ペースですが、毎日で行けるかな、と思っていたのですが意外と難しく・・・。

なので、次回は11月20日を予定しております。

では、また。

## 第7話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)

予定より早く出来たので、早めに投稿しました。  
この感じでは不定期更新になりそうです。



**第7話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)**

8月13日。

しずかが訳あってC棟を全焼させる放火事件を引き起こした翌日。  
時刻は19時。

僕は家（一軒家）にいる。

そして、なぜか僕の家には暦がいる。  
来たのはついさっきだ。

現在の構図は、リビングのテーブルに僕、僕の向かいに暦。  
ちなみにこの一軒家は僕のことを捨てた両親が残した唯一のもの  
だ。

高校生までは親戚の家に厄介になっていたが、大学生になったので  
1人立ちと言う意味も含めて、この家に戻って来た。  
大学もこの家からの方が近いし。

「さて、久寿米木くん」

席についてそうそう、暦が言う。

「かなり驚いていたようだけれど、私達が来ないとも思っていた  
のかしら」

そうだよ。

普通、これから襲われるって分かっている家に誰が好きこんで行く  
んだよ。

「まあ……」

なんとなく、言葉を濁す。

「心外ね。私達はそれほど冷たい人間ではないわよ」

そうですか。

……ん？

さっきから「私達」って言っていないかな？

「そういえば、しずかはどうしているのかな」

「この家の警備を任せてあるわ。少し離れた所から、スナイパーライフルで狙わせているの。誰か着たら知らせて、不審な動きをするようなら撃って良しと言ってあるわ」

本格的過ぎる！

どこの大臣の家だよ。

なにも、そこまでしなくても……。

「やりすぎじゃあないかな」

「そんなことはないわよ。だって相手は組織的犯罪者なのよ。それに、放火の可能性も否定できないわ。警備させておいて、損はないわ」

なるほど。

僕ははっきり、殴りこんでくるかと思っていただけけど、家を燃やされる可能性もある訳か。

あまり、派手な事が好きそうでない犯人のようだから、そういう可能性を消してしまっていた。

それにしても――

「よく、しずかが暦の言うことを聞いているね」

物凄い疑問だ。

暦が部室にいたらしずかは顔を出さない、逆もまたしかり。

そんな関係なのに。

それほど嫌っているのに。

「まあ、そこは交渉術よ。『あなたが私の城を消し炭にしてしまったのだから責任をとりなさい。さもなければ、あなたの大事にしているエアガン、ガスガンを消し炭にしてもかまわないのだけれど』と言ったら快く警備をしてくれたわ。意外と扱いやすい――ではなく、素直な子で良かったわ」

それは交渉とは呼ばないよ、暦さん。

脅迫と呼ぶんだよ……。

この件が片付いたら、しずかにお礼を言っておかなければ。

「久寿米木くん、こんなときなのだからもっと有意義な話をしましょう。作戦とか立ててみましょうか？」

「あーいいかもね」

「久寿米木くんは何か考えがあるのかしら。私達が来る前まで、何もせずに家にいた訳でしょう」

「ん……作戦とまでは言えないんだけどね。しずかが犯人達が大男だっけ言っていたじゃない。だから、場合によっては戦闘とかになると思ったんだよ」

「ない話ではないわね」

「だから、そうなった時は、能力を使って――って思ってたんだけれど」

僕の未来を見る能力を使えば、相手がこれからどう動くで仕掛けてくるかが解る。

そのため、攻撃をかわすことは造作でも無い。

ただ、戦闘でこの能力を使うのは負担が大きい。

例えば、犯人が目の前にいて僕がそこで未来を見たでしょう。

その未来が、犯人に攻撃される僕が、何回か避けた末に殴られるというものだった。

その未来を見た僕は、殴られないために、殴られるはずだった攻撃を避けたでしょう。

本来あるべき未来が変わってしまった事になる。

そうしたら、さっき見た未来はもう当てにはならない。

だからもう1度、攻撃を避けるために未来を見なければならなくなる。

そして、未来を見るには代償がある。

頭痛と倦怠感、そして命を削るという代償が。

未来を見ると言っても意外と万能ではないものさ。

まあ、この例えでは「避ける」場合で話したけれど、それを「避けながら攻撃」に変えてもいいしね。

もしそれで、1撃で相手を行動不能に出来れば、能力を多用しなくても済む。

「……私はあまり賛成できないわね。だって、久寿米木くんにいろいろと負担があるのではないのかしら」

暦は未来を見ることに対する代償を、京都旅行の時に知っているからね。

賛成されない事は分かっていた。

「まあ、あるはあるけれど、状況が状況だから仕方がないかなって」

僕の命が掛っているしね。

こういう場合はしょうがないんじゃないかな？

「でも、出来るだけ使わないと約束して」

「もちろん、使わない事に越したことはないからね。それは約束する」

「分かったわ。では指切りでもしましょうか」

「僕を子供扱いするな。それから、もし使ったら本当に針千本飲まされそうで怖すぎるから」

「そんな面倒な事しないわよ。それに、針千本って意外とお金がかかるものよ」

飲まされない理由が経済的理由だった。

なにこの現実味あふれる感じ……。

「でも、どうする？ 暦が強いと言っても2人同時に相手できるかどうか」

「一般人レベルなら対応できるでしょうけれど、さすがに戦闘のプロとか、そういうレベルになると難しいでしょうね」

さて、どうしたものだろうか……。

\*\*\*\*\*

2時間30分後。

現在の時刻は21…30。

襲撃予定時刻の30分前だ。

「さて久寿米木くん、もうそろそろこの家が戦場になるのだけれど。大丈夫かしらね」

「まあ、なんとかなるんじゃない？ 殺されない程度には頑張るよ」

楽観的だなーと自分でも思う。

「殺されない程度、ね。……そう。……久寿米木くん」

と、トーンを変えて暦は言う。

「何かな」

「問題です。死体と遺体がありました。どちらが男でどちらが女で  
しょうか」

クイズ？

なぞなぞ？

この局面で！？

「え、なんで急——」

「どちらがどちらでしょうか」

うわ、凄い圧力を感じる！

中世ヨーロッパの貴族の圧政並の圧力だよ。  
よく知らないけどさ・・・。

「えーと……」

全く分らない。

死体と遺体に違いなんてあるのか？  
あー適当でいいかな？

「死体が女で遺体が男……とか？」

僕が答えると

「ぶー。残念。不正解です」

物凄くいやらしい笑みを唇が浮かべる。

うわー答えの理由聞きたくないなー。  
でも聞かないとなんかモヤモヤするし。

「……ちなみにだけど、なんで？」

「男は「したい」、女は「いたい（痛い）」、よ」

下ネタかい！

「お気に召したかしら、この問題は」

どんな反応をしていいかわからないよ！  
情緒不安定だよ！

「じゃあ、僕も問題を……」

「あら、そう」

「アルジェリアにあってナイジェリアにない物はなーんだ」

「……」

リビングを沈黙が支配する。

いや、征服と言った方が良いかもしれない。

「久寿米木くん」

「はい」

「私の問題と比べても、その問題、どうかと思うけれど」

うわー！

外した！

僕のとっておきの問題だったのに！

ちなみに答えは「ジェリア」です。

……「ジェリア」って何だよ！とか思わないでください。

「とまあ、これくらいにしておきましょうか。そろそろ時間よ。それに久寿米木くんの緊張も大分解れたみたいだし」



そうか。

僕は緊張していたのか。

一応表情とか言葉とかに出さないようにはしていたけれど、気付かれていたのか。

なるほど。

暦らしい解し方だ。

下ネタだったけれどさ。

「ありがとう」

僕は言う。

「あら、何のことかしら」

一応伝わったかな？

恰好を付けたがる暦はとぼけたけれどさ。

さて、時間か。

僕は時計を確認する。

21…50。

予告時間まであと10分。  
と、

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。

この時間に来客か？

そう思ったとき、暦の携帯に着信があった。

暦は僕にも聞こえるように、スピーカにして電話を受ける。

電話の相手はしずかだった。

「もしもし」

『もしもし、私だけど』

「今、チャイムが鳴ったのだけれど。その件かしら」

『察しが早くて助かるわ。私が会った大男じゃないんだけど、ちょっと怪しい2人組が玄関前に来ているのよね』

十中八九、だろう。

「分かったわ。私達が外へ出て応対するから、そのままいつでも狙撃できるようにしておいて頂戴」

『了解。……ったくなんで私があいつの命令に従わ——』

ぷつ。ぷーぷーぷー。

「雨倉さんには再度調教が必要ね」

意外と仲良くなったのかなーとか思った僕が馬鹿だった。

さて。

作戦なのだが。

いくら暦が強くても、相手が戦闘のプロだった場合対応できないので、僕達が外へ出ることでいざとなったらしずかの遠距離からの援護をもらおう、と言うものだ。

こうすることで、しずかだけが闘っても一応対応は出来るし、僕の家への被害も少なくて済む。

もちろん、本当にピンチの時は僕も加勢するけれど。

「それにしても、敵ながら10分前行動とは良い心がけね」

「いや、襲撃の時間が早くなっただけだから。むしろ悪いことだからね!？」

「行きましょう」

「僕のツツコミに対する一言とかないの!？」

緊張感が一切なくなった僕達は、敵を出迎えに行った。

\*\*\*\*\*

玄関の門の前には、若い男と、中年の男がいた。

2人ともスーツを着ていて、一見会社員のように見える。

若い男の方は

短髪黒髪で、スポーツマンといった感じだ。

対して中年の男の方は、頭が少し禿げていて、苦勞しているんだろ  
うなーという感じだ。

その2人を見た暦は、

「あら、大分想像とは違うわね。もっとむさ苦しい人たちが来るか  
と思っていたわ」

確かに。

僕達が想像していたものとはかなり違った。

すると、中年の男が口を開く。  
ファーストコンタクトだ。

「おや、我々が来るのを事前に知っていたような口ぶりですね。どう思いますか、森さん」

どうやら短髪黒髪のスーツマン風の男は「森」という名前のようだ。

「そうですね、彼が未来でも見ていたのでしょうか」

「それは違うと思いますよ。なぜなら我々の風貌が想像と違うと先ほど言っていました。想像は想像でしかありませんでしょう」

「なるほど」

2人は何故僕達が事前に知っていたかに興味があるようだ。  
さて、どうするか。

……まあ、それくらい教えてもいいか。  
僕は教えることにした。

「あなた方のお仲間が、こそこそ喋っていたのを聞いた人がいたんですよ。その人の情報です」

すると2人は驚いたような表情を作り、

「仲間、ですか？」

と、中年の男が言った。

「ええ。僕の友達にC棟——大学の部室を燃やさせた、大男の2人組です」

すると、

「ああ、あの人たちですか。彼等は仲間などではありませんよ。ただ、雇った人達ですよ。裏の方から、ですけど。その日我々はやる事があったので」

え、そうなの？

てっきり犯罪組織か何かなのかと思っていた。  
と言うことは——

「あなた達は組織とかで動いている訳ではないんですか？」

「そうですね」

あっさり肯定された。

と、言うことは敵はこの2人だけか。  
しかも、そんなに強そうには見えない。  
もしも戦闘になっても問題なさそうだ。

「ところで、今日はこういったご用件でしょうか」

暦が淡々と言う。

もうちょっと愛想を振りまけ！  
っていうか、何で来たのか知っているだろう！

「簡単に申し上げるのなら、久寿米木さん、あなたに死んでもらいたく、今日は参りました」

中年の男が言う。

そして、森も追隨して言う。

「つてかさつさと死ねや」

……え？

さつき丁寧な言葉遣いじゃ無かったかな？

僕の聞き間違いか？

僕がフリーズしている間に暦が反撃する。

「あら、あなた随分な口を利くのね。人に頼むときはもっと誠意をこめなさい。例えば土下座とかね。まあ、土下座しか受け付けられないのだけれど。もっとも、あなたの言うこと、聞くつもりもないけれどね」

「うるせえよ」

「ベネズエラ？」

「うるせえよって言ったんだよ！」

「あら、そうなの。分からなかったわ」

「死ねや！」

「聖闘士星矢？」

「死ねやって言ったんだよ！　まったく肩すかし食らった気分だぜ……」

「横須賀市？」

「肩すかしだ！もう嫌だこいつ！」

さすが暦だ。

人によって態度を豹変させるらしい森を手玉にとっている！

それと、ベネズエラってどんな聞き間違いだよ！

「失礼、お嬢さん。森は人によって態度をがらりと変えてしまう所が悪い所です。申し訳ない。森も慎みなさい。久寿米木さんはある意味被害者なのですから」

中年の男が暦に謝罪する。

この人は礼儀をわきまえている分まだましだ。

そして気になることを言っていた。

僕がある意味被害者？

どういうことだろう。

「そうですね。その猿の教育をもっとした方がいいでしょうね。ところで、あなたのお名前、まだ聞いていないのですけれど。伺ってもよろしいですか」

そういえば聞いてなかった。

さっきから中年の男中年の男って煩わしかった。

「そうですね。2人とも自己紹介がまだでした。私の名前は、林です。で、こちらは森」

そう言って林さんは森も紹介した。

「そうですか。ご用件についてお話してもいいかしら。久寿米木くんに死んでもらいたい——と言うことらしいのだけれど、動機が解らなければ、同情すらできないわ。だから、動機くらい教えてもらいたいのでいいかしら」

「分かりました。まずはこちらの事情をお話ししましょう」

「ええ。全てはそれからにしましょう。お互いに」

そして、林さんは語り出した――。

あーまた僕蚊帳の外って感じだなー。

今回とか思いつきり中心人物なのに。

途中から僕喋ってないし。

主導権握っているのが暦だからしょうがないと言えましょうがないけれどさ。

「我々は――」

長くなりそうだ。

そんな気が、僕はした。



**第7話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)**

どーも、よねたにです。

前書きのと通りの事情から、早めの投稿となりました。

さて、投稿ペースについてなのですが・・・。

不定期になりそうです。

すみません。

感想や評価を頂ければ、参考にさせていただきますので、よろしく  
お願いします。

では、また。

## 第8話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)

「私と森は世理教と言う宗教団体に所属しています。世理教と言うのは世の理が全てであるという考え方のものです。同時に私達はある研究所の所員でもありました。私達はそこで知り合いました。このように私達は年が離れているのですが、話や考え方がよく会い、たびたび話す機会がありました。そして、今から数年前、世理教を知ったのです。私達はその考え方に大いに共感し、すぐに入信しました。まだ新興宗教だった当時の世理教には、信者が少なかったため私と森はすぐに幹部に迎えられました。しかし、数ヶ月前、研究所である情報を耳にしました。未来を見ることが出来る者がいる――と。未来を見る。そんなことは世理教からみれば在ってはならない事です。そして、私は研究所でもある程度の地位にいる人間なので、その能力をどうするつもりかという話を聞くことが出来ました。そうしたら、未来を見て、未来のテクノロジーを入手すると言うのです。この世の理を逸脱した行為です。その為、我々は決心しました。研究所を潰し、未来を見ることが出来るという人間を消そうと」

現在の状況を説明します。

僕を殺そうとしている人達――中年の男、林さんとスポーツマン風の男、森が門を隔てて僕と暦の前にいます。

門と言うのも、今僕達は僕の家のお玄関前でこんな重い話をしているからで……。

で、話は戻って。

つまり、宗教上の理由から僕を殺そうとしている訳か。

随分とその宗教とやらに入れ込んでいるものだなー。

僕は無理だ。

それにしても、研究所を潰す？

「研究所を潰す——と言うのは？」

僕は疑問に思った事を聞いてみた。

「我々が働いている——いや、もう働いていた、ですか。この世の理を越えたことをしようとしていたのです。我々が燃やしましたよ。全て」

「なっ——！」

燃やした？

そんな短絡的な！

世理教、危険思想すぎる！

そういえば、研究所で僕の事を聞いたっていう話はどこかで聞いたことがある。

……京都か。

京都で中井玲さんが言っていたんだ。

まさか、同じ研究所ってことはないよね？

……こんな状況だけど、一応電話で聞いてみるかな。

「あのー……ちょっと電話していいですか？」

駄目だよね、普通。

なのでだめもとで聞いてみた。

「いいですよ」

いいの！？

「今回、あなたは一種の被害者の様なものですから。それくらいは

自由にしていますよ。今日が久寿米木さんの最後の日ですから」

最後って……。

「まあ、どうも」

僕は京都へ行った際、ちゃっかり手に入れていた玲さんの電話番号へ電話をかける。

「あら、久寿米木くん。女の子に興味なさそうな顔をしていながらちゃっかりしているのね」

暦がじと目で僕を見る。

別にそんなつもりじゃなかったんだけどなー。

ただ、アフターサービスの意味でさ？

パソコンみたいに。

24時間365日、何かあったらどうぞって。

とか、思っていたら電話がつながる。

「あ、もしもし。お久しぶりです。久寿米木です」

『あ、久寿米木さん？お久しぶり。こんな時間にどうかしました？』

鈴が転がるような凜とした声が電話から聞こえてくる。

玲さんだ。

「いえ、ちょっと気になることがあって。玲さん、研究所に勤めているって言うていたじゃないですか。その研究所、なにか変わった事ありませんでした？」

単刀直入に聞いた。

積もる話もあるけれど、今はそんな場合じゃない。

『変わったことと言いかんというか……なくなっちゃいました、研究所。全焼です』

「え、燃えちゃったんですか！？いつ？」

『昨日です。なんでも、最初は事故か何かかと思われていたんですけれど、よく調べてみるとそういう仕掛けがしてあったらしくて……犯人はまだ捕まっていないんですよ。でも、夜遅くだったので、死んだ人とかはいなかったんですけど……。どうしてそんなことを？何かあったんですか？』

鋭いな。

そうです。

何かあったんですよ。

というか、何かあっているんですよ、というべき？

目の前に僕を狙っている危険思想を持った人たちがいるんですよ。

——とは言えず、

「いえ、美人へのアフターケアは小まめにしておくべきかと思いついて。それだけです。夜分遅くに失礼しました。では——」

と、僕はとても恥ずかしい事を言って無理やり電話を切った。

あー恥ずかしい。

なんであんなことを言っちゃったんだろうか……。

やっぱり、事故に見せかけていたか。

自分達の手を出来る限り汚したくない性分らしいから、もしかしたらとは思っていたけれど。

でも。

どうやら事実のようだ。

研究所を燃やしたと言っていたけれど、それが事実だった。

どうやらこの人たち、本気で僕を殺しに来たらしい。

いや、死んでもらいに言った方がいいのか。

どうやら、自ら手を下すのはあまり好まないようだし。

「どちらに電話を？」

林が聞いて来た。

こんな局面で電話だもんね。

そりゃ気になるか。

僕は玲さんに危害が及ばないようになりたい、名前を出さないように答える。

「いえ、ちょっと知り合いの美人に。どうやら、林さん達が研究所を燃やしたという話は事実のようですね」

「もちろん。この期に及んで嘘など付きませんよ」

妙に傲慢な態度が鼻につくな。

こう……いらつとくる。

暦をチラ見する。

暦はゲテモノでも見る様な表情だった。

僕はあそこまでの表情はしていない。

断じて。

と、僕の視線に気付いたのか気付かなかったのかは分からないが、暦が小声で話しかけて来た。

「なに、久寿米木くん。中村玲さんとこの人達、同じ研究所の勤務

だったのかしら」

暦が僕の耳元で言う。

なんか変な感じだ。

背中がムズムズする。

まあ、そんな状況ではないので、平静を装い僕も小さな声で、

「うん。で、実際に燃やしたらしい。昨日だって言っていたから、多分そう。で、その時間に大男2人を僕とせずに差し向けたんだろうね」

つまり、昨日の昼間は僕達に雇った大男を差し向けて、僕達を殺す。

しかし、林と森は研究所のある関西の方にいたから殺人は不可能。アリバイは成立。

そして昨日の夜に、研究所を仕掛けておいたもので全焼させた。が、その時2人は別の場所か何かにいてアリバイ成立。

もっとも、こちらの事件に関しては仕掛けによるものだとバレてしまっているため、アリバイは不成立だが。

「そう」

「話はまとまりましたかな」

林が言う。

今となっては会った最初のときのような表情とは大分違う。

林はニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

「そろそろ、久寿米木さんには死んでいただきたいのですが。出来れば、自ら」

やっぱりか。

出来る限り、自分達の手を汚したくはないらしい。

「お断りします」

当然、僕は言った。

「そうですか。では仕方ありません。……森さん」

そういつて林は森に声をかける。

「はい」

「殺して下さい」

「分かりました」

なるほど。

最初から薄々感じていたけれど、林がブレーンで森が実働か。

森が一步前へ出る。

すると――

「暦……」

暦が僕の前へ出る。

「任せなさい。問題ないわ」

問題ないわと言われても……。



全く、女の子に守ってもらうとか格好悪いな―僕。

「ダメそうなら早めに言って。そうになったら僕が――」

僕が能力で、と言おうとしたら――口を塞がれた。

「!!」

僕の口を、暦の口で。

唇と唇が触れあっている。

これは――キス？

なにこれ！

どういうこと！？

そして、僕の唇から離れた暦は口を開く。

「問題ないと言ったはずよ、久寿米木くん。それから今まで言っていないかったけれど――」

「……」

「私はあなたのことが好きよ。あなたが死んだらそのあとを追えるくらいにね」

そう言って暦は笑った。

今までに見たことのないような、女の子らしい笑顔で。

これは――告白、か！？

重い想いだ……。

かと言って別に嫌な気分ではないけれど。

むしろ――。

僕が何も言えずにいると、暦は門を開けて道路へ出る。

「おやおや、あなたが闘うんですか？ お話にもなりませんね」

林が言う。

キスについて触れてこないあたりはありがたい。

林は意外と良い奴なのかもしれない。

だからと言って死んでやるつもりはないが。

「あら、あまり舐めてもらっては困るわね。それと、闘わない人がそんなことを言っているのはとても無様よ、林さん」

確かに。

漫画なんかでもそういう奴は倒される。

しかもあつという間に。

林は、暦の言葉を聞くと表情をいやらしい笑みから憤怒の表情へと変貌させ、

「森さん、このお嬢さんも殺してもいいですよ」

森に命令した。

「分かりました」

そんなやり取りがされる中、

プルルルルル……

僕の電話が鳴った。

しずかからだった。

僕はこんな状況だけれど一応でた。

「もしも――」

『なにやってんの、春希！暦とキ、キ、キスなんてして！どういうつも――』

あー見られていたのか。

お恥ずかしい。

でも状況が状況だ。

そんな話をしている場合じゃない。

「暦が今から戦闘に入るから、援護をよろしく。もちろん、いざとなったら僕も出る」

ぷつ。ぷーぷーぷー。

僕はしずかの話の途中に無理やり割りこんで言いたい事だけ言っただけ切った。

僕だって、混乱しているんだよ！

そういえば、しずかの声が電話以外からも聞こえたような……。気のせいかな。

「おい、嬢ちゃん。随分俺を甘く見ているようだが……死ぬぞ？」

「ごめんなさい。ナメック語は嗜んでいないもので」

「日本語喋ってんだよ！」

こんなときでも暦は暦だな。

しかし、相手の戦力が未知数なのはどうかだろう。

暦には使うなど言われているけれど……。

数秒使うだけなら、寿命も数十秒から数分で済む。

ちよつと使うか。

僕はコンタクトレンズを相手にも、暦にも気付かれないように外した。

「っ——！」

その瞬間、頭に激痛が走る。

それと同時に未来の映像が見える。

1秒後。

僕は目を閉じた。

たった1秒、能力を使うだけで済んだ。

なぜなら、暦が——10秒で負けて、殺されてしまう未来が見えたから。

相手が強すぎた。

プロだった。

「殺し」の。

僕は——

「暦」

暦を呼ぶ。

「なにかしら。これから闘うところなのだけれど」

「戻って」

「あら、心配してくれているのかしら。でも——」

「戻れ」

「……」

暦は僕の普段使わない命令口調の言葉に驚いたようだが、そのただならぬ雰囲気を感じてくれたのか、

「しょうがないわね。久寿米木くんが言うなら」

戻ってく来てくれた。

これで、暦が殺されるのは回避した。

そして、未来が変わった。

「おいおい、どうするんだ？ 久寿米木よお」

森が言った。

だから、僕は――

「僕が――僕が、やるよ」

そう言って、右眼を開ける。

僕は1秒――つまり、10分間の未来を見て眼を閉じた。

どうせ反撃するんだ。

未来が変わってしまう。

だったら1秒ずつ見て行こう。

「あ？ 久寿米木が？ それは願ってもないことだ。さっさと殺してやるよ――っらあ！」

そういった森はいきなり僕に攻撃を仕掛けて来た。  
いや、いきなりではないか。

僕はこの未来を既に知っている。

森は高速で見えないと言っても過言ではないような右のストレートを僕の顔目がけて撃ってきたが、僕はそれを避ける。

「ほう、やるな！」

森は自慢のかどうかは知らないけれど、高速の右ストレート避けられたことに驚いていた。

が、すぐに気を取り直して、左右の拳で連打を仕掛けて来る。

が、これも僕は既に見た未来だ。

避けるなんて造作もない。

僕は無駄のない動きで、全ての連打を避けきる。

森は蹴りも入れて来た。

が、そんな攻撃の種類を変えた所で僕には全く関係がない。

その攻撃も下がりながら避ける。

あー絶対明日筋肉痛だよ。

運動会の後並の超痛いヤツ。

普段運動不足の僕にこんなことをさせるな！

そんなことを考える余裕が僕にはあった。

攻撃の総数が100発を越えたあたりだろうか。

さすがの森も疲れて来たようで動きが遅くなってきた。

今がチャンスか・・・？

そう思った僕は――

「――とっ！」

森の顔を目がけて殴ってみる。  
が、

「おっと！そう簡単にやられてたまるかよ」

いくら疲れていても、素人の拳打にはあたらなかった。

森はバックステップで軽やかに後ろに下がって間合いを取り、避ける。

まあ、当然か。

僕も、あたるとは思っていなかった。

「久寿米木よお、お前未来でも見てるのか？」

森が聞いて来た。

「まあね。そうでもしないと、避けられないさ」

「だろうな。俺の攻撃が一発も当たらないなんて、未来でも見ていないと不可能だからな」

僕は森が話している間に、また右眼を開ける。  
1秒だけ。

「――」

なるべく表情に辛さを出さないようにする。

相手にすきを見せるのと同義だからだ。

僕は1秒だけ右眼を開けて、すぐに閉じる。

10分間の未来を見た。

次で決める――。

と、森が一気に間合いを詰めて来た。

速い！

が、これも既にみた未来だ。

僕はタイミングを見計らって、森が近くに来たとき――。

右足で森の急所——股間を蹴り上げる。

「だあああああああああ！」

森は絶叫を上げてのた打ち回った。

少し離れた所では、まさかの展開に林がおろおろしている。  
そして、

「ひ、卑怯だ！股間を狙うなんて卑怯だ、久寿米木！」

と、言ってきた。

「いえいえ、卑怯ではないですよ。試合じゃないんですから、これくらい当然ですよ」

僕がそういうと、

「ええ、そうね。だからこれくらいしてもいいのかしらね」

暦が言った。

大きな石、いや岩を持って。

——岩？

暦は岩を持っのた打ち回る森へ近づく。

そして——岩を落とした。

森の股間に。

「ぐあああああああああああああ……！」

森さんは動かなくなった。

そして、股間からは赤い液体が流れている。



うわ、死んだな。

……男として。

再起不能だな、あれは。

2つの意味で。

っていうか僕の家の前で何をしているんだよ、暦。

知らない男の股間から流れ出ている血液なんて触りたくもない。  
誰が片付けるんだよ！

「な、なんてことを！」

林が言う。

僕はちよつとだけ同じことを暦に思った。  
言わないけど。

林が森へ駆け寄る。

森はそれでも動かない。  
まるで屍のようだ。

そんな様子を見ている僕。  
と、暦は電話をかけた始めた。

「あ、私よ。そこから中年の男、見えるかしら。ええ……そう、その人。その人の――を狙撃してちょうだい。もちろん、金属製の弾で。急いで」

その瞬間、

ズド。カラン……。

何かがあたった音と、小さな金属か何かが地面に落ちた音がした。

「があああああああああああ……！」

林が股間を押さえて絶叫し、倒れた。  
そして動かなくなった。

「これで一件落着かしらね」

僕の隣へと来た暦が言った。  
意外とあっさり片付いたな……。  
未来を見るとかチート能力すぎる。

「とりあえず、警察呼ぶか」

「あら、いいのかしら。この人達の口から、あなたの目のことがばれてしまうのではないかしら」

「誰も信じないよ。しかもこんな危険思想の宗教の信者だから。妄想で片づけられるだろうね」

「なるほど。ちゃんと考えているのね」

僕は警察を呼んだ。

すると、数分後、パトカー数台がやって来て気絶している2人を連行した。

僕達にも警察官が事情を聞いて来たが、この2人がおかしな妄想を言掛かりにして襲ってきたと言っておいた。

警察が調べれば、林さんと森が世理教と言う危険思想の週教信者と言うことが簡単に分かるだろう。

警察は僕達の説明に納得してあっさりと引き上げた。

「ふう」

と、息をついた僕。

すると、隣に立っている暦が言う。

「私はもう帰ろうと思うのだけれど……。久寿米木くん、返事を聞かせてもらえるかしら」

あー……。アレか。

アレのことか。

さて、なんと答えるか――？  
と、

「ちょっと待ったー！！！」

僕の家正面の家の庭からしずかが出て来た。  
そんなところに隠れていたのか。  
意外と近いじゃないか。

「しずか、そんなところに隠れていたのか」

「悪い！？」

「いや、別に……」

そんな大声で怒鳴らなくても……。

「っていうか何で今頃でできたのさ。もっと早く出てくればいいのに」

「だって、一応私、放火犯だし……。さっきまで警察いたし……」

なるほど。

と、ぼくが納得していると

「いいわ久寿米木くん。今日は帰りましょう」

僕に返事を求めていた暦が帰る宣言をした。  
なんで？

……あー。

しずかが出て来たからか。  
やっぱり仲が悪いままなのか。

「雨倉さんも今日は帰りましょう」

「え、私はまだ――」

「雨倉さん」

そういった暦は、しずかの耳元で何かをささやく。  
するとしずかが、

「……分かったわよ。だから、私のコレクションだけはどうか……」

と、簡単に折れた。

大体の想像はついちゃうけどさ。

「帰りましょう」

そう言って2人は帰って行った。  
僕は、家に入った。

\*\*\*\*

時間は25・00。

警察などが帰った後、近所の人達から、この騒ぎや家の前の血痕などについて色々聞かれたがなんとかはぐらかして……と言うことがあったがまあいい。

家族が寝静まった今、僕はまだ起きていた。

ちよつと考えることがあったからだ。

森が僕を殺そうとしたとき、暦が前に出て僕の為に戦ってくれようとした。

それなのに僕は――。

と、

プルルルル……

僕の携帯電話が鳴った。

表示を見る。

暦からだった。

こんな時間に何だろう。

僕はそう思いつつ電話に出る。

**第8話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)**

どーも、よねたにです。

色々立ってこんでいたのでちょっと間があきました。

正直この蠟燭のように――は自分でもどうなのか？と思う話ではありますが、ひとまず次の話で一区切りです。

感想や評価などよろしくお願いします。

では、また。

第9話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい（part

「もしもし」

『もしもし。こんな時間に電話をしておいてなんなのだけれど、今大丈夫かしら』

「大丈夫。ちょっと考え事をしていただけだから」

『考え事？』

「……今日のこと」

『今日と言われてもいろいろありすぎて何のことか分からないのだけれど』

「あー……。最初、暦が僕の代わりに森と戦おうとしてくれたことについて」

『それがどうかしたのかしら』

「ちょっと自分が嫌になって」

『……』

「暦が僕の代わりに戦ってくれたとき……ちょっと……安心しちゃったんだよね。ほっとしたというべきなのかもしれない」

『……誰だってそうじゃないのかしら』

「でも……なんか罪悪感みたいなものがあってさ。女の子に代わり  
に戦ってもらおうなんて」

『なるほどね。男の子だものね、久寿米木くん』

「茶化すなよ……。暦はすごいよ。人の為に危険を顧みず、危険の  
中へ飛び込んでさ」

『……別に、そんな大したことではないと思うわ』

「いや、大したことだよ。普通はそんなこと出来ないよ。……僕は  
さ、暦みたいになりたいと思う訳でさ」

『……と言うと、どういうことかしら』

「人の為に何かをする——例えるなら……蠟燭みたいにさ」

『蠟燭？』

「蠟燭のように身を削って人を照らす」

『……』

「僕はそんな人間になりたい」

『……いないわよ』

「え？」



『そんな聖人君子みたいな人、いないわよ』

「……」

『私は、久寿米木くんが好きだから、そうしただけのこと。久寿米木くんに好かれたいからそうしたにすぎないの。何の見返りも無く人の為に何かをする……蠟燭の様な人はいないわ』

「いや、暦。それはちょっと勘違いしているかもしれない。見返りなしで何かをする人なんてほとんどいないだろうね。ただ、その見返りが問題なんだよ。さっき、蠟燭で例えたけれど、蠟燭は人を安心させるし笑顔に出来たりもする。その笑顔が見返りなんだよ。そういう……なんて言ったらいいのか分からないけれど、人から見たらちっぽけな見返りかもしれないけれど、そういうもので、動ける様な人に僕はなりたいたいっていう意味で言ったんだ」

『……』

「暦だって同じだよ。自分で言うのもなんだけれど、僕に好かれたっていう他の人からしたら、なんだそれはっていう見返りの為に危険に身を投じようとした。投じようとしてくれた。そんなことが出来る人に僕はなりたくなって」

『なるほどね。そんな風に私が思われているなんて思いもしなかったわ。物ではなくて気持ち的な事と言うことかしらね』

「まあ、そういうこと。ちょっと臭いセリフだったかな」

『いえ、そんなことは無かったわ。格好良かったわ、久寿米木くん』

「あー……ははは」

『ところでなのだけれど。私が電話をした理由についてなのだけれど、そろそろ話してもいいかしら』

「あ、ごめん。なにかな」

『私の一世一代、格好付けたつもりの告白についてなのだけれど』

「あーうん」

『返事を聞こうとしたら雨倉さんが来てしまっただけにもそういう雰囲気ではなくなってしまって。で、今改めて聞こうと思ったのだけれど。それで、久寿米木くんの気持ちはいかなものかしら』

「んー……こんな風に、女の子の方から告白させている時点でも相当ダメだなんて思うんだけど、1つ聞いてもいいかな」

『ええ、どうぞ』

「小学校のときと大学に入ってからの数カ月しか接点がないわけ、しかも大人になってからというと大学の数カ月しか接点がないわけで。それなのにどうして——どうして僕なんかを好きになってくれたのかなー……と」

『まず、私の好きな人を「なんか」とは言って欲しくはないわね』

「あーごめん……?」

『いいわ。許してあげる。それで、理由についてなのだけれど、そ

んなものないわ』

「え？」

『少し混乱させてしまったかしらね。正確に言うと、理由は無いですね。あなたが全てが好きということね』

「全て――」

『なにか不満があるかしら』

「いや、ありません……」

『それで、返事を聞かせてくれるかしら』

「……僕「なんか」で良ければ、付き合ってもらえる？」

『久寿米木くん、私の好きな人のことを「なんか」と言わないでくれるかしらとさっき――。まあ、いいわ』

「そう？ いいの？」

『ええ、いいわ』

「分かった」

『ところで、私のこと好きなのかしら。好きではないけれど、なし崩し的に、と言うことではないわよね』

「……実を言うとき、京都旅行あったでしょ」

『ええ、あったわね』

「あの辺りから、こう……暦をさりげなく意識はしていた」

『あら、嬉しいことを言ってくれるじゃないの。全く気が付かなかったわ』

「そりゃ、気が付かない程、さりげなくだったからね」

『あらそう』

「もしかしてなんだけど、僕が風呂に入っているときに暦が入って来たのって——」

『わざとよ。混浴だというからわざわざあの宿にしたのよ』

「え、でもあの京都旅行、宿は着いてから決めたんじゃない——」

『そんなわけじゃない。事前に私が調査済みよ。混浴のお風呂がある宿と言う事だね』

「な——！」

『それと、宿泊人数が少なくて規模の小さい宿というのも決め手だったわ』

「……」

『あら、久寿米木くんが黙ってしまったわね』

「まさかそんな裏話があるなんて思ってもいなかったよ」

『もっとポジティブに考えて欲しいものね。あの頃から私は久寿米木くんのことがそんなことをしてしまう程好きだったということよ』

「……ありがとうございます」

『どういたしまして』

「そういえば」

『なにかしら』

「全く気にもしていなかったけれどさ、部室どうするの？ 燃えちゃったし」

『そこは気にしなくても問題ないわ』

「どういことさ」

『実は私の遠い親戚にかなりのお金持ちの人がいるのよ。それでその人が道楽で都内に探偵事務所を開いて持っていてね。でもその親戚も、老衰で死んでしまったのよ』

「それってこの間、沖縄にいる遠い親戚の葬式に行ったら、日にち間違えて葬式終わっちゃっててそのまま旅行して帰って来たってやつ？」

『そうよ。それで、その人の探偵事務所、私が使ってもいいという

ことになったのよ。正確にはその事務所のあるところなのだけだ」

「つまり、そのまま事務所として使ってもいいし、それ以外に使ってもかまわないということ？」

『ええ。それで私はそのまま探偵事務所として使おうと思っているのよ。大学のC棟の修繕が済むまでね』

「どうしてさ。正直儲かる気はしないけれど」

『利益は考えなくていいわ。小さいけれどその親戚の持ちビルだから。家賃もいらぬし光熱費なんかはその親戚の遺産や家賃収入を使っているから』

「どんだけ金持ちなんだよ……。でも、どうして探偵事務所を？」

『だって、面白そうじゃない』

「えー」

『もう決まったことよ。決定事項。意外と大学からも近いから、その辺りも気にしないでいいわ』

「でもさ、いろいろ役所に出す書類とか――」

『提出済みよ』

「やること早いね、相変わらず……」

『だから、明日はそこへ来てちょうだい。一応、荷物整理とかある

から』

「荷物って言っても、燃えちゃったじゃん……」

『買ったのよ。大学がお金を出してくれたのよ。今回被害にあったサークルや部活にね』

「へー随分と太っ腹で」

『と言うことだから。場所はあとでメールで連絡するわ』

「分かったよ」

こうして、舞台は大学から探偵事務所へと変わる――。

**第9話 蠟燭のように身を削って人を照らすような人に僕はなりたい (part 1)**

どーも、よねたにです。

この話までがプロローグ的なものになります。

なので、展開が早いなーと思うかと思いますがどうかご容赦を。

次からは舞台を探偵事務所へと移して始まります。

感想、評価等お待ちしております。

では、また。



**第10話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ**

8月14日。

僕と暦が恋人同士となった次の日。

時刻は10…00。

まだ太陽が真上に来ていないにも拘らず、物凄く暑い。

普段ならまだ、エアコンの点いた部屋で寝ている時間だ。

僕は今、暦が死んだ親戚から譲り受けた探偵事務所のあるビルの前にいる。

「あー暑い……。コンクリートウジャンゴーが恨めしいわ……」

僕はビルを見上げる。

見上げると言ってもそれほど高い建物ではない。

3階建のそこそキレイなビルだ。

1階には「パラダイスマート」と言う名前のコンビニエンスストアが入っている。

名前を見れば分かるが、個人経営の店だ。

こんな派手な名前のコンビニが全国各地にあったまるか！

2階には「喫茶ブラジル」という喫茶店。

おととい入った喫茶店だ。

まさか、こんな展開になるとは思ってもいなかった。

そして3階に探偵事務所がある。

看板にはこう書かれている。

「久寿米木探偵事務所」

全く、暦め……。

これは軽い羞恥プレイなのだろうか。

彼女じゃなかったら張り倒すレベルだぞ、これ。

僕はそんなことを思いながら、3階の事務所へと上がった。

「ちーす」

暑さでちよつとキャラが崩れた。

まあいい。

僕は事務所内へと足を踏み入れた。

室内は段ボールなどが散乱していて、家具もまだなかったが、床や壁、照明を見る限りとても重厚感あふれる如何にもな探偵事務所だった。

広さは小学校や中学校の教室2つ分程と言ったところか。

割と広い。

おっと、キッチンまで付いているのか。

キッチンにはフライパンや圧力鍋と言った調理器具が既に置かれていた。

僕は周りにも目を向ける。

床はよくわからないけれど、大理石風のタイル。

風なのか……？

壁はよく分からない柄だけど近寄りがたい感じ。

金持ち芸能人のお宅拝見とかで見たような……？。

照明も……ちっさいシャンデリアチックな感じ。

これは蛍光灯じゃない……！

「あら、久寿米木くん。割と遅いのね」

中には既に暦がいて、床をクイックルワイパー的なもので掃除していた。

そして早速文句を言われた。

「普段この時間寝ているんだ。十分早い時間だよ」

「一体朝勃ちの処理に何時間かけているのよ」

「その突っ込みは不適切だ！」

一発目から下ネタかい！

今日は随分飛ばしてゐるな。

「久寿米木くん。ぼさつとしていないで片づけられる所だけでも片付けてちょうだい。もう少ししたら荷物が届くから」

「はいはい」

「その返事は幼児プレイを希望しているのかしら」

「違うよ！」

「なら返事は一回よ」

「……はい」

なんなんだ、一体！？

僕が一体何をした！

僕達、付き合っているんじゃないの！？

そうしたらもっとこう、恋人っぽい会話とかあるじゃん！

僕は近くにあったバケツに水を汲み、雑巾で窓を拭き始める。

まずは水拭き。

次に空拭き。

その繰り返し。

暦は僕の後ろでクイックルワイパーを魔法ステッキの如く操っている。

ちゃんと掃除しろよ！

言わないけどさ。

と、

ピンポーン

どうやら家具などが届いたらしい。

暦が入口の方へと向かう。

僕も掃除の手を休めて、入口の方へと向かう。

「あ、どうも。家具家電をお届けに参りました」

僕が着いたとき、暦がちょうど配送業者と話していた。

「分かりました。とりあえず全て中に入れて下さい。あとは全て私たちがやりますので」

「では、トラックの方から運んできますので少々お待ち下さい」

そう言っ、配送業者数人はトラックへ荷物を取りに行ったかと思ふとあっという間に荷物を持って戻って来た。

数分後――。

「以上で全てになります。こちらにサインをお願いします」

暦がサインをする。

「はい。ありがとうございました」

そう言って配送業者数人は帰って行った。  
かなり速かったなー。

これだけの荷物をたった数人でなんて……。

今、室内には大量の大型家具家電がある。

テレビ、冷蔵庫、デスク2つ、椅子2つ、ローテーブル1つ、ソファ12つ、本棚1つ、食器棚1つ――。

今、目に入るだけでそれだけがある。

「さて、久寿米木くん。これを私の指示する位置に正確に配置してくれないかしら」

「え、全部僕がやるの？」

物凄い量があるんだけど……。

さすがに1人じゃ無理じゃないか？

僕は言葉にしないで表情で伝えようとする。

「ええ。全て久寿米木くんがやるのよ。それとも何かしら。彼女のか弱い細腕でこんなに大きくて重い物を運べというのかしら」

全く駄目だった。

「……分かったよ。運べばいいんでしょ」

「そうよ。運べばいいのよ、運べば。分かっているじゃない。無駄な抵抗は無駄なのよ」

こうして僕は作業へと入った。

まずは壁際に配置する本棚や食器棚を運ぶことにした。  
が、さっそくもう挫折しそうだ。

「お、重い……んですけど暦さん」

「だから？」

暦は荷物を包んでいるプチプチを剥がして、潰していた。  
作業している——といえば作業している。

「……もういいです」

僕は諦めた。

本当に僕のが好きなんだよね？  
すっごい不安になってくる。

僕は作業を続行する。

しかし、どうやって動かそうか……。  
壁際までは意外と遠い。

そういえば、イースター島のモアイ像と違ってどうやって運搬さ  
れたかよく分かっていないらしい。

説としては、像を横にして下に丸太をしいて、丸太を転がして運搬  
させた説とか、モアイ像を立てたまま、ちよつとずつずらして動か  
した説とかいろいろあるらしい。

こういうのって不思議だよね。

「久寿米木くん、早くしないと日が暮れるわよ」

僕は暦の声で現実に戻された。

「分かっているけどさ……」

本当に重いんだよ！

この本棚とか、結構高そうな材質で出来ているしさ。  
本当の木だもん、しょうがないじゃないか！

「あのー……」

僕は曆に声をかける。

「なにかしら」

「手伝ってもらえませんかね」

「……しょうがないわね」

「ありがとうございます！」

「ただし」

「え？」

「条件があるわ」

「なにかな」

「私にキスしてちょうだい」

「えー！？」

「えー」だよ。

それ「えー」だよ！

「嫌なのかしら」

「いや、嫌じゃないけれどさ」

「嫌ではないのならしてくれないかしら。昨日、私からはしたのだから」

「……したら手伝ってくれるのかよ？」

「もちろんよ。女に二言は無いわ」

「本当に？」

「ええ。女に二言は無いわ」

女に二言は無いわって2回言ってるじゃん！  
二言、しちゃってるじゃん！  
まあ、言わないけどさ。

「分かったよ」

僕は暦に近づいていく。

なんで本棚運ぶのを手伝ってもらうのにこんなことを……。  
一体僕が何をした！

いくら2人しかいないからと言っても、恥ずかしいよ！  
そんなことを考えていたら、いつの間にか暦が目の前にいた。

「さあ、どうぞ」



そう言っ　て暦は目を瞑る。

うわー、やばい。

今まで何となくレベルでしか暦を意識していなかったから気付かなかったけれど、暦、めっちゃ可愛いんですけど!?

こんなに可愛かったっけ?

あ、いつも毒舌しか吐かないから気が付かなかったのか。

それにしても、だ。

この状況、キスしないとだめだね。

ダメだね!?

僕は意を決して暦の唇にそつと――。

バアン!

え、なに!?

入口の方!?

「ちよつとまったあー!」

聞いたことのある声が聞こえる。

しずかだ。

僕は慌てて暦から離れる。

暦はなんだか機嫌の悪そうな顔をしていた。

しずかが、こっちへやってくる。

正確には僕の所へ――。

「おいこら、てめー。何してる」

こんなに乱暴な言葉遣いだったかしらー?  
もうちよつと柔らかい感じじゃなかった?

「えーっと、そのー……暦の鼻から鼻毛が――」

と、僕が苦しい言い訳をすると、

ズダム!!

「かはっ！」

僕は暦に蹴りを入れられた。

お腹に思いつきり。

息が……出来ない……よ!

僕はひざから崩れ落ち、お腹を押さえてうずくまる。

「久寿米木くん、するならもっとまともな言い訳をしなさい」

これしか思いつかなかったんだよ!

と、言いたいのだが息が出来なくて言葉にできない。

オフコース現象……?

もう自分でも何を考えているのか分からない。

「ちょっと! あんたが蹴りいれちゃうから、春希から聞き出せなくなっちゃったじゃない!」

しずかが暦に文句を言う。

「では、代わりに私が答えてあげるわ。久寿米木くんは私に襲いかかろうとしていたのよ」

ちよっと暦さーん!

何を言っているんですかね!?

「童貞をこじらせていたのでしょうね。久寿米木くんは持て余した性欲の丈を私に――」

「うわあああ!!」

バン!バン!バン!バン!バン!バン!チャキ、ポイ、コロコロ……。

しずかは暦によって90%以上誇張された話を真に受け、持っていたガスガンを僕の方へ連射させた。

「うわ、ちょ、まっ!」

危なっ!

僕はうずくまり、お腹の激痛に耐えながら弾丸から身を守る。

その甲斐あってか、弾丸はすべて僕を逸れて床に当たる。

そして、床は何故か全く傷がつかない。

……これ、本物の大理石?

と、僕はあることに思い至る。

さっき、弾丸の発射音の最後に変わった音がしたような……。

戦争物の映画とかで聞いたような音。

僕は視線を少し上げて床を見渡す。

そこに、小さなパイナップル（色が緑っぽくてごつごつしている）を見つけた。

「これだけ本物!？」

僕は痛みを忘れてパイナップル――いや、手榴弾を拾って外――

はだめだ。

外は閑静な住宅街だ。

マジでヤバイ騒ぎになる。

僕は室内を見渡して、キッチンに目を止める。

「暦、圧力鍋！」

暦にそう言うと、暦はすぐに理解しキッチンへ行って圧力鍋を僕に放る。

僕はすぐにその中へ手榴弾を入れて蓋をきつく締める。

そして、近くにあった食器棚へ放り込み、扉を閉める。

この間約5秒。

と、直後――

ズドン！

食器棚の扉が吹き飛んできた。

僕の方へ。

僕は慌ててそれ避ける。

食器棚がかなりしっかりした木で出来ていたため、破裂して木っ端微塵になった圧力鍋の破片が突き刺さり、飛び散らないで済んだ。

被害状況。

食器棚が駄目になった。

それから圧力鍋が跡形も無く消しとんだ。

死傷者0。

意外と何とかなった。

「はあああああ……」

僕はその場にへたり込んだ。

「ナイス判断ね、久寿米木くん」

キッチンにいた暦が僕の所へやって来た。

しずかはいつの間にか、入口の方へ避難していた。

「意外と、なんとかなるもんだね」

「あれが圧力鍋じゃなかったらどうなっていたかしらね」

「確かに」

「それに食器棚も木製の立派なものだったからよかったけれど」

「確かに」

本当に、運が良かった。

……いや、運は悪いだろう。

ただの不幸中の幸いだ。

「いやーごめんごめん」

入口の方へと非難していた事件の当事者が戻って来た。

「ごめんで済んだら警察も裁判所も軍隊も兵器も要らないよ」

「確かに」

「っていうか何で手榴弾なんて持っていたんだよ」

「メイドイン私」

「手作りかい！」

もう怒る気も失せた。

それよりも、なんで――

「なんでこんなことをしたんだよ」

僕が静かに聞いた。

すると意外にも、

「雨倉さん、ちょっと話があるのだけれど。そうね……キッチンまで来てもらってもいいかしら」

暦がしずかに話があると言って声をかけた。

あれだけ仲が悪かったのに。

なんだかんだ言っても、多少は仲が良くなってきているのか。

2人はキッチンへと移動した。

手持無沙汰になった僕は――。

うん、とりあえず片付けよう。

飛び散った元食器棚の破片を――。

\*\*\*\*\*

「私はまだ――の事、諦めないからね！覚悟していなさいよ！」

僕が破片を一通り片付け終わったり、本棚は無理だったのでデスク

を運んでいた頃、キッチンの方からしずかの声が聞こえて来た。  
諦めないってなんのこと？

「ええ、精々頑張りなさい」

と、暦の声も聞こえて来た。

暦にしては大きな声だ。

珍しい。

どうやら話が終わったようだ。

2人がキッチンの方から戻って来た。

なんだか、清々しい顔を2人共がしている。

「おかえり。何の話だったの、とか聞いてもいい？」

「いえ、久寿米木くんには聞かせられない話よ」

「そうね。春希には言えないわ」

どうやら、僕には内緒の話らしい。

「あと、それから。私達、和解したから」

「へー。それは良かった」

「「ねー」」

ここまで仲よくなれると逆になんか……ね。  
気持ち悪い感じがする。

今までなんで不和だったのか物凄く聞きたい。  
聞かないけどさ。

と、

「あ、春希、前！前！」

「え？」

ドン。ヒュー。ズドン。バン。バタバタン。バキ。

「うおおおおお、痛い痛い痛い痛い！」

状況を説明しよう。

僕は2人を見ながら——つまりよそ見をしながらそれなりに重いデスクを運んでいた。

そうしたら、いつの間にか僕の前には本棚が。

それに気がつかないで進む僕。

それに気がついたしずかが僕に慌てて声をかける。

が、時すでに遅く。

ドンとぶつかり。

ヒューと本棚が倒れてきて。

バンと僕の前にあったデスクに当たって、その上でぐるんと1回転してから僕にぶち当たり。

その本棚によりバタと僕が床に倒れ、僕の右腕にボタンと本棚が落ちて。

バキと僕の右腕から音がした。

だめだ、上手く説明できている気がしない！

それも腕が痛いからしょうがない！

しょうがないんだ！

「ちょっと春希、大丈夫！？」



「とりあえず、腕の上に乗っている本棚をどかしましょう。雨倉さん、手伝ってくれるかしら」

「分かった！」

そう言って2人は僕の右腕にずっしりと乗っている本棚をどけた。っていうか、曆冷静すぎないか？

「で、大丈夫なのかしら。久寿米木くん」

「おうおう、右腕がいかれちゃってらあ！はは！」

「大丈夫じゃないよ！超痛いんだから！あと、しずかのテンションとキャラが、骨折という非日常に出会っておかしくなってるよ！？もつと僕に優しさを見せてよ！」

「こんな時に「やらしさを見せてよ！」なんて、とんだ変態ね、久寿米木くん」

「聞き間違えないで！優しさ、優しさ！」

「ほー！腕が360度曲がるぜ！人体の神秘だぜ！」

「痛い痛い痛い！ここは人体の不思議展じゃねえよ！早く救急車を呼んでくれ！」

「お、腕がのびるぜ？ゴムゴムの実でも食べたのか？ヒーハー！（↑腕の骨が完全に折れた）」

「ぐああ……」

「あら、久寿米木くんが気絶してしまったわね」

このあと、さすがにまずいと思った暦が救急車を呼んでくれた。  
しかし、このあともしずかの妙なテンションの高さが続き、本来なら全治4週間程の所が全治2ヶ月にまで延びた。

## 第10話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ

どーも、よねたにです。

プロログも終わって、ここからが本編です。

が、まあまだ日常編です。

事件等はもうちょい先になります。

基本コメディーなので暗くなり過ぎないように、テンポよく読めるように書いていければと思っています。

感想、評価等お待ちしております。

では、また。

**第11話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ**

8月15日。

現在の時刻は11…45。

昼ちよつと前。

僕は今、病院のベッドの上にいる。  
なぜ？

骨折したからだよ！

「しかも全治2カ月って……。なんてことをしてくれたんだよ。ねえ、雨倉しずかさん？」

僕はベッドの横のパイプ椅子に座るしずかに向けて嫌みたっぷりに含めて言った。

「いやー。本当にその件については海よりも、乙女の恋心よりも深く反省している所存でございますので、どうか久寿米木様の慈悲深い御心でお許しを——」

例えば解りづらいし。

乙女の恋心ってどれくらい深いんだって話だよ。

「どの口が言うんだよ！お前のせいだ、お前の！なにが「人体の神秘」だ、バカたれが！腕折れてんだよ！そりゃ360度曲がるし、ちよつとは腕伸びるよ！」

僕は思い出す。

しずかが僕の体を人体の不思議展か何かと勘違いして、いじくりまわした昨日の忌まわしい記憶を。

「本当に申し訳なく――」

「痛いって言ったよな？ 痛い痛いって叫んだよな？ なにが「ヒーハー！」だよ！」

「……」

「確かに、人が骨折とかすると若干テンション高くなるのは分かる。分かるけどさ、「ヒーハー」とか何言ってるの？ それで完治するまで倍になっちゃったからね！？」

「も……」

しずかが何か言った。  
が、小声過ぎて聞こえない。

「も？」

僕がもう一度という意味を込めて聞き返す。  
すると――

「申し訳なく思ってるってゆうとんじゃ、ぼけー！！」

そう言ってしずかは僕の病室を出て行った。

「逆切れすんな！」

僕はしずかの出て行った扉に向かって叫んだあと、ベッドに横になる。

現在、僕の病室にはしずかがメロンをむき出しでそのまま持ってくるという暴挙にも近い、もっと気を使って欲しい見舞の最中だった。

ちなみに物凄い大声で叫び合っていたが、個室なので問題はない、と思う。

コンコン。

「入ってもいいかしら」

と、今度は暦が見舞いに来た。

「ん、どうぞ」

僕がそういうと暦は僕のベットの傍の椅子に腰かける。

「災難だったわね、久寿米木くん」

「災難なんてレベルじゃないよ。僕なんてしずかのせいでプリンセス天功も真っ青の腕が360度曲がるイリュージョンをやったのけることになったんだから」

「……プリンセスティンコー？」

「プリンセス天功！聞き間違えが酷いな、最近！」

「ああ、ごめんなさい。わざとではないのよ？」

「わざとだったら悲しくなるような間違え方だよ……」

僕の彼女がわざとエロく聞き間違えるなんて考えたくもない。  
どんな変態性の持ち主だよ。

「それで、腕の具合はどうなのかしら」

「全治4週間で2カ月に延びたよ」

「それはご愁傷さまね」

一言で片づけられた。  
涙が出て来るよ！

「そういえば、最近の医療の進歩はすごいね」

「どういふことかしら」

「例えば、このギプス見てよ」

「それがどうかしたのかしら」

「ここ」

そうやって僕はギプスの真ん中あたりを押す。  
すると、パカッと言う音と共にギプスが開く。

「……小物入れ……かしら」

「そう、小物入れになっているんだよ！これ意外と便利でさー。やつぱり日本の医療は最先端だね」

「これは医療なのかしら。主婦のアイディア商品とかにありそうなのだけだ」

「レベルが違うよ！」

「……そう」

暦が僕を哀れな子ヒツジでも見るかのような目で見た。  
なんでだろう。

「そんなことより、久寿米木くん」

「なにかな」

「テレビを付けてもいいかしら」

「あー。うん」

「ありがとう」

そういつて暦は病室の型落ちしたブラウン管テレビのスイッチを入れた。

まあ、何を見るかは予想付いているさ。  
言わないけど。

ミシマ（以下ミ）『みなさん、こんにちは！司会のミシマです』

オオクラ（以下オ）『コメンテーターのオオクラです』

ミ『いやー八月もう半ばで、暑さ真っ盛りですね』



オ『そういえば、私事なんですが』

ミ『なんですか（↑面倒臭そう）』

オ『このたび結婚することになりました』

ミ『あ、それはおめでとうございます。面倒臭そうに「なんですか」とか言っちゃってなんかすみません』

オ『あ、そんなに謝らないください。私が悪い人みたいになっちゃうので。まあ、昔は悪い人ではあったんですが。そして、ありがとうございます』

ミ『結婚式は？』

オ『これからなんですよ。それですね、私、婿に行くんですが』

ミ『あ、そうなんですか。珍しいですね』

オ『ええ、まあ。それですね、本来ならば花嫁の手紙なんですけど、花婿の手紙を書かなければいけないんですよ』

ミ『なるほど。結婚式の涙場面、一番いいシーンですね』

オ『ええ。それで、一応作っては見たんですが、ちょっと不安な所があるので、見てもらってもいいですか？』

ミ『えーと、全国放送の生放送なんですけど……よろしいんですか？結婚式で読むものですよ？』

オ『ええ。もちろん、最後の仕上げは自分でやりますよ?』

ミ『まあ、私なんかで良ければ』

オ『ありがとうございます。それでは――』

\*\*\*\*\*

オ『母さん。そして、元父さんの現母さん』

ミ『複雑な家庭なのはその文章で物凄く伝わっては来るんですが、普通に父さんでいいんじゃないですか?そこは』

オ『こんにちは。それともこんばんは、かな?』

ミ『あ、無視ですか。そういう方向ですか。それと、配達の手紙じゃないんですから。結婚式で読むですよね?』

オ『大安きちぢゅ……きちじゅつ……きつ……きい……きちぢてゆ――』

ミ『読めないなら書かなきゃいいのに』

オ『今日この日から僕は、家から――いつもの食卓からいなくなります。寂しい思いをさせるかもしれないけれど……そこは、ごめん』

ミ『変えたよ。でも、なんかいいですね』

オ『僕は、僕の出張先だった発情島で彼女に出会いました』

ミ『……八丈島って言いたかったんですかね』

オ『最初に交わした言葉は、彼女が言った「ここ、犯して下さい」でした』

ミ『……なんかニュアンスがおかしい気がします。多分「ここ、置かして下さい」なんでしょうね』

オ『そんな始まりから、早2年。僕達は結婚します。そして私、オクラは婿——いや、お婿さんに行きます！』

ミ『そんな「お嫁さん」みたく無理に言わなくても。語呂が悪いですネ、なんとなく』

オ『母さん、そして父さ——あ、ごめん、母さん』

ミ『徹底しているんですね。お父さんをお母さんと呼ぶこと』

オ『今まで、沢山の迷惑をかけたかもしれないけれど……本当にありがとう！そして、これからよろしくお願いします！』

ミ『あ、最後普通ですね』

\*\*\*\*\*

オ『とまあ、こういう感じの流れなんですけど、どうですか』

ミ『情報番組のオープニングトークにする内容ではないと思います。というかそろそろニュースをやりましょう。最初のニュースはこちら！「危険思想宗教団体の世理教の幹部、逮捕」！――』

\*\*\*\*\*

「へー。オオクラさん、結婚するんだ」

意外だ。

あれだけ訳のわからない犯罪歴や学歴を持っているのに。世の中、何があるか分からないものだ。

そして、暦もこれには同意見のようで、

「本当に意外ね。私だったら前科持ちで高校を4年間、大学を7年間やって居た人なんて願い下げただけだ」

誰だってそうだろう。

――って！

「論点がずれている！」

「なによ久寿米木くん。うるさいわね」

「世理教のこと！ニュース！」

「まあ、当然ではないのかしら」

僕達はもう一度テレビを見る。

ミシマ『えー今日の警察の記者会見で、「世理教」と言う宗教団体の幹部が8月12日に京都にある「SH研究所」――その研究所については詳しく報道陣にも知らされていませんが、「SH研究所」という研究所を全焼させ、翌日には東京の大学生に意味不明な言いがかりをつけて殺そうとした容疑が掛っています。今回逮捕されたのは、世理教の教主である林容疑者と世理教の幹部、森容疑者です。現在は警察で取り調べが行われていますが、未だに「未来を見る人間はこの世にいてはならない」等、意味の分からない妄想ともとれる発言を繰り返しており、取り調べの長期化が予想されます』

……妄想、ね。

まあ、普通はそうなるよね。

「久寿米木くんの存在はファンタジーらしいわよ」

暦がニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて僕に言う。

「仕方ないだろう。未来が見えるなんて普通は誰も信じられないさ」

そして、研究所についてようやく名前が解った。

SH研究所というらしい。

そこで、林と森と玲さんが働いていた。

僕についていろいろ調べていたらしい。

僕は暦のいやらしい笑みを受け流して、考える。

あの研究所では僕のことを探り、僕の能力を科学的に解明して、機械か何かで実用化し、未来のテクノロジーを現代で発表し利益を得ようとする計画が漠然とだがあった、と林が言っていた。

恐らく、利益の額も莫大だっただろう。

するとひょっとして、まだその計画を実行しようとしている元研究所職員がいる……？

死傷者はゼロと玲さんも言っていた。

誰も死んでいない。

いなくなっていない。

と言うことは、幹部などのお偉い方もいる。

危機はまだ去っていない……のか？

そもそも「SH研究所」とは何なのか。

いったい何を研究していたのだろうか。

目的が全く分からない。

「久寿米木くん、考えているところ悪いのだけれど」

と、暦が言った。

僕は考えることをとりあえず中断し、聞く体制に入る。

「なにかな」

「あなたのお母さんに頼まれていたものを忘れていたわ。これよ」

そういつて暦は僕に1つの白い封筒を渡してきた。

「これは？」

聞きながら僕は封筒を受け取る。

「あなた宛ての手紙が届いていたらしいわ。それで、ここに来る途中に久寿米木くんのお母さんに偶然逢ったときに渡しておくよう頼まれたのよ」

僕は誰から来たのかを確認する。

「あー……親戚だ。従姉の人」

僕は封筒を開ける。

すると中からは――

「結婚式の招待状？それと――手紙？」

とりあえず僕は何が何だか分からないから手紙を読むことにした。

「えーと。……久しぶり。元気にしていましたか？突然ですが、私は結婚することになりました。1つ年上のカッコいい旦那さんです。つきましては、大学では文学部の春希に結婚式での両親への手紙の添削をお願いしたいと思いついて、結婚式の招待状と一緒に送らせてもらいます！添削よろしく！P・S・17日に手紙を取りに行きますのであしからず」……ってなにこれ」

読んでも解らなかった。

「要するに手紙の添削でしょ。それくらいやってもいいのではないかしら。確か久寿米木くん、大学の成績、そこそ良かったはずよね」

「まあね」

「少しは謙遜しなさい。いらつとくるわ」

そう、僕はなんだかんだで大学の成績はそこそいいのだ。

暦よりも、ね。

やるときはやるんだ！

と、そんなことを思っていると、

ガラッ！

物凄い勢いで病室のドアが開いた。

「何で追いかけてこないのよ！」

雨倉しずか、再登場。

何で追いかけてこないのよ、って理不尽すぎでしょ！

僕はしずかのせいで病院送りでベッドで安静にしていなきゃいけないのに！

「追いかけれないんだよ！しずかのせいで！」

「くっ、盲点！」

「くっ、盲点！じゃねーよ！」

察しろ！

「あら、雨倉さん。その手に持っている物は何かしら」

そんなやり取りをしていた僕達とは別に、冷静な暦がしずかの手に何かが握られていることに気付く。

たしかに何か持っているな。

なんだ、あれ。



「え？ああ。これは、さっき事務所の方に行ったら、手紙が来ていたからとりあえず持って来たのよ」

「事務所に？」

僕は言う。

事務所に手紙って……。

「そう」

しずかは暦に手紙を渡す。

そして、病室にあるもう1つのパイプ椅子を持って来て、暦の隣に座る。

「あら、これは――」

手紙を開けて呼んだ暦が言う。

なにになになに？

もう、面倒な事になる予感しかないよ！？

「なんだったの？」

しずかが聞く。

暦は今日で何度目か分からない、いやらしい笑みを浮かべて、

「依頼よ」

と、言った。

うわー！

来たか。

っていかもう来たのか！  
早いよー。

「あ、わたしじむしょのほうでじむしごとをしなくちゃいけない  
だったー（↑棒読み）」

依頼のことを聞いたしずかは、片言でそう言って、病室からそそ  
くさと出て行った。

「あら、雨倉さん行ってしまったわ」

そう言って暦は僕の間を見つめて来る。

「困ったわね。雨倉さんは仕事があるというし。この依頼は私一人  
では出来そうにないわね」

「……」

「本当に困ったわ。どうしたらいいのかしら」

「……」

「……久寿米木くん」

「……はい」

「手伝いなさい」

「……はい」

強制参加。

僕の意志は尊重されることがないらしい。

僕、病人なのに。

全治2カ月なのに。

安静にしていけないといけないのに。

まあ、仕方がない。

恋人の頼みだ。

「それで？」

僕は聞く。

「どんな依頼なのさ」

「長野」

「は？」

「長野に行かなければならないのよ」

ん？

おかしいぞ？

この市内に「長野町」とかはないはずだぞ？

「この辺に長野って地名あったっけ」

「久寿米木くん、現実逃避は見苦しいわよ。長野県よ、長野県」

「まじで？」

「マジよ」

これはなかなか骨が折れそうだ。  
って、もう折れてるかー！  
ははは！……はあ。

「で、依頼の内容は？」

「現地で説明するって書いてあるわね」

現地説明って……。

怖すぎる！

それにしても長野県かー……。

楽な依頼だといいなー……。

僕はそんなことを思いながら、起こしていた身体をベッドに預けた。

**第11話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ**

どーも、よねたにです。

遅れました。

随分前からストックは切れていまして、それでも目安として3日以内に次の話を出すようにはしていたのですが・・・。

ちょっと、忙しくて書く時間がありませんでした。

第11話まで来ました。

次回はいつになるのでしょうか・・・。

ただ、ちよくちよく改稿はしていくつもりなので、暇があれば以前の話も読んでみてください。

感想、評価等お待ちしております。

では、また。

## 第12話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ

8月17日。

僕は——いや、僕と暦は今、新宿駅にいる。

何故かって？

依頼で長野に行くからです……。

昨日、病院の先生にかなり無理を言って退院させてもらい、今はまだ腕を吊っている状態です。

もちろん、ギプス装着で。

ガチガチです。

そんな状態で僕は今、新宿駅のホームで電車が来るのを待っている。

僕の隣には暦が無表情で立っている。

ちなみにしずかは事務所で留守番だ。

「まさか夏休みに二度も遠出することになるなんて思ってもいなかった……」

僕はため息をつきながら言った。

1回につき、鉄道での移動費や宿代や食事代などで約5万円近くかかる。

と言う訳であつという間に今月だけで10万オーバー。

1人暮らしでただでさえお金キツイのに。

破産する。

そんな僕の言葉を聞いた暦が言う。

「この依頼がちゃんと達成できれば、依頼料が相当な額入るのだけれどね、久寿米木くん」

「なんなりとご命令を、月村様」

と、へこへこする僕。

資本主義の縮図がここにあった。

一応、探偵事務所の所長は僕だけれど、財布は全て暦が握っている。

簡単に言うとは僕はお飾りの所長と言う事でして。

ここで暦に粗相をすると、給料が貰えなくなるかもしれないのだ。つまり、先ほどの暦の言葉は遠回しな脅しだ。

「そういえば、まだ聞いていなかったけれど」

僕はそう前置きをして言う。

「どんな依頼なの？それと、いくら貰えるの？

後ろの方、重要だからね！？」

僕は後者を強調して言った。

「あら、まだ言っていないかったかしら」

「言っていない」

聞かずにについて来た僕も僕だが。

「そう。依頼の内容は、現地に到着してから話すとしか書いていなかったわ。それと報酬は100万円だそうよ」

「100万円！？……胡散臭くない？」

「それでも事務所の口座に、どうやってかは知らないけれど前金で30万円入っていたし、行かない訳にはいかないでしょう」

さらに胡散臭さが増した。

これから一体どうなるのだろうか。

「あの手紙に依頼主について何か書いてなかったわけ？」

「何も書いていなかったわ」

あーあ。

これ絶対何かあるよ。

「話は変わるけれど、喉が渴いたわね。甘い飲み物が飲みたい気分ね」

「……今すぐ買って参りますのでしばしお待ちを」

いくら胡散臭い依頼でも依頼料が100万円です。

僕は給料が掛っていると察して自ら買って出る。

右腕骨折していて片腕しか使えないのになー。

「そう、よろしく」

僕達恋人だよね？

対等な関係なはずではないのか？

そんなことを思いつつ、僕はホームを駆け自動販売機へ向かう。  
が、

「甘い飲み物がない……！！！」



本当に最近ついていない。

なにか悪霊的なものに憑かれているのではないかと疑いたくなる。

仕方がないので、ホームを離れて、改札近くのキヨスクがある所へ行く。

\*\*\*\*\*

とりあえず、「冷た〜いおしるこ」と「冷た〜い甘酒」を購入した。

2本買うと、片腕しか使えない今の状態ではなかなかキツイので、ビニール袋に入れてもらった。

僕は急いでホームへ戻る。

と、ホームへの上りの階段に差し掛かった時、前にいる女子高生が後ろをちらちらと見る。

……僕？

目があう。

スカートを押さえる女子高生。

僕、そんなに変態に見えますか？

「はあ」

一つため息をつく僕。

僕はビニール袋を腕にかけて、ごそごそとポケットからスマートフォンを出す。

そして、画面を操作する振りをする。

そう、この機能。

画面以外何も見ていませんけど何か？だ。

知られざる携帯電話の機能だ。

僕はこの機能を使って疑われないようにして、階段を上りきった。そして急いで暦の下へ。

「ただいま」

僕は、ホームでつまらなそうに立っていた暦へ駆け寄る。

「おかえりなさい」

「とりあえず、「冷たいおしるこ」と「冷たい甘酒」を買ってきた」

「……なぜこの２種類なのかしら」

そんなことをつぶやきながら暦は甘酒の方を受け取る。

僕はおしるこを苦労して開けて飲む。

骨折してから気付いたが、片腕ではとても生活が大変だ。

缶のタブをあけるのも一苦労だ。

ゴクゴクゴク……

「あ、白玉が入ってる」

飲んでいたら急に食感が出てきて、ちょっとびっくりした。でも、なかなかうまい。

「あ、振るのを忘れたわ」

隣ではそんなことを暦が言っていた。

沈黙していたのか、甘酒。

フアーン

松本行きの電車がやって来た。

スーパーあずさだ。

そういえば、「あずさ」の由来は、松本市の近くを流れる「梓川」にちなんだものらしい。

そんなことを思いつつ、僕達は乗車した。

\*\*\*\*\*

座席は車両の前方、左側の列。

暦は京都旅行の帰りと同じように、僕に気を使ったのか、僕の左側に座った。

……それとも、窓側に座りたかったただけなのだろうか。  
暫くすると電車が動き出す。

「暇ね」

暦が窓の外を見ながら言った。

「確かに」

「では、1つ問題を出してもいいかしら」

暦がそんな提案をしてきた。

まあ、暇だから。

「どうぞ」

「では。この電車は男でしょうか、女でしょうか」

前にもこんなような問題を出された気がするのは気のせいなのだろうか。

いや、気のせいではないな。

「前もこれに似た――」

「男でしょうか、女でしょうか」

「……」

答える以外の選択肢を与えてくれない。  
仕方がない。

とりあえず答えるか。

「……女とか？」

「ぶー。残念。不正解です」

そういつてニヤニヤとした笑みを僕に向ける暦。  
いらっとくる。

ここまで同じ展開だ。

さて、どうなるか。

「……ちなみに、なんで」

僕は聞いた。

「男は駅（液）を飛ばすから」

下ネタかい！

全部同じか！

っていうか下ネタレベル上がってないか？

「液ってなんの」

僕はいつもは隠している暦への反抗精神をちょっとだけ出してみる。

さすがにこんな公衆の場では言わないだろう。

そう高をくくっていたが、暦はその僕の予想を軽々と裏切る。

「精液、よ」

自信満々、威風堂々、そして満面の笑み、やりきってやったという達成感の溢れる満ち足りた顔で言った。

「……」

「……」

前の3点リーダーは僕。

後ろの3点リーダーは、通路を挟んだ向こう側、僕の右隣に座っていたサラリーマンだ。

暦が結構大きな声で言ったため聞こえてしまったらしい。

なんかすみません。

僕は二度と暦に反抗精神を抱かないと心の中で誓った。

30分もすると窓の外の景色も、高層ビルが立ち並んでいた街並みが、ちょっとした畑などがある田園風景へと変わっていた。電車を使った遠出はこういうのがあるから良い。

ふと、暦が静かだと思った僕は隣を見る。

暦はいつの間にか寝てしまっていた。

眠っている暦はいつもの3割増しでかわいらしく見える。

恋人補正とがじゃなくて。

そういえば。

これは僕の持論なのだが、大抵の人間はマスクを付けると3割増しで格好良く見えたりかわいく見えたり美人に見えたりすると思う。口元が隠れるから。

僕は時間を確認する。

「まだもう少しかかるか……」

僕はそんなことを思いつつ、目を閉じた。

\*\*\*\*\*

昼頃、松本駅に到着した。

僕達は今、改札を出た、駅の外にいる。

「さて、到着したわね」

「それで、僕達はどうしたらいいのさ」

送られてきた手紙には現地についてから説明するとしか書かれていないし、誰から来たのかも分からない。

「それは問題ないわ。到着したらメールするよう書かれていたから。アドレスも書かれていたわ」

暦は僕にそう言って、携帯電話を操作する。

「なんかまどろっこしいね。待っていてくれればいいのに」

僕はそんな疑問を持った。

後にこの疑問はいろいろと驚いた上で解決することになる。

暦がメールを打ち終わった——と、その直後に来た返信によれば1時間後に来るということなので手持無沙汰になった僕達はずりあえず、昼食をとることにした。幸いなことに、食事処はそれなりにある。

「何食べる？」

和食、洋食、中華——いろいろある。  
ちなみに今の僕の気分は和食だ。

「久寿米木くんは何を食べたいのかしら」

暦は僕にさういう。

——洋食屋をガン見しながら。

「……洋食、かなー」

「あら、奇遇ね。私も洋食が食べたいと思っていたところなのよ」  
奇遇じゃないよ、暦さん。

僕の気遣いと思いやりの結果です。

あと、給料のためです。

言わないけどさ。

「じゃあ、そこ入ろうか」

僕は暦がガン見していた個人経営風な洋食屋を指さす。

「そうね。行きましょう」

僕達はもっていたキャリーバッグを近くのコインロッカーに入れて洋食屋へと足を運ぶ。

暦は僕が動き出すよりも先に歩きだす。

僕は暦の後を急いで追った。

暦はそんな僕を一瞥することも無く、店に入る。

店内はオシャレ感が滲みでていて、こぎれいな感じた。

「いらっしやいませー」

入るや否や、若い女性の店員がやって来た。

「2名様ですかあ？」

「ええ」

暦が無愛想に返事をする。

「今、昼時でえ、ちょっと混んでるんですよ。なのでえカウンター席になってしまいうんですがあよろしいですかあ？」



「ええ」

「ではこちらへー」

店員は暦の無愛想な返事に気を悪くすることも無く、僕達を席へ案内する。

案内されたのは、カウンター席の端で、目の前は厨房になっている。

中では少し気難しそうな店主らしきダンディズムを持ったおじさんが調理をしていた。

「ご注文がお決まりになりましたらあ、お声をおかけて下さあい」

そう言って店員は厨房の方へと行った。

「私、ああいう店員嫌いね」

だろうと思ったよ。

ところどころ語尾が伸びていたし、ちよつと馴れ馴れしい感じとか暦が嫌う所だ。

「まあ、そんなことを言わずにさ。何食べる？」

「私はクラブハウスサンドで。久寿米木くんは何を食べるのかしら」

うーん、何を食べようか。

正直、和食って気分だったし洋食を食べる気分ではない。

それに、なんとなくだが胃におしるが残っている感じがする。

そばが食べたいな……。

「——ざるそば……」

「は？」

「いや、なんでもない」

うっかり口に出してしまったか。

洋食屋でざるそばとか何を言ってるんだって話だよ。  
と、

「あるよ」

「え？」

突然声をかけられた僕はアホの子みたいな声を出してしまった。  
声をかけて来たのは、厨房の中にいたダンディーな店主だった。

「ざるそば。あるよ」

洋食屋なのに？

そんなことを思ったが、僕の胃は既に和食しか受け付けない胃になっている。  
っている。

「……じゃあ、ざるそば一つ。あと、彼女にクラブハウスサンドを」

「あいよ」

10分後——

「ざるそばとクラブハウスサンド」

そういつて店主が出来た料理を置く。  
早いな。

「あ、どうも」

あまりに唐突且つそっけない店主に僕はそれしか言えなかった。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

僕はそう言つて料理に手を付ける。

ズルッ。

サクッ。

「あ、うまい」

「あら、おいしい」

僕達のその言葉に背を向けた店主がニヤリとしたのを僕は見逃さ  
なかった。

素直じゃないな、店主。

\*\*\*\*\*

ぶつきらぼうな店主の洋食屋で昼食を食べ終えた僕達は再び駅へと戻る。

依頼主との待ち合わせ場所が駅だからだ。

「そろそろ時間ね」

暦がそう言った。

確か待ち合わせは1時間後だったはずだ。

「一体どんな人なのやら」

「それは私も気になるわね」

教えてもない口座に勝手に前金30万円を振り込む。

依頼料として100万円を出す。

手紙には名前も書かない。

依頼内容も書かないで直接伝えると言う。

分からないことだらけだ。

胡散臭いことこの上ない。

一体どんな人物なのだろうか。

そんなことを考えていると、

「予想でもしてみましようか」

と、暦がそんな提案をしてきた。

予想？

賭けてこと？

「何か賭けるの？」

「ええ」

「なにを」

「そうね……相手の好きな所を言うというのはどうかしら。具体的な事はなにも話したことも無いのだし、どうかしら」

うわー。

恥ずかしいな、それ。

普段じゃ絶対言わないよ。

でも、まあ――

「それくらいなら、いいよ」

勝てばいいんだ！

僕も気にはなっていたし。

告白してきたとき、電話で好きと入っていたけれど、具体的にどこがという話にはぐらかされたような気がする。

それに暦の僕に対する態度が異様に冷たい！

本当に恋人かどうか疑いたくなるくらい。

「では、私から言うわね。……そうね、依頼主は男性。40代」

なるほど。

まあ、無難な予想だろう。

さて、僕も考えなければ。

「そうだねー……。依頼主は女性じゃないかな」

まあ、これは希望。

「で、20代」

これも希望。

出来れば美人。

言わないけどさ。

「なるほどね。では次に依頼の内容なのだけれど――そうね。わざわざ東京から呼び寄せたのだから地元の探偵事務所ではいけない理由があると思うのだけれど……。まあ、依頼内容はいいわね。どちらが勝ちか判定が付けにくいわ」

「了解」

僕はそう言いながら、考える。

わざわざ東京から探偵を呼ぶ――。

これは僕も妙だとは思っていた。

有名な探偵ならまだしも、無名な僕達を呼びよせるなんて……。

地元の探偵ではいけない理由でも何かあるのだろうか。  
と、

「おまたせしました」

駅を背にしていた僕達の後ろから声をかけられる。

どうやら依頼主は電車で来たようだ。

僕と暦が振り返る。

そして、依頼主の顔を僕は見る。

賭けはどちらが勝ちか確認するためだ。

声は男の声だった。

僕の負けか。

暦の好きなのところか！。

なんて言おう。

そんなことを考える。

しかし、その依頼主の顔を見た途端、「そんなこと」を考えては  
いられなかった。

目の前には40代後半、あるいは50代前半。

そんな年齢の男女がいた。

依頼主は1人ではなく2人だった。

そして僕はこの人達を知っている。

僕はこの目の前にいる2人を知っている。

感覚がそう言っている。

でも、誰だ？

この男は誰だ？

この女は誰だ？

この人達を知っているが知らない。

知っているような気がするが知らない。

気持ちが悪い。

一体誰だ、あなた達は。

「久寿米木くん、どうしたのかしら。顔色が悪いようだけど」

となりの暦が僕のことを珍しく心配そうに見つめる。

「いや、なんでもない」

僕はそう言うことしかできなかった。

「なんでもない様には見えないのだけれどね」

暦が肩をすくめる。

そんなやり取りをしている僕達に男の方が言う。

「遠い所、呼び出してすまないね」

今度は女の方が言う。

「でも、どうしても来て欲しかったのよ」

僕はこの声も知っている。

どこかで聞いたことがある。

心臓の鼓動が速くなっているのが解る。

知っている。

この人達を知っている。

しかし思い出したくない。

そんな僕の心情などお構いなしに男は言う。

「そちらの彼女の方は初めまして、だね。僕は久寿米木。久寿米木  
修。<sup>おむ</sup>春希の父です」



**第12話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ**

どーも、よねたにです。

大分話が暗くなってしまいました。

コメディーなのに。

さて、とうとう春希を捨てた両親が出てきました。

続きも書けていないのにどうなることやら。

感想や評価、お待ちします。

では、また。

### 第13話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ

状況説明。

怪しい依頼の手紙が来て、長野の松本駅まで来た。

すると、その手紙の送り主、つまり依頼主が僕の親で。

僕の右眼を恐れ、僕を捨てた両親で。

その両親が今、目の——いや、眼の前に。

約13年振りの再会だ。

全く、最近付いていないと思っていたけれど、ここまでとは。

それも13年振りって……。

不吉すぎる！

「久寿米木修おさむです。それと妻の——」

「有紀ゆきです」

その約13年振りに再会した両親は、今、僕の隣に立っている暦に初対面の挨拶をしていた。

「ご丁寧にも。私は月村暦です。久寿米木くんとお付き合いさせていただいています。それはもう昼となく夜となく——」

「だー！もう何を言っているのさ！」

たまらず僕は暦を止める。

何て事を口走ろうとしていたんだよ！

って、そんなことより——

「僕の……親？」

両親が僕を捨てたのは僕が小学1年生の時だ。

正直、両親の顔は覚えていない。

だから、この人達が僕の両親だと自称しても何の確証にもならない。証拠がない。

「僕達にも積もる話があるし、君達にも言いたい事が山ほどあるだろう。こんなところでは話しづらいだろうしとりあえず、僕達が今住んでいる家にでも行こう。いいかな？」

男が言った。

まあ、それくらいならいいだろう。

依頼主には間違いないだろうし、なにより駅前で話すような話ではない。

「分かりました」

「ええ、いいわ」

僕と暦はそう言い、

「では、タクシーでも捕まえてこようか。その方が電車より早い。もちろん、代金は僕達で持つから」

そうして、僕達はタクシーで自称久寿米木邸へ向かった。

\*\*\*\*\*

どれくらい車に乗っていただろうか。

だいたい20分と言うところか。

ようやく僕達は目的地へと着いた。

僕は車を降りる。

「ふう」

なかなか息が詰まる。

だれも何も話そうとしないから空気が重いことこの上なかった。

今、目の前にはかなり大きな家——豪邸と言ってもいいような家がある。

表札を見る。

久寿米木

そう書かれていた。

どうやらこの人達は久寿米木さんではあるようだ。

呼び方を変えよう。

男の方——修さんはタクシ一の運転手に代金を渡すと車から降りる。

「ようこそ、我が家へ」

修さんはそういつて僕達の前に出て家へ入って行った。

そのあとを有紀さんが続く。

僕と暦は顔を見合せた後に、家へと向かった。

「へえ……なかなか立派な家ね」

暦はそう言った。

僕も同感だ。

まだ玄関だが、かなり立派だ。  
床が大理石で天井も高い。

「さあ、中へどうぞ」

有紀さんが手招きする。

僕達は奥へと向かう。

「ほー……」

中はリビングでとても広い。

30畳近くあるのではないだろうか。

「そこへ座って。今、紅茶を入れるから」

有紀さんはそう言って台所——いや、キッチンへ。

台所って感じじゃないな。

僕達はすすめられた通り、テーブルへ。

今の構図は僕と暦が隣同士で座っていて、僕の真正面に修さん。  
恐らく、その横に有紀さんが座るのだろう。

しばらくすると、有紀さんが紅茶を持ってやって来た。

「どうぞ」

そう言いながら、有紀さんは修さんの隣の席へ。

「ありがとうございます」

暦が律儀に答える。

本当にこういう状況のときだけ真面目になる。  
普段からちゃんとしていてくれればいいのに。

「さて」

修さんが言う。

「多分、春希は今、僕達が本当に親かどうか疑っているのだろう。  
まあ、状況が状況だ。仕方がないと言えば仕方がないだろう」

まさしく。

おっしゃる通りで。

「有紀——」

修さんは突然有紀さんの名前を呼んだ。  
すると有紀さんは何かを机の上へ置いた。  
それは——

「母子手帳……」

僕がつぶやくように言う。

有紀さんが置いたものは母子手帳だった。  
僕はそれを手にとってページを開く。

中には僕の名前と様々な情報が書かれていた。

「信じてもらえたかしら」

有紀さんが言う。

いや——母さん、か。

「……」

僕は無言でうなずいて、母子手帳を返した。

「では本題へ入ろう」

修さん——父さんが言った。

が、僕にはその前に聞きたい事があった。

「ちょっといいかな」

「なんだ、春希」

「本題に入る前に……どうして僕を——捨てたのか、聞いてもいいかな」

僕は聞いた。

正直、もう13年も前の話になる。

怒りはない。

ただ純粹に聞きたかった。

「そうだな。それを知る権利がお前にはある」

父さんは言う。

「怖かったんだ。僕も、有紀も」

そう言って、父さんは母さんと視線を合わせた。  
予想はしていた。

両親の顔は覚えていなくても、僕が未来を見ることが出来ると告白し、その事実を目の当たりにした時の両親の目は今でも覚えている。腫れものでも見るような眼だった。

子供に向ける眼ではなかった。

「……なるほどね。ありがとう、話してくれて」

「いや、僕達こそすまなかった」

「本当にごめんなさい」

両親はそう言って僕に頭を下げた。そして、こう続ける。

「ただ、今では後悔しているんだ。なぜあの時、子供を見捨ててしまったのか。春希だって不安だったろうに、どうして支えてあげることが出来なかったのか、と」

そんな風に思っていたのか。まったく考えもしなかった。

子供を捨てたら、その子供のことを考えないでそれっきりなのかと思っていた。

「ここからは本題を交えて話そう」

そう前置きをして父さんが言う。

「春希を――捨ててから、1年ほどして後悔し始めたんだ。それで、今さら親面は出来ないが春希の眼を研究して直すことはできないか」と思い始めたんだ。春希は知らないだろうが、それでも研究者なん



でね、昔から」

初耳だ。

親が研究職の人間だなんて知らなかった。

「だから、僕は研究所を立ち上げたんだ。SH研究所を――」

SH研究所。

これには聞きおぼえがある。

つい最近聞いた。

僕は父さんに言う。

「SH研究所って……この間、全焼した？」

「ああ。その研究所だ。そこで僕達の知り合いの研究者を何人か集めて、春希の未来を見る眼について研究していたんだ。しかし、立ち上げてから5年くらいたったある日。僕達は――研究所を追放された。理由は、僕達は春希の眼を治すために研究をしていたけれど、彼らは春希の眼の存在を知り、それを如何に利用するかを考え始めたからだ。僕達は2人だけ。どう頑張っても、勝ち目がなかった。それから、僕達が抜けたSH研究所は、表面上は世の中の為の研究をしているが、研究所の上層部では春希の眼を研究していたんだ。悪い意味でね。未来を見るというのは莫大な利益を生む。そのため、警察の上層部や役人なんかとも繋がりを持ち始めてね。だから、研究所全焼のニュースもあまり細かい情報は流れなかったんだ」

あの研究所にこんな裏話があるなんて知らなかった。  
なるほど。

父さん達が作った研究所だから僕について情報があったのか。

「それで、今回春希達を呼んだのは他でもない。今春希は、研究所にいた上層部の人間に狙われている。つまり、僕達と最初に研究していて、僕達を追い出した人達だ。いまさら親面をしても遅いのは自分たちでも分かっているつもりだ。これはただの自己満足に過ぎない。それでも僕達は春希が心配なんだ」

父さんは言った。

随分と僕を捨てたことを後悔しているらしい。

今まで僕は、僕を捨てた両親なんてまともに考えようとしなかった。

でも……少しは歩み寄るべきなのかもしれない。

「分かった。わざわざありがとう」

「お礼を言うのはこっちの方よ、春希。私達の勝手に東京からわざわざ来てもらったりして。本当は電話やメールで済むような内容なのに。月村さんも付き合わせてしまっでごめんなさいね」

と、母さんは僕と暦に謝る。

「いえ、私は自分の意志で来たに過ぎません」

と、暦は母さんに言った。

こういうときだけちゃんとしている。

「そう……。あ——」

母さんは暦に返事をする、何かを思いついたような声を出した。

「お父さん、ちょっと飲み物を買って来てくれないかしら。すぐそ

このコンビニでいいから。甘いものが良いわね」

「なんで僕が――」

「いいから、行ってきなさい」

「……はい」

母さんは父さんに飲み物を買って来るように命令――もといお願いした。

お願いされた父さんはコンビニへ行った。

すると、リビングは僕、暦、母さんの3人になった。

「さて、と」

母さんは言った。

「ここからはあの人が話さなかった話と、あの人が話したがないだろうな――っていう話をしましょう。月村さんも交えてね」

「はあ」

「……」

暦が珍しく気の抜けた返事をして、僕は無言で応える。

「お父さん、ただ春希を捨てたことを後悔しているとしか言っていなかったけれど、本当のところはかなり、と言うのが前に着く程後悔しているのよ。現に今でも春希の眼について研究を続けているし。それに私達が作ったSH研究所。そのSHはね、「Spring

Hope」の略……つまり春希の名前から来ているの。名前を考えたのもお父さんなのよ？」

それは……知らなかった。

「これがあの人が話さなかった話。で、話したがない話っていうのは——まあ、私もあまり話さない方が良いのか基は思うけれど、春希ももう大学生だしね。いつかは気がつくことよね。それは——」

母さんは言う前に僕が言う。

僕には思い当たることが1つあった。

「お金のこと？」

「——って、気が付いていたの？」

「それは、まあ」

今、僕があの一軒家で生活が出来ているのは僕を引き取ってくれた親戚の人が仕送りをくれているからだ。

家の税金や大学の学費なんかもそうだ。

僕はそういうのは働いて返しますと言っているけれど、返さなくていいといつも言われていた。

その理由を聞いても、要領を得ない。

となると——。

「私達の——罪滅ぼしと言うのもあるのかもしれないわね。私達には春希の親としてはそれくらいのことしか出来ないもの。……親戚の大村さんには、毎月春希の為のお金を送っていたのよ。だから、春希は普通になにも心配しないで生活してね。それと依頼料の10

0万円もちょっと受け取ってね？」

親として、何も出来なかった人達の罪滅ぼし、か。

僕の為に後悔してくれた。

僕の為に眼を治そうとしてくれた。

僕の為にお金を送ってくれていた。

僕の為に想っていてくれた。

僕の為に――。

「ありがとう」

僕はそう、言うことしかできなかった。

「いいのよ。……さて、それでは本題へ入りましょうか」

……は？

なに、どういうこと？

良い話で終わったんじゃないの？

このまま場面転換してさ？

「ここまでは春希だけの話よ。このあとは月村さんも交えて、ね」

何を話すというのだろうか。

嫌な予感しかない。

そんなことを僕が思っていると、母さんはぐいっと身を乗り出して言った。

「月村さん。いえ、暦ちゃん！……春希とはどこまで行っているの？」

今日一番生き生きして見える……。  
僕の話よりも。

\*\*\*\*\*

「ただいまー」

父さんが帰って来た。

「――と言うような感じで、久寿米木くんとお付き合いさせていた  
だいています」

「なるほどねー。それで春希のことが好きになったのね。それにし  
ても何もされていないなんて、春希はED――あら、おかえりなさ  
い」

母さんが返事をする。

僕はようやくこの居心地の悪い空間から解放された。

というのも、母さんが僕と暦のことを眼ほり葉ほり聞いて来て、そ  
れに暦が事細かく答えるという、僕としては恥ずかしくて死んでし  
まいたくなるような状況が15分近く続いていたからだ。

しかも途中で生々しい話になったりもしていたし。  
っというか母さん、最後何を言いかけたよ。

「買ってきたよ、甘い飲み物」

父さんはそう言って、「冷たーい甘酒」と「冷たーいおしるこ」  
を2本ずつコンビニのビニール袋から出す。

「……なんでその2種類なのよ」

母さんがじと眼で父さんを見る。

「だって甘い飲み物って言うから」

2人がそんなやり取りをしていると、隣にいた暦が顔を近づけて小声で言う。

「やっぱり親子なのね」

「……どういことさ」

「久寿米木くんだって「冷た〜い甘酒」と「冷た〜いおしるこ」の2種類買ってきたじゃない」

あー。

駅のときか。

「こういう所を見ていると、やっぱり久寿米木くんとお父さんには同じ血が流れていると思ってしまうわね」

「放っておいてくれ」

僕はそう言うことしかできなかった。

反論したいような、反論したくないような。不思議な気分だった。

「あら、何の話？」

母さんが父さんを口でねじ伏せ終えて聞いて来た。  
なんかこういう構図はどこかで見たことがある。

……あ、僕と暦か。

「いや、なんでも」

僕はそっけなく言った。

その後は最初の様な重苦しい空気ではなくなった。

僕達がいろいろと厄介な出来ごとに見舞われた話。

父さん、母さんの最近の事。

僕達の事。

暦の事。

色々話した。

13年間の空白を埋めるかのように。

そんな時間はあっという間に過ぎて、僕達は帰ることになった。

僕達は今、玄関を出て、母さんが呼んだタクシーに乗り込むところだ。

「またいつでも来なさい。それと、本当にいろいろと迷惑をかけるな、春希」

「ぐすっ……ひっく……ぐじゅぐじゅ……はるきい……」

父さんは言った。

母さんはなぜか泣きじゃくっていて話を出来る状態ではない。

「いいよ、別に。慣れたし」

「そうか……。それと、今まで聞かなかったが」



父さんはそう前置きをして言う。

「その腕はどうしたんだ？」

「……運の悪い日は何をしようと運が悪いとしか言いようがない出来ごとに見舞われてね」

僕はそう言って、暦とタクシーに乗り込んだ。

\*\*\*\*\*

時刻は20…00。

僕達は今、帰りの電車の中にいる。

行き程車内は人がいない。

ガラガラと言ってもいい程だ。

僕達の座席は右列。

そして、暦は僕の左側に座っている。

どうやら今までも僕に気を使ってくれていたらしい。

今回は僕が窓側だ。

「久寿米木くん」

暦が僕の方を向いて言う。

「なにかな」

「私はね、好きな人には意地悪な事をしてしまうタイプなのよ」

暦は唐突に言った。

「知ってるよ」

「そう。……だから、他の人とは「好き」という表現の仕方が違うと思うけれど」

大分ね。

「私は久寿米木くんのことが好きなのよ」

「……ありがとう」

「久寿米木くんは私のことどう思っているのかしら」

「もちろん好きだよ」

僕は暦の顔からちよつと目を逸らしながら言った。  
照れるから。

「そう。……昼間に、賭けをしたじゃない」

依頼人はどんな人か当てるってやつね。  
結局想定外な人物が来ちゃったけど。

「したね」

「うやむやになってしまったのだけれど、この際だから、お互いどこが好きなのか言いましょう」

決定事項かい。

言いま「しょう」ってさ。

「まあ、いいよ」

「では、私から言うわね。私は久寿米木くんの全てが好きよ。優しい所、何か起こるとおろおろする所、ボケに突っ込みを入れる所、でもやる時はやってくれる所——全て、ね」

「ありがとう？」

途中褒められている気がしないのは気のせいかな？  
ありがとうが疑問形になってしまった。

「久寿米木くんは？」

「僕も暦の全てが好きだよ。厳しい所、弾に優しい所、サディステイックな所、下ネタが好きな所、僕のことを好きだと言ってくれる所——全て、ね」

「途中は褒められている気がしないのだけれど」

「まあまあ。……ところでどうして急に？」

「私達、一応付き合っているじゃない。でも、それらしいことを何もしていなかったから」

なるほど。

すこし不安に思った、と。

という僕も少しばかり不安だったけどさ。  
ホントに付き合っているんだよね？って。

「久寿米木くん」

「ん？」

「帰ったらデートをしましょう」

「そうだね。そうしよう」

そう言って僕達は前を向いたまま、何となく、本当に何となく、手を繋いだ。

「……」

「……」

暦が左側に座ってくれてよかった。  
右腕は骨折中だし。  
と、そんなことを考えていると

「ん？」

「どうかしたの、久寿米木くん」

「いや、ちょっと」

そう言って僕は暦と繋いでいた手を離す。

「メールが来た」

僕は曆に一言言って、スマートフォンを操作する。

「誰からなのかしら」

「うーん……しずかからだ」

「あの雌豚風情が……」

「え？」

「なんでもないわ。それで何と書いてあるのかしら」

「えーと、「今、春希の従姉だという人が来てる！早く結婚式で使う手紙添削しろって言って来て超大変！早く帰還されたし！」……」

「あったわね、そんなもの」

「忘れてたー！」

こうして僕達を乗せた電車は面倒事が待っている事務所へと近づいていく――。

本当に最近ついてないな……。

**第13話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ**

どーも、よねたにです。

とりあえず運の悪い日は――編はこれで終わりです。

次は明るめの話になるように頑張ります。

でも次回はいつになるのでしょうか……？

では、また。

**第13・5話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ**

「なにこれ」

「結婚式で読む両親への手紙」

「ふざけてんの？」

「ふざけてないわよ」

現在の状況を説明。

今日はまだ8月17日。

時刻は23・00。

場所は探偵事務所。

その理由は、数時間前に来たメールだ。

つまるところが――

「さっさと手紙添削しなさいよ！」

と言うことだ。

「僕はもう疲れているんだよ！寝たいんだよ！分かってる？もう夜中だよ、姉さん」

暦としずかが既に帰った事務所内。

事務所内の依頼人用ローテーブルを挟んだ2つのソファーに、僕と向かい合って座っている姉さん――と言っても従姉だけれど、香澄が座っている。

大村香澄。

僕がいろいろとお世話になっている親戚の家の長女。

現在29歳。

割と年が離れている。

見た目なんかは結構若づくりをしているからそうはみえないかもしれないけれど。

その姉さんが、30目前にしてようやくゴールインを果たしたという訳で。

「んなこと言っても結婚式、明後日なんだよ!? 悠長なこと言われるか!」

明後日結婚式を迎える。

まあ、僕は行かないけれどさ。

本来ならまだ骨折で、絶対安静状態で病院にいるはずだから欠席で返事出しちゃったし。

「……まあ、その言い分は分かったし、今日までだって言っていたのに忘れていた僕にも非があることは認めよう。でもさ、この——この手紙はなんだよ!」?

僕は姉さんに手紙を突き付ける。

「だから、両親への手紙に決まってるじゃん!」

「こんなふざけた内容の両親への手紙があってたまるか!」

僕は香澄が誠心誠意頑張って作ったと豪語する手紙を音読する。

「——お父さん、お母さん、元気ですか? 私は元気です。今日まで私を股間の如く大切に育て上げてくれて本当にありがとうございます。いま



した。お母さん——私が小さい頃、風邪にかかったときはマジでヤバイ薬を飲ませて私を元気にしてくれましたね。お父さん——……いろいろありましたね。2人には沢山心配をかけて来ました。そんな私もようやく結婚式を挙げることが出来ました。でも、結婚しても私はお父さんとお母さんの営みによって生まれた娘です！いつまでも仲良く元気でいて下さい。これからはそんな2人を見習って、1人前の家庭を築き上げたいと思っています。かしこ——」

「我ながらそこそこいい出来だと思っているんだけど」

「どこがだよ！冒頭から「元気ですか？」って、元気に決まってるじゃん！目の前にいるんだから！「私は元気です」？知ってるわ！」

「分かった。そこだけ直せばいいんでしょ？」

「まだあるよ！」「股間の如く大切に」って例えが悪いわ！せめて金——」

「たま？」

「——違う！これじゃだめだ。せめて……宝物とかそういう例えにしない！」

「はいはい……よし、出来た」

「出来てない！あと「マジでヤバイ薬」ってなんだよ！？」

「だから良く効く凄い薬って意味」

「そう書けよ！危ない方のクスリかと思うよ！親戚連中、お母さん

のこと、じと目で見るからね!？」

「注文が多い……あい、でけた」

「まだ!あと、お父さんがかわいそうなくらい内容薄い!」

「それは……仕方ない」

仕方ないって……。

もうちょつと頑張つてよ。

「なんとかしろ」

「分かったよ……はい、終わり。じゃ——」

そう言つて姉さんは帰ろうと腰を浮かす。  
が、僕がそうはさせない。

「終わってない!その後の「お父さんとお母さんの営みによって生まれた娘です」って生々しい言い方すんな!お父さんお母さん恥ずかしすぎるよ!」

……結局完成したのは2…00を過ぎた頃だった。

手紙が完成した今思うと、僕のテンションがおかしいな……。

### 第13. 5話 運の悪い日は何をしようと運が悪いと言っても過言ではないのだ

どーも、よねたにです。

短くて済みません。

とりあえず、番外的な話と言う意味で読んでいただければと思います。

さて、次回については何も考えていません。

まあ、近いうちに出せればとは思っています。

評価や感想、指摘等ありましたらよろしく願います。

では、また。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3621y/>

---

未来探偵クスメギ

2011年12月2日17時45分発行